

学位請求論文

河南台地における石塔造立に関する研究

和 泉 大 樹

## 論文要旨

### 序章

本論は、大阪府南河内郡太子町、河南町、千早赤阪村を中心とする地域、地理学上、河南台地と呼ばれている地域における石塔造立史について論じたものである。

石塔は、文字通り、石で造られた塔のことであるが、石造物あるいは石造美術と呼称されたりもするもので、その多くは仏教に関連する造形物である。石塔を学術的に扱う分野は、考古学、文献史学、美術史学など複数の分野にわたるが、近年、考古学におけるアプローチが多く成果を挙げている。

本論についても考古学的なアプローチを中心に論じようとするものであるが、当該地域の石塔研究については、考古学的なアプローチには限界がある。すなわち、当該地域には凝灰岩の石切場が存在することから、凝灰岩を用いた石塔が多く造立されているが、この石材は極めて軟質であり、風化磨滅が顕著であるため、当時の形態を留めていないものが大半である。このように物質的に得られる情報が不十分な状況であるため、今日まで当該地域の凝灰岩層塔の研究は立ち遅れたのである。しかしながら、残存状態が良好とは言えないという理由で当該地域の貴重な資料を放置する訳にはいかないであろうし、何らかの形でこれらを評価する必要があることに異論はないと思われる。

そこで、本論では当該地域の石塔が比較的密に分布するという特徴、これらが群という単位でほぼ同時期と考えることが可能であるなどの諸特徴により、群として捉えるという観点に重きを置き、これまで評価されてこなかった石塔をもその射程に捉えることに努めた。且つ、石塔造立史という視点で当該地域における石塔を時系列で整理し、当該地域の歴史を復元するという眼差しにより論じようと考えた。従来までの石塔研究は、残存状態の良好な石塔を選定し、数値データを解釈することで結論を導くというものであったが、本論では石塔造立史から地域の歴史を読み解くというダイナミックな視点をもって論じることに特徴がある。

第1章「はじめに」では、当該地域における研究学史を整理するとともに、本論の目的、意義を記した。

第2章「二上山麓の信仰世界」では、凝灰岩の石切場が所在する二上山麓について弥勒という共通のタームが認められることを指摘した。

『万葉集』などにも詠まれている二上山は、雄岳と雌岳が寄り添う様を呈するが、古来



より、このような形状を呈する山や円錐形の形状をした山などは神体山として神聖視された。二上山も同様に神聖視されていたと考えられる。本論では、山の形状による神聖視を問題とはせずに、山麓に展開した聖徳太子に関する施設、すなわち、太子御廟や叡福寺などが所在するということから論を開始させた。まず、聖徳太子妃である橘大郎女が天寿国に往生された太子の様子を見たいと進言したことにより、推古天皇が采女らにつくらせたと伝えられている「天寿国繡帳」に関して美術史の分野では、その原形と画題が弥勒菩薩の上生、下生を表現したと結論する論考があることを確認した。次に石光寺から出土した白鳳時代の二上山産出の凝灰岩で造られた弥勒石仏について触れた。

また、鹿谷寺跡・岩屋に刻まれた三尊像について、とりわけ、鹿谷寺跡のそれについては、既に藤澤一夫により弥勒三尊である可能性が指摘されているが、そのことについて羽曳野市に所在する古代寺院である野中寺には弥勒菩薩半跏像が残ることから藤澤の説を補強すると同時に、池田末則が指摘する鹿谷寺の読み方の「ろくたんじ」は「みろくたに」が転音して残ったものではないかとの説を確認した。更に地名的観点から、二上山は竜峯とも呼ばれているが、弥勒信仰の山岳寺院には竜の信仰が絡み合うという藤澤の指摘も改めて確認した。

以上のように、本章では、以降、当該地域で展開することとなる石塔の石材産出地である二上山麓について、弥勒という共通のタームが認められることを指摘した。

第3章「河南台地北部における石塔造立史」では、南河内郡太子町に所在する聖徳太子御廟付近に造立された凝灰岩製層塔群について、時期的変遷を整理し、これらが太子御廟に極めて近い範囲でほぼ同時期に造立されていること、群として捉えることができる可能性を指摘した。

冒頭にも記したが、凝灰岩は軟質であるため残存状況が良好でないことが多いが、本章で対象とした凝灰岩製層塔についてもそうであった。そのため、実測図面を作成し、数値データを得ることが困難であったので、これらが所在する太子町により過去に計測された数値を参考として論じた。

まず、太子御廟付近に所在する①鹿谷寺跡層塔、②岩屋層塔、③叡福寺層塔、④西方院層塔、⑤東福院墓地層塔、⑥良忍上人墓塔、⑦願蓮上人墓塔、⑧蘇我馬子墓塔についてその概要を確認した。そして、これらの時期を検討する指標を年号が刻まれているなど、造立時期が明らかである龍福寺層塔、於美阿志神社層塔、般若寺層塔、談山神社層塔に求め、以下のような時期的変遷の指標を定めた。すなわち、「奈良時代、天平勝宝三年（751）

には、降棟を造り、軒裏は深く掘り込んで傾斜させる（木造建築の屋根のように表現される）」、「平安時代末には、龍福寺のように軒裏を深く彫り込む表現は見られない。垂木形などは見られない。軒は厚く造られる。屋根はおだやかに反る様を呈する」、「鎌倉時代前半、延応2年（1240）には、軒裏には垂木を表現する。軒は厚く造られる。屋根部はおだやかに反る様を呈する。また、この時期以降、花崗岩製層塔が増加する」、「鎌倉時代後半、永仁6年（1298）には、軒裏には垂木を表現する。軒は厚く造られる。屋根の反りは顕著」という形態的変遷の指標である。この指標に照らし合わせて、太子御廟付近の層塔群の時期を①鹿谷寺跡層塔と②岩屋層塔については、系譜上別の所産であり奈良時代の時期を比定。④西方院層塔、③叡福寺層塔に木造建築の名残が看取される古い要素が残り、平安時代末から鎌倉時代前半、⑤東福院墓地層塔、⑥良忍上人墓塔、⑦願蓮上人墓塔、⑧蘇我馬子墓塔については、鎌倉時代前半と考えた。

そして、この層塔群は次章で記す寛弘寺周辺に造立された凝灰岩製層塔群の造立に影響を与えた可能性があることが推測できることを指摘した。

第4章「河南台地南部における石塔造立史」では、南河内郡河南町に所在したと考えられる寛弘寺周辺に造立された凝灰岩製層塔群について、造立時期について確認するとともに、今後の課題として、寛弘寺および層塔群成立の要因を検討するうえで、当該地域を含む河内地域で積極的に宗教活動をおこなっていた叡尊について視野に入れるべき必要性について言及した。また、寛弘寺については当該地域においてある程度の勢力を有した寺院であった可能性が推測できることについても指摘した。

寛弘寺は現在、廃寺となっており、その存在は文献資料によって復元されるが、これらにより12世紀前半から15世紀後半という存続時期について再確認した。次に①寛弘寺墓地、②鴨習太神社、③観音寺層塔、④慈眼寺層塔の層塔群について、その概要を確認するとともに、時期を検討したがその際、慈眼寺層塔に薬研彫によって配された種子に着目し、これらを鎌倉時代中期と考えた。

そして、これら層塔群の造立された時期に当該地域を含む河内地域で積極的に活動した叡尊について触れた。叡尊は弥勒信仰や聖徳太子信仰を持っていた。叡尊は、醍醐寺で密教を学んでいるが、同様に醍醐寺で学んだ覚禅の『覚禅抄』には弥勒浄土と造塔に関する記述があり、叡尊には造塔と弥勒信仰の関連、また、自身も詣でている聖徳太子御廟付近の凝灰岩製層塔について知見していたと推測できること、更に寛弘寺が律宗寺院であることなどから、寛弘寺および周辺の層塔群成立の要因を考える際の重要な検討課題であるこ



とを指摘した。

また、寛弘寺層塔群は当該地域の有力氏族の本拠地には造立されず、寛弘寺周辺に集中分布することから、これらの範囲は寛弘寺の勢力圏内であったのではないかと考えた。

第5章「不本見神社層塔について」では、この層塔は造立集団あるいは個人の信仰心を顕著に反映する層塔で、時代を経るに連れて造立単位の小規模化が看取されることを指摘した。

この層塔は、南河内郡千早赤阪村に所在する凝灰岩製の層塔で、初層軸南面に不空成就を彫刻するが、当該地域におけるこれまでの凝灰岩製層塔の流れにあって、異質な存在である。一般に像容として彫刻がなされる場合には、その像容への厚い信仰心を推測するのであるが、この思考からは不空成就、つまり釈迦への厚い信仰心を読み取ることができる。これまでの凝灰岩製層塔については、このように造立目的を顕著に示す事例は見当たらず、当該層塔は特異である。この特異性について、造立単位の小規模化が見出せる拡散期の層塔として評価した。

第6章「河南台地における花崗岩製層塔の流入」では、南河内郡河南町に所在する高貴寺層塔と以前に南河内郡千早赤阪村に所在した廃浄土寺層塔の2基の花崗岩製層塔について、当該地域における凝灰岩製層塔の造立にピリオドを打った塔であると評価できることを指摘した。

高貴寺層塔は永仁5年（1297）、廃浄土寺層塔は嘉元4年（1306）の年号を有するほぼ同時期の所産であるが、巨視的に見れば、これら両塔が造立された時期は伊姓や橘姓、平姓を有する石工など、多くの石工が登場してくる時期であり、彫刻技術も向上してくる。すなわち、花崗岩という硬質石材を用いての造立がトレンドとなる時期であり、当該地域においても、全国的傾向が浸透してきた様子を看取できる塔であると評価した。

第7章「河南台地南部における石塔造立史—石造五輪塔について—」では、当該地域に造立された石造五輪塔について、時間的順序について確認するとともにグループ化し、寛弘寺、すなわち、西大寺律宗の影響化に造立された五輪塔があることを指摘した。

まず、当該地域に見られる①森屋惣墓（寄手塚）五輪塔、②森屋惣墓（身方塚）五輪塔、③千早惣墓五輪塔、④東阪墓地五輪塔、⑤千早城跡五輪塔、⑥寛弘寺墓地五輪塔の6基の五輪塔について、その概要を確認した。次にこれら6基の五輪塔について正和4年（1315）の年号を有する寛弘寺墓地五輪塔を基準として、地輪などから時間的順序を検討、①森屋惣墓（寄手塚）五輪塔→⑥寛弘寺墓地五輪塔→③千早惣墓五輪塔→②森屋惣墓（身

方塚)五輪塔→④東阪墓地五輪塔→⑤千早城跡五輪塔という時間的順序を考えた。ここから、①森屋惣墓(寄手塚)五輪塔については空風輪が突出して大きく形態がイレギュラーである、⑤千早城跡五輪塔については水輪に種子バンを刻む、色調が薄いピンク色を呈するため御影石と考えられるなどの理由により異なるグループと考えた。残る⑥寛弘寺墓地五輪塔、③千早惣墓五輪塔、②森屋惣墓(身方塚)五輪塔、④東阪墓地五輪塔の4基については、基壇を有するという共通項が見られる点、とりわけ、⑥寛弘寺墓地五輪塔と③千早惣墓五輪塔については、最下位の切石基壇の高さが少し異なるだけで、残りの部材はほとんど同じ高さで揃うことから同様と考えた。そして、⑥寛弘寺墓地五輪塔については、「六道講衆造立之／正和四年卯乙卯月八日／願主八斎戒敬念」という銘文から律宗の斎戒衆、敬念らの造立によることが指摘されているため、規格がほぼ同様である③千早惣墓五輪塔についても、律宗の影響化による造立であると考えた。②森屋惣墓(身方塚)五輪塔と④東阪墓地五輪塔はその大きさが異なる点で③千早惣墓五輪塔ほど積極的に評することはできず課題としながらも、基壇を有する点で同グループに含めて考えた。

第8章「森屋惣墓五輪塔に関する一考察」では、森屋惣墓の五輪塔とその伝承について考察した。森屋惣墓には、楠木正成がこの地の戦乱で命を落とした兵を供養するために建てたという伝承が残る石塔がある。また、ここには鎌倉時代後期から室町時代初期にかけての10基以上の五輪塔残欠資料が存在するが、この時期にこの地で多数の石塔を造立することができる人物として楠木氏が想定される可能性を指摘できるため、伝承の内容は肯定しがたいが、伝承が付加されるという現象はこの地の五輪塔造立に楠木正成が関係したという痕跡があったからこそ生じたとも考えられ、当該地域の石塔造立史を思考するうえで、楠木氏についても考えねばならぬ課題の1つであると評した。

第9章「加古川下流域における石塔造立史—竜山石製石造五輪塔について—」では、第6章で論じた当該地域における律宗の造塔について比較・検討するために、兵庫県加古川下流域の五輪塔造立事例について取り上げ、西大寺律宗の教線の拡大について触れた。

まず、①益気神社五輪塔、②泉福寺五輪塔、③神木五輪塔、④福林寺五輪塔、⑤報恩寺五輪塔(貞治塔)、⑥報恩寺五輪塔(応永)の6基の五輪塔についてその概要を記した。次に、これらのグループ化を考えた。①益気神社五輪塔、②泉福寺五輪塔、③神木五輪塔、④福林寺五輪塔の4基については、すべて銘文に「一結衆」と刻まれており、地域の有力農民層などの造立、つまり、地域色の顕著な五輪塔造立であると考えた。また、これらの五輪塔群は、その形態に一定の法則性がないという特徴も見出せた。一方、⑤報恩寺五輪



塔（貞治塔）と⑥報恩寺五輪塔（応永）については、比較的プロポーションが類似、益気神社五輪塔のグループに比して洗練された様を呈した感を受けるものであるが、同じ報恩寺に造立された正和5年（1316）の年号を刻む御影石製五輪塔（正和塔）をモデルとして造立されたと考えた。この五輪塔は納骨施設を持ち、地輪には年号とともに宇都宮長老の文字が刻まれており、宇都宮長老の墓塔であると考えられている五輪塔である。この人物は一乗寺から報恩寺に移り長老となった人物であるが、興味深いことに報恩寺は律宗寺院である西大寺の末寺である。以上のことから、⑤報恩寺五輪塔（貞治塔）と⑥報恩寺五輪塔（応永）については、正和5年（1316）の年号を刻む御影石製五輪塔（正和塔）をモデルとして、地元の竜山石を用いて造立された五輪塔であると評価した。

第10章「石塔と石材に関する一考察」では、当該地域の石塔造立への直接的影響を考察するものではないが、巨視的に中世の石塔と石材の関係を顕著に認識すべく、近世の石塔と石材の在り方を滋賀県守山市に所在する少林寺一石五輪塔群を事例にあげて検証した。

まず、少林寺一石五輪塔群についてその概要を確認したが、ここで60点を数えるこの一群にはハンレイ岩、砂岩、花崗岩の3種類の石材が混在することが認められた。注目すべきはハンレイ岩製一石五輪塔と砂岩製のそれは、同様のプロポーションを呈するのである。そして、砂岩製のものはハンレイ岩製のものよりも後出することから、石材の不足を補うために、砂岩が用いられたと判断した。

このようにハンレイ岩という石の不足を補うために砂岩という石が用いられるという事例は、石材が流通するという近世の在り方を表徴する事例であると考えた。

第11章「卒塔婆造立における覚鑊思想の意義—『卒塔婆十種秘釈』をめぐって」では、前章と同様に当該地域の石塔造立への直接的影響を考察するものではないが、巨視的に五輪塔が全国的な展開をみせる要因の1つについて検討した。

覚鑊（1095～1143）は、中ノ川実範（1089?～1144）と同様、真言僧の立場にあって時代の趨勢を見通し、浄土教的要素を取り入れ、融合させようとした人物で、『阿弥陀秘釈』、『五輪九字明秘密釈』、『一期大要秘密釈』など多くの著作を残した。とりわけ、晩年に高野を下山し、根来で著したとされる『五輪九字明秘密釈』を取り上げて、我が国における五輪塔の展開に影響を与えた人物としても評価されているが、『五輪九字明秘密釈』などに比して、あまり著名な作ではないが、『卒塔婆十種秘釈』についても我が国の卒塔婆造立の歴史においては、同様に大きな意義があったのではないかとすることを指摘した。卒塔婆から連想するタームは「死」などの暗いイメージのもので



あるが、『卒都婆十種秘釈』においては、五輪卒塔婆を造立供養すれば、ありとあらゆる功德を修めることができると説いており、現状の卒塔婆への在り方に対して密教ではこのように考えることができるという思考を打ち出したものであると評価した。

また、覚鑿は『卒都婆十種秘釈』と同様の十種の功德が説かれている『日卒都婆式』という講式を作成しているが、この講式には「刻毎日一基之制底（卒塔婆）」と記している。毎日1基の卒塔婆を造立し、供養することを促すこの記述からは、題目や念仏同様、日常の作法としての卒塔婆の造立供養を促していることが認められる。ここには『日本往生極楽記』の沙門空也条にみられる念仏に類する様が見受けられるのである。つまり、当初、念仏は忌まれたが多くの宗教者の活動・活躍により、浸透・展開がなされたように、そのような対象であった卒塔婆を浸透・展開させたきっかけの1つを覚鑿は提供した。ここに卒塔婆造立の歴史における1つの変革点があるのではないかと考えた。

以上、本論により当該地域における残存状況が良好ではないが故に研究の俎上にあがることがなかった凝灰岩製層塔について議論が活発になること、また、このように地域ごとに石塔造立史を構築し、それらを比較研究することにより、石塔という枠に留まらず、多くの歴史的事象の解明につながることを期待したい。

## 目 次

### 序章

第1章	はじめに	1
第2章	二上山麓の信仰世界	11
第3章	河南台地北部における石塔造立史	31
第4章	河南台地南部における石塔造立史	46
第5章	不本見神社層塔について	71
第6章	河南台地における花崗岩製層塔の流入	77
第7章	河南台地における石造五輪塔造立史	81
第8章	森屋惣墓五輪塔に関する一考察	98
第9章	加古川下流域における石塔五輪塔造立史	114
第10章	石塔と石材に関する一考察	129
第11章	卒塔婆造立における覚鑊思想の意義—『卒塔婆十種秘釈』をめぐって	169
第12章	おわりに	212

### 図版

## 第 1 章 はじめに

### 1 . 本 論 の 目 的

本論は大阪府南東部に位置する南河内郡太子町、河南町、千早赤阪村、地理学的に言えば河南台地上に造立された石塔群についての造立史を考察しようとするものである。

石塔とは石造物や石造美術と呼称される仏教造形物であるが、学術的には考古学、文献史学、美術史学など、様々な学問分野においてその研究対象となっている。

本論は、石塔を考古学的に扱おうとするものであるが、当該地域の石塔研究においては限界がある。すなわち、当該地域の石塔に関しては凝灰岩という軟質な石材で造られたものが多く散見されるが、これらはその材質のため、風化磨滅が著しく、脆いため、当時の形態を留めていないことが多いのである。しかしながら、このような理由で当該地域の貴重な資料を放置する訳にはいかないであろう

し、何らかの形でこれらを評価する必要がある。ろうことには異論がないものと考えられる。

このことについて、本論では石塔を群として捉えることで対応したい。すなわち、個々の石塔が持つ数値データなどについては、その残存状態により多くを望めない状況にあるため、諸特徴をもとに石塔を群として捉え、そして、その群を時系列の中で各々位置付けることにより、当該地域における石塔造立史を検討し、当該地域における歴史の一端を明らかにすることを目指そうとするものである。従来までの石塔研究は、残存状態の良好な石塔を選択し、数値データを解釈することで結論を導くというものであったが、本論では石塔造立史から地域の歴史を読み解くというダイナミックな視点をもって論じることの特徴がある。

個々の石塔の情報が不十分であるため、推測的論考となる感は否めず、多くの課題を残すこととなろうが、当該地域において時系列

で石塔群を捉え、造立史を組み立てるという試みは新たな試みであり意義があるものと考えられる。

以下、当該地域における石塔造立史について、古い時期から順に、すなわち、古代から中世へと時系列に論じることとする。

## 2. 先行研究について

石塔、すなわち石造物の研究は、その先駆者の一人である川勝政太郎の著書である『石造美術』<sup>(1)</sup>のタイトルからも明らかなように、美術的観点をもって研究が開始されたが、このことは、草創期の石造物研究における射程を狭めることとなった。すなわち、美術的観点からの研究は、そのプロポーショナルが優美なものを第一義的に扱う傾向を促進させ、それ故に残存状況が良好でないものについては、その対象とされなかったのである。

石造物の研究がこのような傾向にあったため、本論で取り上げる当該地域に残る凝灰岩



製の層塔は、その残存状況から石造物研究の俎上にあがることはなく、先行研究として参照するものが見当たらない。

しかし、南河内郡太子町に所在する鹿谷寺跡層塔や岩屋層塔、同河南町に所在する寛弘寺墓地五輪塔については、古くから注目され、論じられてきた。先に名前をあげた川勝は石造物研究の基礎文献として用いられている『日本石造美術辞典』<sup>(2)</sup>において、これらを取り上げたが、その結果、多くの研究者に基礎的データを提供することとなった。鹿谷寺跡層塔や岩屋層塔については、岩井武俊、藤澤一夫、竹谷俊夫、山本義孝らが、関連性のある石切場については鍋島隆宏が考古学的に論じている。岩井は1914年という早い段階で鹿谷寺跡層塔について大陸起源であることを示唆している<sup>(3)</sup>。藤澤は鹿谷寺跡について東側に位置する石窟が金堂に当たり、西側の層塔と対峙する形式であり、この伽藍配置が羽曳野市に所在する野中寺と同じであることを指摘

する。また、石窟の線刻の三尊像が弥勒仏である可能性についても論じている<sup>(4)</sup>。竹谷は付近で採集された遺物について実測図を掲載して詳細に報告し、凝灰岩の採掘技術という観点から東アジア的見地からの解明の必要性を説いている<sup>(5)</sup>。山本は石切場を転用して石窟寺院が成立している点に凝灰岩に対する信仰心があったのではないかと考えるとともに、この寺院は山林仏教の修行の場として中国仏教の強い影響の下に日本風にアレンジされたものではないかとして結論する<sup>(6)</sup>。鍋島は二上山凝灰岩の石切場では12世紀後半から14世紀前半に採石がなされ、製作された石塔類はその分布から聖徳太子御廟前寺院の開発と教線の拡大に結び付く可能性を指摘している<sup>(7)</sup>。

また、寛弘寺墓地五輪塔については、小林義孝、西山昌孝らが考古学的に、細川涼一、松尾剛次らが中世律宗からの視点で五輪塔を扱っている。小林は寛弘寺について記述された文献資料を整理、出土した遺物から寛弘寺

の位置を推定している<sup>(8)</sup>。西山は寛弘寺墓地に所在する層塔や五輪塔について実測図面を掲載し報告している<sup>(9)</sup>。細川は寛弘寺に残る五輪塔の銘文の分析を行い、律宗寺院としての寛弘寺や斎戒衆について論じている<sup>(10)</sup>。松尾は河内国における叡尊集団の展開について考察するなかで寛弘寺について触れ、律僧の葬送活動への従事について言及する<sup>(11)</sup>。他に福澤邦夫は千早赤阪村域の石造物について、実測図や写真などを掲載しながら詳細な報告を行っている<sup>(12)</sup>。

以上のような先行研究に導かれながら、中世の河南台地における石塔造立史について、論じることとする<sup>(13)</sup>。

なお、全体にわたって以下の文献を参考とした。

1 ) 当該地域に関して

- ・ 井上正雄『大阪府全志』巻之四，大阪府全志発行所，1922年
- ・ 河南町『河南町誌』1968年
- ・ 太子町教育委員会『太子町誌』1968年
- ・ 千早赤阪村村誌編さん委員会編『千早赤阪村誌』本編・史料編，千早赤阪村役場，1980年
- ・ 富田林市『富田林市史』第1巻 1985年

2 ) 石塔に関して

- ・ 天岸正男・奥村隆彦『大阪金石志—石造美術』歴史考古学研究所，1973年
- ・ 川勝政太郎『日本石材工芸史』綜芸舎，1957年
- ・ 川勝政太郎『日本石造美術辞典』東京堂出版，1978年
- ・ 川勝政太郎『新版石造美術』誠文堂新光社，1981年
- ・ 日本石造物辞典編集委員会編『日本石造物

辞典』吉川弘文館，2012年

- ・福澤邦夫『千早赤阪の石造文化財』Ⅰ 千早赤阪村文化財調査報告書第4集，千早赤阪村教育委員会，1994年

【註】

- (1) 川勝政太郎『石造美術』スズカケ出版部，1939年

その他にも『石造美術概説』、『京都の石造美術』、『石造美術入門』など、川勝の著書には「石造美術」という名称が用いられている。

- (2) 川勝政太郎『日本石造美術辞典』東京堂出版，1978年

- (3) 岩井武俊「南河内発見の一銅鐸と鹿谷寺址十三重石塔婆」『考古学雑誌』第4巻第6号，考古学会，1914年

- (4) 藤澤一夫「三体弥勒像を本尊とする日



本古代寺院—金三龍先生の華甲を賀して—」

『文山金三龍博士華甲紀念 韓国文化 圓  
佛教思想』韓国裡里市圓光大學出版部所，

1985年

(5) 竹谷俊夫「河内鹿谷寺址出土の遺物」

『古文化談叢』第20集(中)九州古文化研  
究会，1988年

(6) 山本義孝「二上山麓の石窟寺院—鹿谷

寺・岩屋の資料化と背景—」『史学論叢』第  
23号，別府大學史学研究会，1993年

(7) 鍋島隆宏「二上山麓の凝灰岩製石切場

について」『南河内における中世城館の調査』  
大阪府教育委員会事務局文化財保護課，

2008年

(8) 小林義孝「中世の寛弘寺と寛弘寺墓地」

『寛弘寺遺跡発掘調査概要』12，大阪府教  
育委員会，1993年

(9) 西山昌孝「寛弘寺墓地の中世石造物」

『寛弘寺遺跡発掘調査概要』13，大阪府教  
育委員会，1994年

- (10) 細川涼一「寛弘寺神山墓地五輪塔と寛弘寺」『中世の律宗寺院と民衆』吉川弘文館，1987年
- (11) 松尾剛次「叡尊教団の河内における展開―西大寺直末寺教興寺・寛弘寺と五輪塔―」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』第8号，2011年
- (12) 福澤邦夫『千早赤阪の石造文化財』Ⅰ 千早赤阪村文化財調査報告書第4集，千早赤阪村教育委員会，1994年
- (13) 本論で取り上げる石塔の位置図については、第9章と第10章を除き位置図1で示している。

## 第 2 章 二上山麓の信仰世界

### 1. はじめに

大阪府南河内郡太子町と奈良県葛城市の境界には二上山が屹立する。二上山の雄岳と雌岳が仲良く寄り添うように見えるその形状から「ふたかみやま」として親しまれ、古くは『万葉集』に詠まれるなど広く知られる山であった<sup>(1)</sup>。また、二上山麓は凝灰岩の産出地としても古くから知られており、古墳の石棺や寺院の基壇、石塔などの材料として、古代から使用され続けてきた<sup>(2)</sup>。それ故に、採石箇所、すなわち、凝灰岩の石切場が数多く見られ、近年になつての発掘調査の進展から、少しずつではあるがその内容が明らかになってきている<sup>(3)</sup>。

ところで、これら石切場を含む二上山は、古来の人々にとってどのような場所であつたのか。本章ではこのことについて、様々な学問分野の先行研究を重ね合わせながら論じる

こととする。

## 2. 聖徳太子と弥勒信仰

『日本書紀』には「上宮太子を磯長陵に葬る」<sup>(4)</sup>との記述が見られる。そして、その後、叡福寺に伝わるところによれば、推古天皇が太子の墓を守護するために御廟の前に叡福寺を建立したと考えられている。

ところで、叡福寺の創建年代については、考古学的調査の成果によれば、本格的な伽藍の成立は平安時代後期を遡るものではないと結論されている<sup>(5)</sup>。しかしながら、「叡福寺出土と伝えられる飛鳥・奈良時代の瓦が二点あることも知られており、『聖徳太子伝暦』の記述とともに聖徳太子の墓前に太子の薨去後より何らかの堂宇があった可能性があることはにわかに否定できない」<sup>(6)</sup>との指摘のとおり、簡素な初源的施設が存在した可能性は高いのではないかと考えられるのである。このように、二上山麓には聖徳太子に関連して施設が生成

されてきた。

ところで、その銘文により、太子の妃である橘大郎女が天寿国に往生された太子の様子を見たいと進言したのに対し、推古天皇が采女らにつくらせたと考えられている天寿国繡帳の天寿国については、諸説が論じられているが、その中には弥勒菩薩の住する兜率天を指すという説も含まれているようである<sup>(7)</sup>。

また、この天寿国繡帳を有する奈良県生駒郡斑鳩町所在の中宮寺の本尊である木造菩薩半跏像は寺伝によれば如意輪観音像とされているが、当初は弥勒菩薩像として造立されたとする解釈も存在する<sup>(8)</sup>。これらから聖徳太子と弥勒の関連性を想像することも不可能ではない<sup>(9)</sup>。ここでは、このことを記憶するに留め、次へと文章を連続させることとする。

### 3. 石光寺出土弥勒石仏について

平成3年5月17日、奈良県北葛城郡当麻町染野に所在する石光寺において大発見があっ



た。発掘調査により白鳳時代の石仏が発見されたのである。当該調査は奈良県立橿原考古学研究所が実施し、報告書等を刊行している<sup>(10)</sup>。

現在、石光寺は浄土宗知恩院末寺であり、阿弥陀堂と弥勒堂が建っている。前者の本尊は阿弥陀如像、後者は弥勒坐像で室町時代の所産と考えられている。また、当麻寺にいた中将姫が曼荼羅を製作する際、染め洗いをし、五色の糸を得たという伝承が付加された井戸が境内に残る。なお、創建に関して議論できるような文献は見当たらないが、『当麻曼荼羅縁起』と元亨2年（1322）の『元亨釈書』には、以下のような文章が記されている<sup>(11)</sup>。

当麻寺北過五六町野中有古寺。昔天智御宇彼野辺毎夜有光明此靈地掘井。『当麻曼荼羅縁起』

染井側有精舎。昔天智帝時、其地夜夜有光、帝使使見之。三大石形似仏像、天使復奏、勅刻三石作弥勒三尊像。其上架殿庇之、俗似近

染井号染寺。役小角殿前栽一桜樹曰、仏法沮  
桜樹枯。自爾以来旧枝漸朽、新梢萑秀。枝葉  
鬱茂、花果鮮麗。見今存焉。『元亨釈書』

これらの文献資料からは、天智天皇の勅願  
により、当麻寺の北側に位置した染寺に仏の  
姿に似た光り輝く石を弥勒三尊像として彫刻  
し、これを本尊として創建したことが記され  
ているが、この染寺こそが石光寺と考えられ  
るのである。

ところで、発掘調査を担当した河上邦彦は、  
石仏について、「松香石と呼ばれる二上山の凝  
灰岩を用いて丸彫りしたとみられるが、現状  
では頭・体部が分かれているものの、大きさは  
半丈六に及ぶと推測される。面部は大きく  
損傷するが、体部背面の彫刻は当初の形姿を  
よく残しており、胸を張って胴部を引き締め  
る、おおまかなモデリングによる体型は重量  
感があり、中国初唐様式の影響を感じさせ、  
近くの当麻寺にある金堂弥勒如来坐像（国宝）

の表現を思わせる。肉髻が低く平らな形式は中国北齊・北周の仏像から始まり朝鮮半島の新羅仏に至る流れのうち土着的な系列の中に類品が求められよう。制作は白鳳時代、7世紀後半と推測され、現存する最古の丸彫り石仏として、日本古代彫刻史上注目すべきものである<sup>(12)</sup>、「伝説のモデルとなったことは確かである<sup>(13)</sup>」と評する。また、河上は石光寺の歴史的位置付けを検討するうえで、地名に着目して論を展開する。すなわち、石光寺の所在する大字は染野(シメ)と呼ばれているが、この地名の範囲は二上山山頂までを含むものである。シメという地名は、古代の皇室や貴族が獵をおこなう禁野を指すことがあるが、二上山が凝灰岩の産地であったことが禁野となりシメと呼称されるようになったのではないか、このような特別な範囲内に所在する石光寺は皇室に関連する寺院であった可能性も考えられると推測するのである<sup>(14)</sup>。

また、この石光寺弥勒、石仏について、鍋

島隆弘は、「弥勒石仏が凝灰岩を丸彫りしたものであることから、少なくとも二上山と深く関わる信仰と結びついていたことは容易に想像され<sup>(15)</sup>」るとし、河上に比してやや控え目ではあるが、ここでもやはり二上山との関連を指摘している。

以上、石光寺弥勒石仏についての先学諸氏の見解を記したが、ここから少し論を展開させたい。ここで着目するのは、伝承にある光輝く石を弥勒三尊像として彫刻したという箇所である。もちろん、この伝承をそのまま史実として捉えることはできないが、弥勒石仏を考察するうえで重要となろう。例えば、日本最古の仏教説話集である『日本霊異記』には、日頃、各地で仏法を広め、多くの人々を教化した道照法師が死に際した際、西方に向かって坐したとき、部屋いっぱい光を輝き放ちながら往生を遂げた話<sup>(16)</sup>が認められるが、ここには仏教世界における「光」のイメージを看取することができよう、すなわち、光と

は何か特別なもの、高貴、数奇なものを表徴しているのである。

この石光寺の伝説に記された「光」は、二上山産出の凝灰岩が特別であるということを表徴していると考えることができるのではなかろうか。つまり、先に記したように、聖徳太子御廟の所在する地で産出される石材は特別である、少し大胆に記せば、聖徳太子御廟のある地は弥勒信仰の聖地であると考えられており、この地の産出材から造立された弥勒石仏は特別であった、換言すれば弥勒信仰の聖地材であるが故に弥勒石仏が造立されたと考えることが可能ではなかろうか。そして、このことは人々の信仰心を掻き立てた、すなわち、弥勒信仰の聖地から産出した石材により弥勒仏を造立するという行為は、人々の信仰心に、より大きな影響を与えたのではないかと考えられるのである。以下、このことを補強すべく論を展開する。

#### 4 . 鹿谷寺跡・岩屋にみる信仰

鹿谷寺跡は聖徳太子御廟から東へ約 3 km の地点に位置する。鹿谷寺跡は二上山雌岳から延びる尾根上に所在する石窟寺院で、火山活動により形成された凝灰岩の岩盤を彫り込んでつくられている。十三重層塔は凝灰岩の岩盤を掘り残してつくられた生え抜きの塔であると考えられている。高さ約 5 m、基底部は 1 辺約 1.6 m を測る大型塔で中国の西安薦福寺小雁塔にそのプロポーションが類似するという見解もある<sup>(17)</sup>。初層軸には仏舍利孔が穿たれており、舍利塔としての機能を有していたと考えられる。この十三重の層塔のすぐ東側には、岩窟壁面には如来坐像 3 体が線刻されている。

この坐像については、先学が様々に論じている。藤澤一夫は、この坐像について弥勒三尊である可能性を指摘するとともに、この岩窟を金堂と捉え、十三重層塔と合わせて考えれば、「東側の金堂と西側の塔婆とが対立する

伽藍としては飛鳥時代の百濟様式端丸瓦を出土する羽曳野市の野中寺舊伽藍が想起される。この小石窟的寺院は野中寺式配置に従うものである。この野中寺は鹿谷寺跡の西方10 kmに立地し、共に竹内街道に沿う寺々である<sup>(18)</sup>とその伽藍配置まで、地理的視点も踏まえて解釈する。また、当該遺跡の所在地である太子町は、『二上山麓の古代寺院』と題した企画展資料において、「蓮華座の上に阿弥陀仏を線刻するもの<sup>(19)</sup>」と記載しており、この如来坐像について阿弥陀仏であるとの見解を示している。

次に岩屋であるが、岩屋は鹿谷寺跡からさらに400 m東側に位置する石窟寺院である。こちらは西方向に開口する大小2つの石窟が認められる。規模の大きな石窟の前方中央部には凝灰岩製の層塔が立っている。層塔は基壇から一石で造られており、現状では三層が確認できる。太子町によれば、「大石窟の北壁には、半肉彫の三尊像を彫り出していますが、剥落が著しく、光背の一部がかろうじてわか



る程度で、仏像の姿をはっきりと知ることはできません」<sup>(20)</sup>と報告されており、こちらにも三尊像の存在が認められるようである。規模の小さな石窟については、高さと幅は約 2.0 m、奥行き約 1.4 m を測るもので、仏像などを安置するための仏龕のようなものであったと考えられる。なお、これら鹿谷寺跡と岩屋の石という 2 つの石窟の時期であるが、須恵器などの採集遺物から奈良時代前半ころの成立年代が与えられている<sup>(21)</sup>。

以上のように、聖徳太子御廟に近い位置に大陸との関係を想起させる石窟寺院が存在するが、このことを考えるうえで、藤澤一夫の論考には注目すべきである。先に記したように、藤澤は鹿谷寺跡の伽藍配置は野中寺と同様であると結論する。ここで野中寺について触れる必要があるだろう。野中寺は羽曳野市に所在する寺院で、現在は真言宗に属する。山号は青龍山、本尊は薬師如来である。野中寺の歴史は古く、その創建は古代にまで遡る。

境内に残る礎石から、飛鳥時代から奈良時代前半に規模の大きな伽藍が存在したことが知られており、伝承では聖徳太子の命により蘇我馬子が開いたとされている。また、渡来系氏族の船氏、野上連が関係したとする説などがある<sup>(22)</sup>。

さて、藤澤の指摘した野中寺が大規模な伽藍を誇った時期は、飛鳥時代から奈良時代前半であるが、鹿谷寺と岩屋の成立時期も奈良時代前半に求められるということになり、両者は同時期に存在していたことが看取されよう。このことと、これら両寺院が10 kmと、そう遠くはない距離にあり、且つ、竹内街道という古代主要道路に沿うという立地、加えて、両者ともに渡来系氏族との関わりが想起されるということになれば、互いの影響、とりわけ、その創建が古い野中寺の影響を鹿谷寺・岩屋が受けた可能性については、否定できないであろう。また、この野中寺には、台座に丙寅年（666年）の年号の認められる銘文の

ある金銅弥勒菩薩半跏像が1軀存在するが、このことは注目に値する。すなわち、古代の野中寺には弥勒に関する信仰が存在した証左と考えることも可能となり、影響を与えうる関係にあった両寺院にあっては、信仰的側面においても同様であった、つまり、鹿谷寺の十三重層塔東側に見られる岩窟壁面の如来坐像3体は、弥勒三尊であると推測することも可能なのではなかろうか。そして、このことは、鹿谷寺を「ろくたにでら」、「ろくたんじ」と発音するが、従来は「みろくたに」と呼称していたものが、「み」が抜け落ちて、現在のようなになったという説<sup>(23)</sup>により、より一層、補強されようか。

## 5. まとめ

以上のように、聖徳太子御廟、石光寺、鹿谷寺・岩屋など、二上山麓に展開したこれらについては、「弥勒」という共通タームがあることを指摘した。ここで、先に多く引用して

いる藤澤の論考をもう少しだけ引用しよう。

藤澤は三体弥勒像を検討する事例として、鹿谷寺跡のほかに、大阪府の河内龍泉寺や滋賀県の狛坂寺跡磨崖仏、三井寺などの事例を挙げているが、ここで注目したいのは藤澤の次のような見解である。「河内龍泉寺の立地は古くは神霊鎮坐の場所たる神名傍山の名を負い、境内に悪竜の住んだと云う伝説の池と龍泉と呼ばれる湧泉とがあり、河内鹿谷寺の所在する二上山は龍峯とも呼ばれ、近江狛坂寺の立地も龍王山の一角であり、近江三井寺は元は御井寺であったように、寺名は金堂の西辺にある清泉に由来していると云うことである。このように弥勒信仰の山岳寺院には水と龍の伝説が絡み合っていること、百済弥勒寺をはじめとする韓国の弥勒信仰寺院と通じている」<sup>(24)</sup>との見解である。弥勒信仰と龍信仰の関連は、先学により既に指摘があり<sup>(25)</sup>、韓国では弥勒信仰は民俗信仰としての龍信仰と習合し、三国時代から現在に至るまで信仰されて

きたという。そのような信仰が渡来人の手により我が国に伝来したと考えられるのである。この論は二上山、ひいては山麓地域が弥勒信仰の聖地であったと考えることを更に補強しよう。文献資料などから、この地が明確に弥勒信仰の聖地だということを導くことができるわけではないが、この地の歴史的展開を概観するなかで、その可能性を想像することは決して困難なことではない。

#### 【 註 】

( 1 ) 万葉集には、例えば、大津皇子が詠んだとされる「うつそみの人にあるわれや明日よりは二上山を弟世とわが見む」や「二上に隠らふ月の惜しけども妹が手本を離るるこのころ」などの歌を確認することができる。

( 2 ) 二上山産出の凝灰岩は、例えば、奈良



述がある。『日本書紀』後篇新訂増補『国史大系』吉川弘文館，1986年

(5) 太子町教育委員会『叡福寺西方の寺院址調査概報』1973年

(6) 太子町立竹内街道歴史資料館編『平成8年度企画展解説書 聖徳太子伝』1996年  
P 23

(7) 吉川弘文館『国史大辞典』第9巻，1988年，  
P 480

(8) 大橋一章『斑鳩の寺』保育社，1988年，  
P 45～79

(9) ここでの思考は筆者の専門外の分野で、且つ定説化されていないものを突然使用した軽薄な思考であることは否めず、問題のあることは承知しているが、以降、記述することになる弥勒というタームが看取できる可能性のある事象の1つとして敢えて記述した。

(10) 奈良県立橿原考古学研究所編『当麻石光寺と弥勒仏概報』吉川弘文館，1992年

県斑鳩町に所在する藤ノ木古墳や明日香村に所在する高松塚古墳の石棺、法隆寺金堂の基壇などにも使用されている。

(3) 当該地域の石切場の調査成果については以下の報告書に詳しい。

・松田真一「穴虫石切場遺跡発掘調査概報」

『1983年度奈良県遺跡調査概報』奈良県立橿原考古学研究所，1982年

・香芝市二上山博物館『高山火葬墓・高山石切場遺跡－香芝市高山台土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』

1994年

・財団法人大阪府文化財調査研究センター

『楠木石切場跡－南阪奈道路建設に伴う発掘調査報告書－』，1998年

・財団法人大阪府文化財調査研究センター

『椋谷石切場跡－南阪奈道路建設に伴う凝灰岩石切場跡の調査－』，2000年

(4) 『日本書紀』推古天皇29年2月5日条には「是月。葬上宮太子於磯長陵」との記

(11)『当麻曼荼羅縁起』については、前掲註

(10)を、『元亨釈書』については、『元亨  
釈書』新訂増補『国史大系』31, 吉川弘文  
館, P 420を参考とした。

(12) 前掲註 (10) P 28

(13) 前掲註 (10) P 37

(14) 前掲註 (10) P 40～43

また、山本義孝は下記論考の中で、鹿谷  
寺跡などについて石切場を転用して石窟と  
していると考え、「石材（この場合は二上  
山の凝灰岩）に対する根強い信仰が根本に  
存在していることをしめしているのではな  
いだろうか」と記しているが傾聴すべきで  
ある。

山本義孝「二上山麓の石窟寺院－鹿谷寺・  
岩屋の資料化と背景－」『史学論叢』第23  
号, 別府大学史学研究会, 1993年

(15) 太子町立竹内街道歴史資料館編『平成  
7年度企画展解説書 二上山麓の古代寺院』  
1995年, P 45

- (16) 『日本霊異記』上 『群書類従』第25  
輯，P 36 上
- (17) 井上薫「大雁塔と小雁塔が奈良仏教に  
与えた影響」『青陵』第61号，奈良県立橿  
原考古学研究所，1987年
- (18) 藤澤一夫「三体弥勒像を本尊とする日  
本古代寺院一金三龍先生の華甲を賀して」  
『文山金三龍博士華甲紀念 韓国文化 圓  
佛教思想』韓国裡里市圓光大学出版部所，  
1985年，P 4
- (19) 前掲註(15) P 64
- (20) 前掲註(15) P 64～65
- (21) 前掲註(15) P 66
- (22) 吉川弘文館『国史大辞典』第14卷，1988  
年，P 70
- (23) 竹谷俊夫は下記論考における註におい  
て「池田末則『古代地名紀行一大和の風土  
と文化』東洋書院，1987年の217頁には、  
「ロクタニはミロクタニ(弥勒谷)のこと」  
とある。「ミロクタニ」の「ミ」が脱落して

「ロクタニ」となったのであろうか」と記している。

竹谷俊夫「河内鹿谷寺址出土の遺物」『古文化談叢』第20集（中）九州古文化研究会，1988年

（24）前掲註（18）P 9

（25）例えば、金長晃「韓国弥勒信仰の民俗学的展開－龍信仰を中心として－」『仏教の死生観と基層信仰』勉誠社，2008年などがある。



### 第 3 章 河南台地北部における石塔造立史

#### 1. はじめに

南河内郡太子町に所在する叡福寺は、聖徳太子御廟を守護する寺院であると考えられている。この付近には凝灰岩製層塔が多く見られるものの、これらについて細かく言及した先行研究はほとんど見当たらない。唯一、鍋島隆宏が二上山麓の凝灰岩製石切場の様相を概観する論考<sup>(1)</sup>において触れられているのみである。本稿は鍋島の論考に導かれながら、聖徳太子御廟付近の石塔造立史、とりわけ、凝灰岩製層塔に主眼を置き、考察を加えたい。

#### 2. 聖徳太子御廟付近の凝灰岩製層塔

以下、聖徳太子御廟付近の凝灰岩製層塔を概観するが、凝灰岩製石塔の軟質な材質的特徴により磨滅が著しく、文化財保護の観点から、実測作業を行うことが困難であった。よって、数値データについては、それらを所管

する太子町によって過去に計測された数値データ<sup>(2)</sup>を参照した。

#### ① 鹿谷寺層塔（写真 1）

二上山西側の山腹に所在する十三重の層塔である。現高 525.0 cm を測る大型の層塔で 13 層目の一部を残し相輪は欠失している。初層軸に四角形の奉籠孔が穿たれている。塔は凝灰岩の地盤から削り出された生え抜きの塔であり一石で造られている。銘文は見当たらない。この層塔のすぐ東側には三尊石仏を刻む石窟がある。石仏は線刻によるもので、像容は阿弥陀三尊、弥勒三尊などの説がある。鹿谷寺はこれらを中心とする寺院跡で、大陸の石窟寺院との関係も指摘されている。周辺から奈良時代後半の土器が採集されており、塔の造立もこの時期に求められている。昭和 23 年 1 月 14 日に国史跡に指定されている。

② 岩屋層塔（写真2）

二上山の岩屋峠付近に所在する層塔である。現高 325.0 cm を測る層塔で、現在は3層目まで残存している。先に記した鹿谷寺層塔と同じく、凝灰岩の地盤から削り出された生え抜きの塔であり一石で造られているが、鹿谷寺のそれとは形状は異なる。銘文は見当たらない。こちらにも採集遺物により、奈良時代後半の時期が与えられている。

③ 叡福寺層塔（写真3）

叡福寺境内、聖徳太子御廟西側の墓地に所在する層塔である。現高 224.0 cm を測る。現在は5層目までが残存している。初層軸には梵字などはなく素面である。屋根における軒出は長く、軒裏は水平に切っている。初層および2層目には降棟、垂木と思われる装飾が見られる。銘文は見当たらない。忠禪上人石塔と呼ばれている。

#### ④ 西方院層塔（写真4）

叡福寺の南側に位置する西方院のすぐ南に所在する層塔である。現在、層塔は覆屋の中で保護されている。層塔は2基の凝灰岩製五輪塔に挟まれて建っているが、五輪塔を含めたこれら3基の石塔は、西方院に住した聖徳太子の3人の乳母の墓であると伝承されている。現高213.0cmを測る。現在は5層目までが残存している。屋根における軒出は長く、軒裏は水平に切っている。初層軸は明確ではないが六角形を呈すると考えられている。屋根には降棟を表現するが、垂木は見られない。

#### ⑤ 東福院墓地層塔（写真5）

叡福寺の東側、叡福寺の旧墓地内に所在する層塔である。墓地には江戸時代の歴代寺僧の墓塔が建ち並んでいるが、層塔はその中央部、古墳の石棺蓋上に建っている。現高は184.0cmを測る。現在は4層目まで残存している。初層軸には梵字「バン」が浅く刻まれ

ており、裏面には方形の奉籠孔が穿たれている。磨滅が著しく、現存からの推測となるが、屋根の形状は、おそらく、おだやかに反る様を呈するものと考えられる。銘文は見当たらない。

#### ⑥ 良忍上人墓塔（写真6）

叡福寺の境内、聖徳太子御廟の東側に所在する層塔である。現高は183.0 cmを測る。現在は3層目まで残存しており、その上位には相輪が後補されている。初層軸部には梵字などではなく素面である。磨滅が著しく、現存からの推測となるが、屋根の形状は、おそらく、おだやかに反る様を呈するものと考えられる。銘文は見当たらない。融通念仏宗の開祖である良忍上人の墓塔であると伝承されている。

#### ⑦ 願蓮上人墓塔（写真7）

叡福寺の境内、聖徳太子御廟の東側に所在する層塔である。現高は189.0 cmを測る。現



在は5層目まで残存している。初層軸には梵字などはなく素面である。磨滅が著しく、現存からの推測となるが、屋根の形状は、おそらく、おだやかに反る様を呈するものと考えられる。銘文は見当たらない。聖徳太子御廟前に住し、証空に天台教学を教えてとされている鎌倉時代初期の天台僧である願蓮上人の墓塔であると伝承されている。

#### ⑧ 蘇我馬子墓塔（写真8）

叡福寺から南東方向へ約100m、住宅地の一角に所在する層塔である。現高は152.0cmを測る。現在は4層目まで残存しており、その上位に相輪が後補されている。初層軸には梵字などはなく素面である。磨滅が著しく、現存からの推測となるが、屋根の形状は、おそらく、おだやかに反る様を呈するものと考えられる。銘文は見当たらない。『河内名所図会』には「馬子塚」として四重層塔が記載されている<sup>(3)</sup>。

### 3 . 層 塔 群 の 評 価

以上のような凝灰岩製層塔群を評価する前に、凝灰岩製層塔の形態について整理してみたい。凝灰岩製層塔は石材が軟質であるために残存状態が良好でないこと、また、在銘塔がほとんどないことなどから、時間的整理が明確にはできない。したがって、従来的に「傾向」が提示され、それに基づき検討がなされているのが実情である。本稿でもそうなることは否めないであろうが、在銘塔の形態の変化により、今一度確認することとする。なお、石材に関しては凝灰岩製のものだけでは数に乏しいため、他石材の塔も加味して考えることとする。

凝灰岩製層塔は奈良時代から造立されている。奈良県高市郡明日香村に所在する龍福寺層塔は、天平勝宝三年（751）の年号を持つ貴重な在銘塔である。現在は軸部が4層目まで残るが、従来は五重の塔であったと考えられる。この塔の屋根部は特徴的に造られている。

すなわち、降棟を造り、軒裏は深く掘り込んで傾斜させているなど、あたかも木造建築の屋根のように表現されているのである。なお、軸部と屋根は別石で造られていることから察すると、屋根の表現を成形しやすいようにパーツ化したためであると考えられることも可能であろう。このように最も古い段階の層塔は屋根部に特徴がある。

同じく高市郡明日香村に所在する於美阿志神社層塔は、在銘塔ではないが、昭和44年の解体修理の際に、基礎下より平安時代末に時期が比定される瀬戸四耳壺が出土しており造立時期を推測できる貴重な凝灰岩製の層塔である。現在は十一重であるが、従来は十三重の塔であったと考えられる。屋根部であるが、軒は先に見た龍福寺層塔のそれよりも厚く造られているが、軒裏を深く彫り込む表現や垂木形などは見られない。屋根はおだやかに反る様を呈する。軸部と屋根部は別石ではなく一石で造られている。

これら 2 塔の他、付近の凝灰岩製層塔で紀年銘もしくはそれに代わり年代を示唆する層塔は存在しない。よって以降は花崗岩の紀年銘を持する層塔について確認しておく。

総高 1260.0 cm を測る大型の層塔ではあるが、般若寺層塔には触れておきたい。般若寺は奈良市に所在する寺院である。記録によれば、延応 2 年（1240）には 5 層目まで完成していたが、一旦作業は中断された。その後、塔内に納入されていた法華経外箱に建長 5 年（1253）の年号が記されていたことから時期を特定できる貴重な塔である<sup>(4)</sup>。13 重の塔で基壇をもち、低平な基礎の上位に顕教四仏を線刻する初層軸をもつ。屋根は垂木を表現、おだやかに反る様を呈する。屋根の上端には露盤を造り出し、上位には相輪がのる。また、同じ時期に奈良県宇陀市に所在する大蔵寺にも層塔が造立されている。この塔も延応 2 年（1240）在銘塔で銘文に「伊行末」の名が見られる貴重な層塔である。これら以降、花崗

岩製の層塔が増加しはじめ、凝灰岩製層塔は徐々に消失していく。

花崗岩製の層塔であるが在銘塔をもう1例あげておく。奈良県桜井市に所在する談山神社層塔である。永仁6年（1298）の年号を持つ塔で、十三重の層塔である。屋根の反りは先の層塔に比して顕著である。軒裏には垂木を表現する。軸部と屋根部は別石ではなく一石で造られている。先の大蔵寺層塔と同様に銘文に「伊行元」の名が見られる伊派の手によるものである。

以上、龍福寺層塔から於美阿志神社層塔、般若寺層塔、談山神社層塔の4つの層塔に関してその特徴を概観したが、以下のように整理できる。

#### 龍福寺層塔（写真9）

奈良時代：天平勝宝三年（751）

- ・ 降棟を造り、軒裏は深く掘り込んで傾斜させる（木造建築の屋根のように表現さ

れる)。

#### 於美阿志神社層塔 (写真 10)

平安時代末

- ・ 龍福寺のように軒裏を深く彫り込む表現は見られない。
- ・ 垂木形などは見られない。
- ・ 軒は厚く造られる。
- ・ 屋根はおだやかに反る様を呈する。

#### 般若寺層塔 (写真 11)

鎌倉時代前半：延応 2 年 (1240)

- ・ 軒裏には垂木を表現する。
- ・ 軒は厚く造られる。
- ・ 屋根部はおだやかに反る様を呈する。
- ・ また、この時期以降、花崗岩製層塔が増加する。

#### 談山神社層塔 (写真 12)

鎌倉時代後半：永仁 6 年 (1298)



- ・ 軒裏には垂木を表現する。
- ・ 軒は厚く造られる。
- ・ 屋根の反りは顕著である。

以上を層塔の形態的特徴の時間的な変化傾向として捉え、聖徳太子御廟付近の凝灰岩製層塔を検討する。

① 鹿谷寺層塔と② 岩屋層塔については、付近から奈良時代の土器が採集されていることなどから、时期的には龍福寺などの古い段階に落ち着くものであると考えられるが、凝灰岩の地盤から削り出された生え抜きの塔であること、また、石窟寺院の様相を呈するものであることなど、他の石塔とはその在り方が全く異なる。すなわち、大陸との関連を顕著に視野に入れて検討すべき層塔であると考えられ、系譜上、異質な感を呈する層塔である。

③ 叡福寺層塔については、屋根の軒裏を深く切り込む特徴は見られないが、降棟や低い垂木の表現が見られる。また、屋根の反りはお

だやかであることなどから、於美阿志神社層塔と般若寺層塔の両方の特徴が見出せる。したがって、時期は平安時代末から鎌倉時代前半を考えたい。④西方院層塔については、屋根の初層軸が六角形<sup>(5)</sup>の可能性がある点が古様を示し、垂木が見られない点などは於美阿志神社層塔の特徴と一致する。③叡福寺層塔に少し先行する時期を考えたい。⑤東福院墓地層塔、⑥良忍上人墓塔、⑦願蓮上人墓塔、⑧蘇我馬子墓塔については、明確に配列することは困難であるが、屋根の形状は、おそらく、おだやかに反る様を呈するものと考えられる鎌倉時代前半頃を考えたい。

#### 4. まとめ

以上、聖徳太子御廟付近の凝灰岩製層塔について、時間的關係を整理した。まず、御廟とは少し離れた場所に位置する①鹿谷寺層塔と②岩屋層塔については、系譜上別の所産ではないかと考えることが可能であろう。そし

て、層塔群の中で最も古い様相を示す④西方院層塔や③叡福寺層塔がこの地の層塔群造立の端を開き、続いて⑤～⑧の他の層塔が次々に造立され、群となったと考えられるのである。叡福寺周辺に同石材で同種のものが密に分布するという状況は、鍋島の「二上山凝灰岩の中世石切場は、叡福寺に関わる宗教活動に支えられたものであった」<sup>(6)</sup>との指摘のとおり、叡福寺に関連する層塔群として一括することが可能であろう。また、次章に記す寛弘寺周辺の凝灰岩製層塔群には同様の状況が見られることから、造立に何らかの影響があったことを推測することができようか。

#### 【 註 】

- ( 1 ) 鍋島隆宏「二上山麓の凝灰岩製石切場について」『南河内における中世城館の調査』  
大阪府教育委員会事務局文化財保護課，

2008 年

( 2 ) 数 値 デ ー タ に つ い て は 、 2013 年 1 月 26  
日 に 千 早 赤 阪 村 に お い て 開 催 さ れ た シ ン ポ  
ジ ウ ム 「 不 本 見 神 社 層 塔 を 考 え る 」 の 配 布  
資 料 に お け る 数 値 デ ー タ を 使 用 し た 。

配 布 資 料 『 千 早 赤 阪 村 指 定 文 化 財 第 1 号 記  
念 事 業 ・ 金 剛 葛 城 地 域 博 物 館 ネ ッ ト ワ ー ク  
協 議 会 合 同 事 業 不 本 見 神 社 層 塔 を 考 え る 』  
千 早 赤 阪 村 教 育 委 員 会 ， 2013 年 1 月 26 日

( 3 ) 『 河 内 名 所 圖 會 』 臨 川 書 店 ， 1995 年

( 4 ) 日 本 石 造 物 辞 典 編 集 委 員 会 編 「 般 若 寺  
十 三 重 層 塔 』 『 日 本 石 造 物 辞 典 』 吉 川 弘 文 館 ，  
2012 年 ， P 802

( 5 ) 奈 良 時 代 後 期 の 時 期 が 比 定 さ れ て い る  
奈 良 市 に 所 在 す る 塔 の 森 石 塔 は 初 層 軸 が 六  
角 形 で あ る 。 写 真 13 参 照

( 6 ) 前 掲 註 ( 1 ) P 251

## 第 4 章 河 南 台 地 南 部 に お け る 石 塔 造 立 史

### 1 . は じ め に

現 在 、 大 阪 府 南 河 内 郡 河 南 町 に は 寛 弘 寺 と  
い う 地 名 が 残 存 す る が 、 中 世 の 律 宗 寺 院 で あ  
る 寛 弘 寺 の 名 に 由 来 す る も の で あ る 。 寛 弘 寺 、  
す な わ ち 、 河 内 地 域 に お け る 律 宗 に 関 す る 研  
究 は 、 細 川 涼 一<sup>(1)</sup> や 松 尾 剛 次<sup>(2)</sup> な ど が 、 ま た 、 寛  
弘 寺 墓 地 に 残 る 凝 灰 岩 製 層 塔 や 花 崗 岩 製 五 輪  
塔 に つ い て は 、 川 勝 政 太 郎 ら が 研 究<sup>(3)</sup> し て い る 。  
し か し な が ら 、 寛 弘 寺 の 周 辺 に 点 在 す る 凝 灰  
岩 製 層 塔 に つ い て の 研 究 は 、 そ の 残 存 状 況 が  
あ ま り 良 く な い こ と が 原 因 し 、 現 在 の と こ ろ  
見 当 た ら な い 。 本 章 は 層 塔 が 持 す る 物 質 的 情  
報 に 限 度 が あ る 中 で の 思 考 と な る た め 、 推 測  
的 な 可 能 性 を 指 摘 す る に と ど ま る 論 と な る こ  
と が 想 定 さ れ よ う が 、 研 究 的 思 考 の 無 い 中 で  
の 試 論 と い う と こ ろ に 意 義 を 見 出 し た い 。

以 下 、 寛 弘 寺 周 辺 に 見 ら れ る 凝 灰 岩 製 層 塔  
に つ い て 論 じ る こ と と す る 。

## 2 . 寛弘寺の存続時期

### 1 ) 考古学的成果による検証

寛弘寺に関する発掘調査の成果の1つとして、以下の成果をあげることができる<sup>(4)</sup>。1988年に大阪府教育委員会は、農免道建設に伴う事前調査を河南町に所在する埋蔵文化財包蔵地である神山遺跡で実施した。調査は町道寛弘寺畑田・光当寺坂線から町道中村・金剛山線の上に2箇所の調査区を設けて実施されたが、このうちのⅡ区と命名された調査区から寛弘寺との関連が指摘される遺物の出土が確認された。Ⅱ区は千早川沿いの町道寛弘寺畑田・光当寺坂線のすぐ東に設定された調査区である。ここからは古墳時代の竪穴住居や土坑、中世の溝などが多くの土器群とともに検出されている。このうち、溝9001と記号化がされた中世の溝跡から、唐草文の軒平瓦が出土しているが、この瓦の中央部分には「等寛如」の文字が認められる。この文字を詳細に検討された藤澤一夫は、この文字が寛弘寺を



表するのではないか、時期については平安時代後期のものではないかと指摘している<sup>(5)</sup>。

## 2) 文献史料による検証

寛弘寺に関する史料は極めて少ないが、以下にその主たるものをあげる<sup>(6)</sup>。

### ① 『土屋宗直軍忠状』建武4年(1337)

同十九日御向于東条之時加御手、罷向山手  
焼払飛鳥里、打通春日太子、焼払山田山城、  
打出寛弘寺河原畢

この記事は、和泉河内守護であった細川顕氏が南朝方の拠点であった南河内地域に攻撃を仕掛けた際の状況を記すものであるが、ここに寛弘寺の名が見える。

### ② 『嘉元記』正平7年(1352)2月26日条

二月廿六日、吉野の帝、叶ノ内裏ヨリ五条  
野ノ野宮へ行幸、廿七日、野宮ヨリ東条観

興寺へ行幸、二月廿八日、觀興寺ヨリ住吉  
へ行幸

これは、後村上天皇が、五條賀名生から住吉を経て、男山へ進行する際に觀興寺（寛弘寺）において宿泊した際の記事であるが、往時の寛弘寺が天皇の行幸した際、宿泊地となりうる程の規模を有していたということが読み取れる。

③『大乘院寺社雜事記』長祿4年（1460）10  
月14日条

衛門佐ハ河内国寛弘寺ニ引籠之間、各明日  
可陣替云々

同 10月25日条

一、河内国弥次郎方勢、武山寛弘寺ニ取絆  
陣云々

④ 『新撰長祿寛正記』長祿4年（1460）10月

10日条

神南山ノ味方不残討死シケレバ、義就モ終  
ニ不叶西林寺へ引入、爰モ要害悪キトテ、  
其夜ニ寛弘寺へ移玉フ

⑤ 『後太平記』

戦ひ券て其身は寛弘寺に陣を取、嶽山を攻  
しかども、城郭険にして

以上、③～⑤の記事からは、いずれも、畠  
山内紛に際し、寛弘寺が軍事施設として使用  
されたことを読み取ることができる。

⑥ 『三箇院家抄』

河内国 寛弘寺 多々羅庄之内也、敷地四  
反小并修理田八反

この記事を詳細に読み解いた小林義孝は、  
この「敷地四反小」という記述から、「360歩

$\times 4 + 120 \text{ 歩 (小)} = 1560 \text{ 歩}$      $1560 \text{ 歩} \times 3.3 \text{ m}^2$   
= 5,148 m<sup>2</sup>」と計算し、往時の寛弘寺の敷地面積を算出している<sup>(7)</sup>。

⑦ 『西大寺末寺帳』    明德2年（1391）

東條    寛弘寺    大慈院

同    永享8年（1436）

河内    千光寺    同    寛弘寺

同    年代不詳

寛弘寺

以上、史料に見える寛弘寺を概観したが、『土屋宗直軍忠状』建武4年（1337）を上限とし、『西大寺末寺帳』永享8年（1436）にその下限が確認できた。このことと、先に確認した考古学的成果を合わせて考えれば、創建時期や廃絶時期は不明確ではあるものの、史料により明確にできる寛弘寺の存続時期は、

12 世紀後半から 15 世紀前半と結論することができよう。

ところで、『光明真言結縁過去帳<sup>(8)</sup>』には、3 名の寛弘寺の僧侶の名前が見られるという。そのうち、識春坊の没年代は 1471 年もしくはその直前と推定している。このことに依拠するならば、下限を 15 世紀後半と考えることが可能である。

### 3. 凝灰岩製層塔について

以上のように、寛弘寺は 12 世紀前半から 15 世紀後半の期間には、確実に存在したことが確認できた。ここでは、その寺院の周辺に集中的に分布する凝灰岩製層塔について考察を加える。

#### ① 寛弘寺墓地層塔（写真 1）

層塔の所在する寛弘寺墓地は、現在の寛弘寺集落の西側の丘陵上に位置する。後にも触れることになるが、この墓地には正和 4 年

( 1315 ) の年号を有する五輪塔が所在し、昭和 40 年代に川勝政太郎により紹介<sup>(9)</sup>され、広く知られることとなった墓地である。

層塔はこの丘陵のピーク部に建っている。風雨に晒される場所に建っているため、摩滅が著しく残存状況は芳しくはない。層塔は初層軸と 4 層分の屋根が残存するが、このうちの 1 層分は 3 分の 1 程度を留めるのみである。従来、直線的形状であった箇所はほとんど丸味を帯び、原型をとどめない。基礎は高さ 25.5 cm、幅 81.4 cm を測る。初層軸は、高さ 52.7 cm、幅 55.0 cm とやや横幅が広い計測値を示す。

## ② 鴨習太神社層塔（写真 2）

鴨習太神社は南河内郡河南町神山に所在する神社で延喜式神名帳にもその名が見える由緒ある神社である。

層塔は 4 層の屋根を残すが、積み直しの際、逆転して積み上げられている。風化磨滅が顕



著であり、従来、直線的形状であった箇所はほとんど丸味を帯び、原型をとどめない。基礎は高さ 26.5 cm、幅 61.0 cm、初層軸は、高さ 38.0 cm、幅 41.0 cm を測り、横方向に少しだけ長い形状をとる。四面各面に月輪の痕跡をとどめるが種子が彫られた様子はなく、往時は墨書により種子を配した可能性が考えられる。銘文は見当たらない。1 層目は一重の垂木形を備え、軸部も同材から刻み出している。1 層目の全高は 24.5 cm で、軸部高は 6.0 cm、垂木形の高さは 2.5 cm を測る。磨滅が著しく、現存からの推測となるが、屋根の形状は、おそらく、おだやかに反る様を呈するものと考えられる。

### ③ 観音寺層塔（写真 3）

観音寺は南河内郡河南町大字中に所在する融通念仏宗寺院である。元々は真言宗であったが、中世になって衰え、元和 3 年（1617）に融通念仏宗に創建され、福聚山観音寺と号

するようになった。延宝元年（1673）より、旧河内国石川郡三十三所観音霊場の第二十七番札所として信仰を集めたが、明治時代に観音堂のみを残し廃寺となった。その後、昭和16年、杉田義教の努力により、寺号を復興するに至った。観音堂の西側に檀家墓地があるが、その奥に無縁の石塔が密に集められている。その中央に凝灰岩製の層塔が建っている。

層塔の最下位には、風化磨滅が顕著であるが、凝灰岩らしき石材が平面的に確認できることから、元々は基礎を有しており、現在は地中に埋没している可能性がある。なお、原位置を保っているかどうかは定かではなく、復興時に移設した可能性も考えられる。層塔は初層軸と4層分の屋根、相輪の一部が残存するが、最上位の屋根については風化磨滅が顕著であり、従来、直線的形状であった箇所はほとんど丸味を帯び、原型をとどめない。初層軸は、高さ46.0 cm、幅49.0 cmを測り、横方向にやや長い形状をとる。四面各面に種

子を薬研彫にて配していたことは確かであるが、判読は困難である。東面の左上方部分に一部曲線の痕跡と考えられる箇所が認められるが、判然とせず、これが月輪の痕跡であるかどうかは明確でない。また、この初層軸には、石材を故意的に削り取った痕跡が認められるが、このことは石材粉を持ち帰り、信仰の対象としたことを表すものであると考えられる。1層目は一重の垂木形を備え、軸部も同材から刻み出している。1層目の全高は24.3 cmで、軸部高は5.0 cm、垂木形の高さは2.0 cmを測る。磨滅が著しく、現存からの推測となるが、屋根の形状は、おそらく、おだやかに反る様を呈するものと考えられる。

#### ④ 慈眼寺層塔（写真4）

慈眼寺は富田林市南別井に所在する禅宗寺院で、宇治黄檗山萬福寺の末寺である。元々は、真言宗であったが、近世に禅宗寺院となった。慈眼寺には弘仁年間に病が流行した際

に弘法大師が井戸を掘り、宝塔を建てたという伝承が残っているが、このことは近世の地誌である『河内名所図絵』に「大師の井戸」として描かれている<sup>(10)</sup>。また、山号を宝塔山と号するのもここに由来するという。なお、この寺院も先に記した観音寺と同様に、旧河内国石川郡三十三所観音霊場の第十二番札所として人々の信仰を集めた寺院である。

層塔は、基壇、基礎、初層軸、7層分の屋根が残存するが、最上位の屋根については風化磨滅が顕著であり、従来、直線的形状であった箇所はほとんど丸味を帯び、原型をとどめない。また、層塔の西側に1層の屋根が単独で残存しており、合計で8層分の屋根が確認できる。基壇は、切石状基壇で2石により構成されるが、周囲は既に往時の形状を留めていない。基礎は、高さ32.0 cm、幅61.6 cmを測る。初層軸は、高さ38.8 cm、幅41.8 cmと縦方向に短く、横方向に長い形状をとる。四面に金剛界四仏の種子を大きく薬研彫にて

配する。月輪は伴わない。また、この初層軸には、石材を故意的に削り取った痕跡が認められるが、このことは石材粉を持ち帰り、信仰の対象としたことを表すものであると考えられる。1層目は一重の垂木形を備え、軸部も同材から刻み出している。1層目の全高は23.4 cmで、軸部高は4.4 cm、垂木形の高さは2.2 cmを測る。磨滅が著しく、現存からの推測となるが、屋根の形状は、おそらく、おだやかに反る様を呈するものと考えられる。

以上、寛弘寺墓地、鴨習太神社、観音寺層塔、慈眼寺層塔と4基の塔について概観したが、記述したとおり残存状態が良好でなく、層塔から得ることのできる数値データなどの情報量は極めて少ない。しかしながら、時代確定の要素として重要である屋根の形態が類似することなどから、これらはほぼ同時期の所産であると考えられる。そして、慈眼寺層塔に薬研彫にて配された種子の形状から鎌倉時代中期の所産であると判断したい<sup>(11)</sup>。

#### 4 . 凝 灰 岩 製 層 塔 群 造 立 の 歴 史 的 意 義

以 上 の よ う に 、 寛 弘 寺 の 周 辺 に は 4 基 の 凝 灰 岩 製 層 塔 の 造 立 が 認 め ら れ る 。 こ れ ら は 正 確 な 位 置 情 報 と は 言 え な い が 、 先 に 記 し た 神 山 遺 跡 軒 平 瓦 出 土 地 点 で あ る 溝 9001 を 基 準 点 と し た 場 合 、 こ れ ら 4 基 の 層 塔 は す べ て 寛 弘 寺 か ら 1 km の 範 囲 内 と わ ず か な 距 離 を も っ て 分 布 し て い る こ と に な る 。 す な わ ち 、 こ れ ら は 、 鎌 倉 時 代 中 期 と い う ほ ぼ 同 じ 時 期 に 集 中 的 に 分 布 し て い る の で あ る 。 こ の こ と を 考 え る 上 で 、 往 時 の 寛 弘 寺 の 在 り 方 へ の 検 討 が 不 可 欠 と な る う 。

先 の 『 西 大 寺 末 寺 帳 』 に お い て 認 め ら れ た よ う に 、 寛 弘 寺 は 中 世 、 西 大 寺 に 連 なる 律 宗 寺 院 と し て 展 開 し た が 、 こ こ で 導 か れ る の は 叡 尊 の 存 在 で あ る 。 言 う ま で も な い が 、 叡 尊 は 西 大 寺 を 拠 点 寺 院 と し 、 非 人 救 済 事 業 な ど を 実 施 し 、 往 時 の 社 会 に 影 響 を 与 え た 人 物 で あ り 、 寛 弘 寺 の 所 在 す る 河 内 地 域 に お い て も 、 以 下 の よ う に そ の 痕 跡 が 認 め ら れ る<sup>(12)</sup>。



- ・ 寛元 4 年 ( 1246 ) 河内道明寺において国内諸宿のため文殊菩薩を供養する
- ・ 建長 4 年 ( 1252 ) 河内磯長聖徳太子廟において受戒する。河内泉福寺において梵網經を講ずる
- ・ 建長 6 年 ( 1254 ) 河内西琳寺において説戒する
- ・ 正嘉 2 年 ( 1258 ) 河内磯長太子廟に詣でる
- ・ 文永 6 年 ( 1269 ) 河内教興寺において仏舍利を拝する
- ・ 弘安 4 年 ( 1281 ) 河内教興寺の講堂を供養する

叡尊が寛弘寺を訪れたという直接的な記事は見当たらないものの、すぐ北側に位置する

太子町磯長の太子御廟には複数回訪れている。  
このことは、叡尊が「釈迦信仰を中核として  
弥勒信仰・舍利信仰・聖徳太子信仰・行基信  
仰を有していた」<sup>(13)</sup>との指摘のとおり、叡尊が  
厚く聖徳太子を信仰していたことに由来する  
ものと考えられる。このように当該地域を含  
む河内地域で積極的に宗教活動を行っていた  
事と寛弘寺は西大寺に連なる律宗寺院であっ  
た事を合わせて考えると、叡尊は寛弘寺の在  
り方や周辺の層塔群成立の要因などを検討す  
る際の重要な課題であると考えられるのであ  
る。

また、叡尊は醍醐寺で密教を学んだが、同  
様に醍醐寺で学んだ覚禅が記した『覚禅抄』  
には以下のような記述が認められる<sup>(14)</sup>。

寶積經云。作石塔人。得七種功德。一千歳  
生瑠璃宮殿。二壽命長遠。三得那羅延力。  
四金剛不壞身。五自在身。六得三明六通。  
七生弥勒四十九重宮云々。

叡尊の置かれた環境から、『覚禅抄』の知識があったと考えれば、造塔と弥勒浄土との連関が意識されていたと想像することも不可能ではない。議論できる資料が極めて少ない中での推論にしかないが、先の章で太子御廟の付近には弥勒というタームが認められる可能性を指摘したが、このことも含めて、当該地域の凝灰岩製層塔の造立を考察する上で、叡尊との関係性の検討については、今後の重要な課題の1つとなろう。

ところで、先に少し記したが、寛弘寺は天皇が宿泊するなど、ある程度の規模を有していたと考えられるが、単に面積などの物理的規模だけではなく、当該地域において势力的なポジションも占有していたのではないかと考えられるのである。このことを考えるうえで、当該地域の氏族の分布が重要となる。

当該地域は、本稿が問題としている時代から少し新しい時期である南北朝時代の頃、楠木正成が山城群を築き、幕府軍に応戦した地

として『太平記』などの史料により、広く知られている。その本拠地は現在の千早赤阪村付近にあったと考えられており、楠公誕生地遺跡からは、14世紀から15世紀にかけての周囲に二重の堀をめぐらせる建物跡が発掘調査により検出されている。また、この遺跡から南方向、金剛山地が提供する険しい山地地形などを巧みに利用し、赤坂城塞群と呼ばれる山城群が形成されている。

当該地域には、あまり知られていないが、楠木に味方した氏族の本拠地が所在しているのであるが、この氏族本拠地の分布が興味深い。以下、文献史料<sup>(15)</sup>で確認する。

① 「岸和田治氏軍忠状写」延元2年（1337）

延元々年五月廿五日、兵庫湊河合戦之時、楠木一族神宮寺新判官正房并八木弥太郎入道法達、相共抽合戦之軍功者也

② 同

延元二年三月十日、細川兵部少輔、同帶刀  
先生等為大將軍、寄来古市之間、馳向野中  
寺東、防戦之處、(中略)此等次第、当国  
守護代 大塚掃部助惟正并 平石源次郎

③ 発給文書

河野辺駿河守は河内守護楠木正儀の代官  
(守護代)として正儀発給文書に頻出する

以上の史料には、神宮寺氏、大塚氏、平石氏、河野辺氏などの氏族名が見られるが、これらの氏族名は、各々、地名として現存しており、その本拠地を比定することが可能である。位置図2はその位置を示すものであるが、大変、興味深い配置となっている。すなわち、楠木氏も含めこれらの氏族の本拠地は、寛弘寺を取り囲むように配されているのである<sup>(16)</sup>。このことは、寛弘寺を中心とするある程度の範囲を一空間とし見なしていた、つまり、寺

院の力が顕著に及ぶ地域として扱われていたと考えられるのである。そして、この空間内に凝灰岩製層塔は造立されたのである。観音寺や慈眼寺などは元々、真言宗寺院であったことから、寛弘寺の影響下の真言律宗寺院として展開したのではなかろうか。

## 5. まとめ

以上、寛弘寺周辺の凝灰岩製層塔群の成立を考える上で叡尊との関係性の考察は今後の重要な課題の1つであることについて記した。また、寛弘寺の周辺に密な分布をみせた理由をその周囲には楠木系氏族の本拠地があったことを想定すると同時に、層塔が分布する地域は寛弘寺が顕著に力を及ぼした地域であったと考えた。

しかしながら、この後、凝灰岩製層塔造立は徐々にその勢いが弱まることになる。その要因の1つとして石工技術の洗練により、硬質の石材を用いて多くの石塔を製作可能とな



ったことがあげられる。軟質で脆い石材から硬質で恒久的な石材への変化は当然の結果であろう。

【 註 】

- ( 1 ) 細川涼一「寛弘寺神山墓地五輪塔と寛弘寺」『中世の律宗寺院と民衆』吉川弘文館，1987年
- ( 2 ) 松尾剛次「叡尊教団の河内における展開―西大寺直末寺教興寺・寛弘寺と五輪塔―」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』第8号，2011年
- ( 3 ) 川勝政太郎「大阪付近の石造美術新資料」(下)『史迹と美術』388，1968年
- ( 4 ) 大阪府教育委員会『神山遺跡発掘調査概要Ⅰ』1988年
- ( 5 ) 大阪府教育委員会『寛弘寺遺跡発掘調査概要Ⅶ』1993年のP37には「藤沢一夫氏

は、この文字が寛弘寺の寺名を表すものである」との記述があるが、その脚注によれば出典は藤沢一夫「河内飛鳥の古文化―特に河南町域について―」講演レジュメ、1990年となっている。本論でも出典にあたろうと尽力したものの講演レジュメによるものであり入手することができなかった。よって、論考を執筆する手続きとしては不十分ではあるが、この件に関しては出典による確認をしていない。

- (6) ここでは以下の史料を取り上げ、小林義孝が「中世の寛弘寺と寛弘寺墓地―資料の集成と整理のために―」『寛弘寺遺跡発掘調査概要Ⅻ』大阪府教育委員会、1993年において整理した内容について再確認する。
- 八尾市史編纂委員会編「土屋宗直軍忠」『八尾市史』史料編、1960年、P148
- 臨川書店『嘉元記』『改訂史籍集覧』第24冊、1984年、P292
- 三教書院『大乘院寺社雑事記』第2巻、1931

年， P 357・361

名著普及会『新撰長祿寛正記』『新校群書類  
従』第16巻合戦部(1)，1977年，P236

博文館『後太平記』『続帝国文庫』第15輯，  
1899年，P393

続群書類従完成会『三箇院家抄』史料纂集』  
第2，1984年，P262

奈良国立文化財研究所『西大寺末寺帳』『西  
大寺関係資料』，1968年，P106・110・122

(7) 小林義孝「中世の寛弘寺と寛弘寺墓地  
—資料の集成と整理のために—」『寛弘寺遺  
跡発掘調査概要XII』大阪府教育委員会，1993  
年，P49

(8) 奈良国立文化財研究所『光明真言結縁  
過去帳』『西大寺関係資料』，1968年，P90・  
91 なお、このことについては前掲註(7)  
P49で小林が指摘している。

(9) 川勝政太郎「大阪付近の石造美術新資  
料(下)」『史迹と美術』388，1968年，P304  
～306

(10) 秋里籬島「巻之弐 石川郡」『河内名所

圖會，臨川書店，1985年，P 86

(11) 梵字の刻み方は時期的に変化する。月

輪は大きいほど時期が古く、刻み方は平らな形態から薬研彫に変化する。写真5を参考に考察すれば、慈眼寺のものは大蔵寺にやや遅れる頃の時期を比定することが妥当であると考えられる。

(12) 以降、河内における叡尊の行動については、下記を参考に記した。

細川涼一訳注『感身学正記1 西大寺叡尊の自伝』東洋文庫664，平凡社，1999年，  
P 175・225・242・296

和島芳男『叡尊・忍性』吉川弘文館，1988  
年 P 194～212 の略年表

(13) 松尾剛次「叡尊の生涯」『中世律宗と死の文化』吉川弘文館，2010年，P 46

(14) 佛書刊行会『覚禅抄』第7『大日本佛教全書』，1916年，P 27

なお、このことについては、辻富美雄が「叡

尊における石塔勸進考」『佛教大学大学院研究紀要』8巻，1980年において指摘している。

(15)「岸和田治氏軍忠写」については、『大阪狭山市史』第2巻 史料編 古代・中世，2002年，P 460～461、また、発給文書については、堀内和明「楠木正儀と河野辺駿河守」『河内金剛寺の中世的世界』和泉書院，2012年，P 100～105から引用した。

(16) 厳密に言えば、これら楠木氏族名が登場する史料は南北朝時代など、層塔群の造立時期と考えられる鎌倉時代中期よりも新しい時期のものであるが、堀内和明によれば南北朝時代以前から、これら氏族は住していたと考えることが可能であるという。本論はこの説に依拠し、当該地域の鎌倉時代中期頃の氏族配置を位置図2のように考えた。

## 第 5 章 不 本 見 神 社 層 塔 に つ い て

### 1 . は じ め に

大 阪 府 南 河 内 郡 千 早 赤 阪 村 大 字 東 阪 に は 不  
本 見 山 と 呼 ば れ る 山 が あ る 。 写 真 1 の よ う に 、  
こ の 山 は 茶 碗 を 伏 せ た よ う な 特 異 な 形 状 を 呈  
し て お り 、 お そ ら く 、 古 来 よ り 神 体 山 と し て  
人 々 に 信 仰 の 対 象 と さ れ た 山 で あ っ た こ と が 、  
そ の 伝 承<sup>(1)</sup> な ど か ら 想 像 で き る 。 こ の 山 の 山 頂  
に は 、 不 本 見 神 社 が 鎮 座 す る が 、 そ こ に は 凝  
灰 岩 製 の 層 塔 が 見 ら れ る 。 こ の 層 塔 は 平 成 24  
年 8 月 に 千 早 赤 阪 村 指 定 文 化 財 第 1 号 に 指 定  
さ れ た 石 塔 で あ る 。

と こ ろ で 、 凝 灰 岩 製 の 層 塔 は 、 南 河 内 郡 太  
子 町 の 聖 徳 太 子 御 廟 付 近 や 同 河 南 町 の 寛 弘 寺  
付 近 な ど に 集 中 し て 分 布 し て い る が 、 そ れ ら  
の 層 塔 群 と は 大 き く 異 な る 点 が あ る 。 す な わ  
ち 、 初 層 軸 に 像 容 が 配 さ れ て い る の で あ る 。  
以 下 、 他 の 層 塔 と 大 き く 異 な る 不 本 見 神 社 層  
塔 に つ い て 、 論 じ る こ と と す る 。

## 2. 立地環境

先に記したようにこの層塔の所在する山は特異な山である。例えば、延宝7年(1679)発刊の『河内鑑名所記』には、「本見ぬ山、昔一夜の間に湧出したる故ニ、もと見ぬ山と号スと也。峯は八よう、八社在ス。観音堂、十一面観音御長二尺一寸平等院と号ス。太子へ香花、此山にて切り奉備由。森屋より卅八町上ル」<sup>(2)</sup>と記されている。一夜のうちに出現したという記述からは、神がかり的なものが看取される。また、山頂に所在する不本見神社にはヤーホ相撲という神事が伝えられており<sup>(3)</sup>、現在も秋の祭礼の際には奉納されている。以上のように、その形状や伝承などから、この山が神体山として神聖視されていた可能性が推測できるのである。

そして、山頂に所在する不本見神社境内から一段下がった西側の平坦地に凝灰岩製層塔は建っているが、当初よりこの場所に建っていたのではなく、元々はこの場所から南東に



約 150 m の位置、東阪 1517 番地にあったとされている。この場所は平等院圓通寺という寺院があったとされている場所である。この寺院については、文献史料も残存しておらず、また、発掘調査も実施されてはいないため創建年代や規模などは不明瞭であるが、鎌倉時代に金剛山頂の転法輪寺を中心に周囲に 7 つの寺院を配し金剛七坊と呼ばれた修験道関連の寺院群が形成されたことが知られており<sup>(4)</sup>、そのような環境から考えれば当該寺院も修験道に関連する寺院であった可能性も指摘できよう。

### 3. 不本見神社層塔について（写真 2）

凝灰岩製層塔は基礎、初層軸と 3 層分の屋根が残存する。風化磨滅が顕著であり、従来、直線的形状であった箇所は丸味を帯びている。基礎は高さ 40.0 cm、幅 71.6 cm を測る。初層軸は、高さ 50.4 cm、幅 48.6 cm を測り、縦方向にやや長い形状をとる。南面に不空成就を

彫刻し、東面にキリーク（阿弥陀）、西面にウーシ（阿闍）、北面にタラーシ（宝生）の種子を刻む。すなわち、金剛界四仏を各面に配する。1層目の全高は26.9 cmを測る。屋根の四方は風化磨滅により、残存状態が悪く、屋根隅高を確認することはできないが、1層目で16.0 cm程度の高さになるものと大きく推測される。

千早赤阪村の北側に位置する河南町の寛弘寺周辺には、凝灰岩製の層塔が散見されるが、それらの層塔に比して、この不本見神社層塔は、初層軸の高さの数値が幅のそれを少し上回る縦長の形状となる。福澤邦夫が「それまでの塔四方仏は主に像容で現わす顕教系四仏から、四仏を種子で現わすのが普遍化する密教系へと大きく移行する。そのような時期と背景のもとに造られたのが不本見神社層塔」<sup>(5)</sup>と結論するとおり、この層塔は鎌倉時代中期、寛弘寺層塔群にやや遅れて登場したものであると考えられる。

#### 4 . ま と め

不本見神社層塔の初層部には釈迦が彫刻されているが、河南台地上にこのように像容を彫るタイプの層塔はなく、極めて特異な事例である。すなわち、この層塔の前段階である寛弘寺周辺の層塔群に後続するが、より地域的信仰心、あるいは造立者個人の信仰心が顕著に反映された塔であると考えられ、造立単位の小規模化が看取される拡散期の層塔と考えることができる。

なお、この地域で釈迦信仰を勘案すれば、西大寺律宗の叡尊が連想されようが、このことに関しては今後の課題としたい。

#### 【 註 】

( 1 ) 井上正雄『大阪府全志』巻之四，大阪府全志発行所，1922年，P 229～230

( 2 ) 三田章編『河内鑑名所記』上方芸文

叢刊刊行会，1980年，P399

(3) 千早赤阪村村誌編さん委員会編『千早赤阪村誌』千早赤阪村役場，1980年，P794

(4) 金剛山総合文化調査委員会『金剛山記』史跡金剛山奉賛会，1988年，P217

(5) 福澤邦夫 1994年『千早赤阪の石造文化財』Ⅰ 千早赤阪村文化財調査報告書第4集  
千早赤阪村教育委員会，P103

## 第 6 章 河南台地における花崗岩製層塔の流入

### 1. はじめに

南河内郡河南町平石に所在する高貴寺は高野山真言宗の寺院で、近世には慈雲が入寺し、真言律や梵字道場などが整えられた。この寺院には国重要美術品の指定を受ける花崗岩製層塔や 13 世紀の宝篋印塔、応永 2 年（1395）年の年号を持つ石灯籠が造立されている。

また、明治時代の廃仏毀釈により廃寺となったが、千早赤阪村大字小吹には浄土寺と呼ばれた寺院が所在した。現在は堺市立博物館に移築整備されているが、元々そこには重要文化財の指定を受ける花崗岩製の層塔が造立されていた。これら 2 基は河南台地における花崗岩製の層塔である。本稿では、当該地域におけるこれら 2 基の石造層塔造立の歴史的意義を論じることとする。

## 2. 2基の花崗岩製層塔（写真1・2）

高貴寺層塔は現高485.0cmを測る花崗岩製の層塔で相輪の上端を欠失している。基礎に「永仁五年 丁酉 五月三日 比丘道生」という銘文が刻まれている。初層軸には月輪の中に金剛界四仏の種子を薬研彫にて配する<sup>(1)</sup>。

旧浄土寺層塔は現高347.1cmを測る花崗岩製の層塔で、水煙以上を欠失している。基礎は高さ41.4cm、幅70.0cmを測り、南面に嘉元二二年丙午 勸進賢□という銘文が刻まれている。初層軸には西面に阿弥陀坐像（キリーク）を像容として表現し、東面にウーン、南面にタラーク、北面にアクの種子を薬研彫りにて配する<sup>(2)</sup>。

これら2基の層塔はいずれも年号を刻む点で貴重な資料と言えよう。

## 3. まとめ

以上、2基の花崗岩製層塔についてその概要を記した。これら2基の花崗岩製石造層塔

は、各々、永仁 5 年（1297）と嘉元 4 年（1306）  
とはほぼ同時期の所産であり、次章で記すこ  
ととなる五輪塔群造立前夜に位置付けられる  
石塔である。この 2 基の層塔造立前夜の段階  
は凝灰岩を用いてつくられた層塔であり、石  
材が異なっている。巨視的に考えれば、これ  
ら 2 つの層塔が造立された時期は、伊行末に  
はじまる伊姓を持する石工の他、橘姓や平姓  
など、多くの石工が出現してくる時期にあり、  
彫刻技術も高まりを見せる。すなわち、花崗  
岩などの硬質な石材を用いて極めて完成度の  
高い石塔を数多く製作する時期にある。高貴  
寺層塔と旧浄土寺層塔の両塔は、このような  
全国的な潮流の中で評価すべき石塔であると  
考えられるのである。以降、当該地域で凝灰  
岩を石材として石塔を造立することはなく、  
花崗岩が主流となる。軟質で脆い石材よりも  
硬質で丈夫な性質の石材が主流となることは  
至極当然のことである。すなわち、1300 年を  
前後して造立されたこれら 2 基の層塔は、当



該地域において、これまでの凝灰岩製造塔文化に終止符を打った石塔とも言えよう。

【 註 】

( 1 ) 高貴寺層塔の数値データ等については、西山昌孝「高貴寺十三重層塔」『日本石造物辞典』，吉川弘文館，2012年，P 671における記述を参考とした。

( 2 ) 旧浄土寺層塔の数値データ等については、財団法人文化財建造物保存技術協会『重要文化財 旧浄土寺九重塔移築修理工事報告書』，真陽社，1988年，P 1～16における記述を参考とした。

## 第 7 章 河 南 台 地 に お け る 石 造 五 輪 塔 造 立 史

### 1 . は じ め に

河 南 台 地 に 造 立 さ れ た 石 塔 を 概 観 す る と 、  
こ れ ま で に 記 し て き た 層 塔 の 他 に 五 輪 塔 が 目  
立 っ た 存 在 と し て 目 に 映 る 。 こ れ ら 2 者 に つ  
い て は 、 当 該 地 域 に お い て 時 期 的 に 層 塔 が 古  
く 、 五 輪 塔 が 新 し い と 考 え ら れ て い る 。

以 下 、 層 塔 に 後 続 す る 石 塔 で あ る 五 輪 塔 に  
つ い て 、 論 じ る こ と と す る 。 な お 、 こ こ で は  
南 河 内 郡 千 早 赤 阪 村 に 所 在 す る 五 輪 塔 を 扱 う  
が 、 地 理 学 的 に は こ の 地 域 は 河 南 台 地 上 と は  
言 え な い が 、 す ぐ 南 側 に 位 置 し 、 文 化 圏 と し  
て も 一 括 り と し て 扱 う べ き 地 域 で あ る た め こ  
こ に 含 め て 考 え て い る 。

### 2 . 河 南 台 地 に お け る 五 輪 塔 概 要

#### ① 森 屋 惣 墓 ( 寄 手 塚 ) 五 輪 塔 ( 図 1 ・ 写 真 1 )

千 早 赤 阪 村 の 北 部 、 金 剛 山 地 か ら 北 へ 延 び  
る 丘 陵 上 に 森 屋 惣 墓 は 所 在 す る 。 こ の 五 輪 塔

は、墓地の北側、玉垣に囲まれた空井戸の上位に架け渡された延石の上位に据えられている。なお、元々は延石の代わりに無縁墓碑を使用していたが、平成14年に地震等の災害を意識し、千早赤阪村教育委員会により、現状のように整備がなされた。

五輪塔は花崗岩を用いて造られている。地輪は高さ44.5cm、幅63.0cmを測る。水輪は高さ47.0cmで、上端径32.3cm、下端径32.0cmを測る。水輪最大径は下端から高さ29.0cmの箇所では64.8cmを測り、金剛界四仏の種子を薬研彫りにて表現する。火輪は高さ39.8cm、軒厚は中央で12.3cm、隅で18.5cmを測る。火輪上端幅は24.5cmである。空風輪は一石で造られる。空輪高32.6cm、風輪高18.3cmを測る。風輪は上端径38.6cm、下端径21.0cmである。風輪上端は傾斜し、その上位に空輪が付く。空輪最大径は下端から高さ12.6cmの箇所では36.8cmを測る。なお、この塔は延石上に建っているため判然としないが、身方

塚塔や墓地内に反花基壇の残欠が散見されることなどから、反花基壇を有していた可能性がある。

② 森屋惣墓（身方塚）五輪塔（図2・写真2）

身方塚塔は先に記した寄手塚塔とは墓道を隔てた南側に位置し、玉垣に囲われて建っている。五輪塔は花崗岩を用いて造られており、高さ 19.1 cm を測る複弁四葉の反花基壇を有する。地輪は高さ 36.0 cm、幅 50.0 cm を測る。水輪は高さ 38.4 cm で、上端径 24.8 cm、下端径 24.1 cm を測る。水輪最大径は下端から高さ 21.5 cm の箇所で 50.0 cm を測る。火輪は高さ 28.9 cm、軒厚は中央で 9.5 cm、隅で 11.8 cm を測る。火輪上端幅は 20.0 cm である。空風輪は一石で造られる。空輪高 20.3 cm、風輪高 13.7 cm を測る。風輪は上端径 26.3 cm、下端径 15.2 cm である。風輪上端は傾斜し、その上位に空輪が付く。空輪最大径は下端から高さ 9.5 cm の箇所で 25.0 cm を測る。この塔は他の

五輪塔に比して、やや小型のものであるが、そのプロポーションは千早惣墓五輪塔や寛弘寺墓地五輪塔に類似する。

### ③ 千早惣墓五輪塔（図3・写真3）

千早赤阪村において最も南に位置する千早集落の墓地内の斜面地最高所に建っている。五輪塔は花崗岩を用いて造られており、切石基壇と反花基壇が設けられている。前者は高さ17.4 cm、後者は20.4 cmを測る。なお、切石基壇中央部には、納骨のための奉籠孔が穿たれている。反花基壇は複弁五葉に界線を入れる。地輪は高さ46.9 cm、幅63.4 cmを測る。水輪は高さ51.4 cmで、上端径32.0 cm、下端径32.3 cmを測る。水輪最大径は下端から高さ29.0 cmの箇所で64.8 cmを測る。火輪は高さ39.8 cm、軒厚は中央で12.3 cm、隅で18.5 cmを測る。火輪上端幅は24.5 cmである。空風輪は一石で造られる。空輪高32.6 cm、風輪高18.3 cmを測る。風輪は上端径38.6 cm、下端

径 21.0 cm である。風輪上端は傾斜し、その上位に空輪が付く。空輪最大径は下端から高さ 12.6 cm の箇所 で 36.8 cm を測る。

#### ④ 東阪墓地五輪塔（図 4・写真 4）

千早赤阪村の中央部に位置する東阪集落の墓地内の西側に建っている。五輪塔は花崗岩を用いて造られており、切石基壇と反花基壇が設けられている。前者は高さ 24.4 cm、後者は 20.8 cm を測る。反花基壇は複弁四葉に小花を入れる。地輪は高さ 47.0 cm、幅 55.4 cm を測る。水輪は高さ 42.7 cm で、上端径 29.4 cm、下端径 27.8 cm を測る。水輪最大径は下端から高さ 22.3 cm の箇所 で 55.2 cm を測る。火輪は高さ 33.5 cm、軒厚は中央で 10.6 cm、隅で 13.6 cm を測る。火輪上端幅は 22.0 cm である。空風輪は一石で造られる。空輪高 23.6 cm、風輪高 15.0 cm を測る。風輪は上端径 30.0 cm、下端径 17.0 cm である。風輪上端は傾斜し、その上位に空輪が付く。空輪最大径は下端から

高さ 10.0 cm の箇所 で 28.3 cm を測る。

⑤ 千早城跡五輪塔（図 5・写真 5）

史跡千早城跡の北側を通過して金剛山頂へ登るルート沿い、城跡の北東端に玉垣に囲まれた一画があるが、五輪塔はそこに建っている。楠木正成供養塔、楠木正儀供養塔などの伝承が残る塔である。五輪塔は花崗岩を用いて造られており、高さ 20.3 cm を測る複弁三葉の反花基壇を有する。地輪は高さ 40.5 cm、幅 49.6 cm を測る。水輪は高さ 42.8 cm で、上端径 22.0 cm、下端径 23.1 cm を測る。水輪最大径は下端から高さ 24.9 cm の箇所 で 52.7 cm を測る。なお、正面にのみ金剛界大日の種子であるバンを刻む。火輪は高さ 30.2 cm、軒厚は中央で 9.4 cm、隅で 12.0 cm を測る。火輪上端幅は 18.7 cm である。空風輪は一石で造られる。空輪高 21.3 cm、風輪高 15.5 cm を測る。風輪は上端径 30.5 cm、下端径 16.4 cm である。風輪上端は傾斜し、その上位に空輪が付く。空輪最大



径は下端から高さ 18.5 cm の箇所 で 28.5 cm を測る。

⑥ 寛弘寺墓地五輪塔（図 6・写真 6）

五輪塔は花崗岩を用いて造られており、切石基壇と反花基壇が設けられている。前者は高さ 23.0 cm、後者は 23.3 cm を測る。なお、西面の前者と両者の間には、納骨のための奉籠孔が穿たれている。地輪は高さ 46.0 cm、幅 67.0 cm を測り、南面に 3 行 24 字で次のように銘文を刻んでいるが、正和 4 年（1315）の年号が刻まれており、年代を知る上で基準となることから貴重な塔であると言える。

六道講衆造立之

正和四年卯乙卯月八日

願主八斎戒敬念

水輪は高さ 47.7 cm で、上端径 35.8 cm、下端径 32.3 cm を測る。水輪最大径は下端から高さ 28.2 cm の箇所 で 65.2 cm を測る。火輪は高さ 41.0 cm、軒厚は中央で 14.8 cm、隅で 21.5 cm

を測る。火輪上端幅は 24.8 cm である。空風輪は一石で造られる。空輪高 26.2 cm、風輪高 18.0 cm を測る。風輪は上端径 36.0 cm、下端径 22.0 cm である。風輪上端は傾斜し、その上位に空輪が付く。空輪最大径は下端から高さ 11.0 cm の箇所 で 34.0 cm を測る。

### 3. 五輪塔の時間的順序

ここで、以上の 6 基の五輪塔に関して考察を加えたい。まずは時間的位置付けを考えたい。ここで、正和 4 年（1315）の銘を刻む⑥寛弘寺墓地五輪塔に着目しなければならない。この塔を基準とし、この塔よりも時期的に古いのか新しいのかを検討したい。ここで、地輪の縦横比（高さに対する幅の比）に注目したい。一般に地輪は、低平な形態のものから縦に長くなる傾向が知られている。縦横比が 1.0 となった場合が、縦横、すなわち、高さと同幅が同一の正方形であることを示すため、この縦横比の数値が小さいほど縦長で新しい

傾向にあるということが出来る。ここから検討をはじめたい。順番に見ていくと、まず、① 森屋惣墓（寄手塚）五輪塔の地輪の縦横比は 1.42 である。以下、② 森屋惣墓（身方塚）五輪塔で 1.39、③ 千早惣墓五輪塔で 1.35、④ 東阪墓地五輪塔で 1.18、⑤ 千早城跡五輪塔で 1.22 である。なお、⑥ 寛弘寺墓地五輪塔は 1.46 である。この数値データを単純に時間的に配列すれば、⑥ 寛弘寺墓地五輪塔（1.46）→ ① 森屋惣墓（寄手塚）五輪塔（1.42）→ ② 森屋惣墓（身方塚）五輪塔（1.39）→ ③ 千早惣墓五輪塔（1.35）→ ⑤ 千早城跡五輪塔（1.22）→ ④ 東阪墓地五輪塔（1.18）となる。ただし、このことはあくまでも一般的な傾向であり、差のあまりない数値データをもって単純に配列を考えることには注意を要する。したがって、このデータを参考として、様々な諸条件をもって調整を加える必要がある。

まず、① 森屋惣墓（寄手塚）五輪塔であるが、この五輪塔は全体に比して空風輪が突出

して大きく、イレギュラーな様を呈する。また、縦横比に関しては、⑥寛弘寺墓地五輪塔との差が0.04と極めて僅差である。これらの観点を合わせて考えると、この地域にあっては、安定したプロポーションで供給される前夜の塔と位置付けることが可能であり、この五輪塔を最も古い段階、次に連続する塔を⑥寛弘寺墓地五輪塔と考えたい。次に、⑤千早城跡五輪塔と④東阪墓地五輪塔であるが、これらは基礎の縦横比が1.22、1.18となり、⑥寛弘寺墓地五輪塔や①森屋惣墓（寄手塚）五輪塔に比して、違いが明瞭であり、時間的配列の中では後方に位置づけられる。ただし、⑤千早城跡五輪塔の水輪に刻まれた大日種子バンの浅くてソフトな刻み具合や火輪の柔らかい雰囲気などからは、时期的に新しく位置付けることが妥当であると考えられ、最も新しい時期の塔を⑤千早城跡五輪塔、その前夜に位置づけられるものを④東阪墓地五輪塔と考えたい。残る五輪塔は、②森屋惣墓（身方

塚) 五輪塔と③千早惣墓五輪塔であるが、前者に比して後者の方が、力強い感を呈し、より大型である点などから、③千早惣墓五輪塔から②森屋惣墓(身方塚)五輪塔の時間的配列を考えたい。

以上、まとめると時間的順序については、  
①森屋惣墓(寄手塚)五輪塔→⑥寛弘寺墓地五輪塔→③千早惣墓五輪塔→②森屋惣墓(身方塚)五輪塔→④東阪墓地五輪塔→⑤千早城跡五輪塔と考えたい。ただし、後にも記すが、  
⑥寛弘寺墓地五輪塔→③千早惣墓五輪塔→②森屋惣墓(身方塚)五輪塔→④東阪墓地五輪塔の五輪塔群については、基壇を有する形式である点、五輪塔のプロポーションがかなり類する点などから、時期的にはさほど大差はないと考えられる。

#### 4. 五輪塔のグループ化

ここでは、これらの五輪塔を特定のグループに分類し、考察を加えたい。まず、①森屋

惣墓（寄手塚）五輪塔であるが、先に記したように、この五輪塔は全体に比して空風輪が突出して大きく、イレギュラーな様を呈し、安定したプロポーションで供給される前夜の塔と位置付けることが可能であると解釈した。

次に最も新しいと考えた⑤千早城跡五輪塔であるが、こちらについては、水輪に種子パンを刻むという点で、また、石材は同じく花崗岩であるが、ややピンク色を呈し、所謂、御影石の可能性も否めない。これらにより、外部から持ち込まれた楠木氏に関連する供養塔ではなかろうかと考えられる。

残るのは⑥寛弘寺墓地五輪塔、③千早惣墓五輪塔、②森屋惣墓（身方塚）五輪塔、④東阪墓地五輪塔の4基である。これらは、基壇を有する形式である点、五輪塔のプロポーションがかなり類する点などから、时期的にはさほど大差はないと考えることが可能であることを記したが、これらの五輪塔は、一群として捉えることが可能なようである。叡尊の

影響のもと、寛弘寺の周辺に凝灰岩製層塔群が成立した可能性があることは、先に記したところである。そして、この層塔群は、種子の彫り方から、南河内の地において叡尊が積極的に活動を継続させた鎌倉時代中期の年代を与えることができるのではないかと記した。このように律宗文化が既に浸透している地に続けて五輪塔造立の文化が展開したのである。しかしながら、両者には造立場所に決定的な違いが見られるのである。すなわち、前者は寺院などの宗教施設で後者は墓地という違いである。このような律宗と墓地に建つ五輪塔という問題を検討するにあたって、細川涼一の論考は必読する必要があるだろう。細川はその著書『中世の律宗寺院と民衆』において<sup>(1)</sup>、寛弘寺と五輪塔の問題について言及する。細川はまず寛弘寺墓地五輪塔の以下の銘文に着目する。

六道講衆造立之

正和四年卯乙卯月八日



願主八斎戒敬念

この銘文から「惣墓の総供養塔が願主八斎戒敬念を中心とした在地の六道講衆によって造立された」<sup>(2)</sup>とし、この墓地は「正和4年(1315)、律宗の斎戒衆、敬念らによって造られた惣墓であることがうかがえる」<sup>(3)</sup>と論じ、「寛弘寺の管理した惣墓—おそらくはそこに、唐招提寺の西方院や西琳寺の高屋宝生院のように、敬念ら斎戒衆自身の拠点となった寛弘寺奥の院があった惣墓—に、死者追福の総供養塔を、在地の六道講衆を組織して造ったことがうかがえるのである」<sup>(4)</sup>と考えるのである。確かに、寛弘寺墓地五輪塔には奉籠孔が穿たれており、細川の解釈を裏付けるものであると考えられる。それでは、千早惣墓五輪塔、森屋惣墓(身方塚)五輪塔、東阪墓地五輪塔の五輪塔群についてはどうであろうか。

先に記したように、千早惣墓五輪塔、森屋惣墓(身方塚)五輪塔、東阪墓地五輪塔については、反花基壇を有する、プロポーション

が類似するなどの共通点が見られた。注目すべきは、寛弘寺墓地五輪塔と千早惣墓五輪塔の規格である。最下位の切石基壇の高さが少し異なるだけで、残りの部材はほとんど同じ高さで揃うことが一目瞭然である。このことは、寛弘寺墓地五輪塔の銘文に登場する律宗の斎戒衆、敬念が、その造立に深く関与しているということを表徴しているのではないだろうか。このように、ほぼ同じ規格で造立されたという現象は、より顕著な結びつきであることを表していると推測することが可能であり、ここには寛弘寺側からの積極的アプローチ、すなわち、律宗の教線の拡大という歴史的事象を考えたい。そして、基壇を有するという点に着目すれば、千早惣墓五輪塔ほど積極的に評価することはできないが、森屋惣墓（身方塚）五輪塔と東阪墓地五輪塔についても同グループに含めて考えることが可能なのではなかろうか。

## 5 . ま と め

以上のように、河南台地に造立された五輪塔は、大きく3つのグループに分けることができるとし、そのグループの1つは、正和4年(1315)、律宗の斎戒衆、敬念らによって造立されたと考えられる寛弘寺墓地五輪塔に規格や形態の類似性が認められることから律宗が深く関与しているとの見通しを示した。

すなわち、千早惣墓五輪塔、森屋惣墓(身方塚)五輪塔、東阪墓地五輪塔については、寛弘寺の影響下に成立した律宗関連の所産であると判断したい。

## 【 註 】

( 1 ) 細川涼一「寛弘寺神山墓地五輪塔と寛弘寺」『中世の律宗寺院と民衆』吉川弘文館, 1987年

( 2 ) 前掲註 ( 1 ) P 91

( 3 ) 前 掲 註 ( 1 ) P 9 2

( 4 ) 前 掲 註 ( 1 ) P 9 3

## 第 8 章 森屋惣墓五輪塔に関する一考察

### 1. はじめに

森屋惣墓は現在も地区の方々の墓石が立ち並ぶ墓地であるが、その墓地内には大型の反花基壇や空風輪の残欠が散見される。福澤邦夫が「当村には宝篋印塔の残存する遺品が極めて少ないことから、この基壇は五輪塔のものとして差支えないであろうと」<sup>(1)</sup>と森屋惣墓に残る鎌倉時代後期から室町時代初期にかけての 10 基以上の基壇の残欠を五輪塔とセットになっていたものであると論じたとおり、これらの残欠資料は五輪塔に関するものであることが推測される。

このように多数の五輪塔が建っていたという在り方は、河南台地における他の五輪塔の在り方とはいささか異なる。すなわち、造塔には金銭的負担が生じるため、地域に住する人々が短い期間で 10 基以上も造立するとは考えにくい。

ここに、この森屋惣墓の五輪塔の在り方の特異性が見出せるのである。この地にあつて、このような経済的負担が可能な人物と言え、真っ先に楠木氏のことが想起されよう。そして、この森屋惣墓五輪塔には、楠木氏に関する興味深い伝承が残っている。以下、この楠木氏にまつわる五輪塔伝承に着目し、森屋惣墓五輪塔の在り方について考察を加えたい。

## 2. 森屋惣墓五輪塔と楠木正成伝承

南北朝時代、楠木正成は大阪府の南東部に位置する千早赤阪村において、金剛山地の地形を巧みに利用して山城を築き、幕府軍に応戦した。その様子は『太平記』等により、また、戦前、戦中の時代の流れに乗じた教育によって広く知られることとなった。『太平記』によれば、多数優勢な幕府軍に対して、少数劣勢な楠木軍は様々なアイデアをもって互角に相交えたとされている。しかし、楠木正成は状況を冷静に判断し、様々な発想をもって

戦ったという理知的側面だけではなく、一方ではヒューマンな一面をも我々に想起させる人物である。その代表たるが石造五輪塔寄手塚塔・身方塚塔に纏わる伝承である。「寄手塚」・「身方塚」と呼称されている石造五輪塔は、楠木正成がこの地の戦乱で命を落とした兵を供養するために建てたという伝承が残る石塔であり、その際、正成は敵軍（寄手）の供養塔を自軍（身方）のそれよりも少し大きく造った、すなわち、寄手塚塔は身方塚塔に比して大きく造られているという、実に奥ゆかしく、ヒューマンな内容となって伝わっており、地元の人々をはじめ多くの方々に親しまれている。

このような伝承が残る2基の石造五輪塔であるが、実際に石造五輪塔そのものを考察すれば、寄手塚塔で鎌倉時代後半頃、身方塚塔では時期差があると考えられ、同時期に造立された塔とは考えにくい。しかれば、これら両塔と付加された伝承には、如何なる関係性



が看取されるのであろうか。

### 3 . 寄手塚塔と身方塚塔

森屋惣墓の2基の大型石造五輪塔は、一般に墓地の北側に建つ塔は「寄手塚」、南側に建つ塔は「身方塚」という俗称で呼ばれている。先に記したが、この呼称法は楠木正成が南北朝動乱期に、この千早赤阪で行われた戦により尊い命を失った人々の供養塔として造立したもので、その際、自軍（身方）の供養塔よりも敵軍（寄手）の供養塔を少しだけ大きく建てたという何とも奥ゆかしい、正成の人情味が感じられる伝承によるものである。しかし、実際にはこれら両塔は、同時期の所産とは考えにくい。前章においても記したが、ここで今一度、石造物という物質的観点から両塔について記すこととする。

寄手塚塔は、玉垣に囲まれている一画の空井戸の上に石柱を2本渡し、その上位に建てられている。以前はその空井戸に墓碑を渡し

て建てられていたが、平成 14 年に安定性が増すように墓碑を石柱に変える補修工事を行った。この塔は花崗岩を用いて造られている村内最古の五輪塔で、昭和 45 年 2 月 20 日に大阪府の有形文化財に指定されている。総高は 182.0 cm を測る。地輪の高さは 44.5 cm、幅は上端で 63.0 cm、下端で 63.5 cm を測る。水輪は高さ 47.0 cm を測り、4 面に金剛界四仏種子を薬研彫にて刻む。なお、福澤邦夫によれば<sup>(2)</sup>、四仏種子を刻む五輪塔は、京都府京都市左京区に所在する祇王寺塔、兵庫県加古川市に所在する福林寺塔など類例が極めて少ないようである。火輪は高さ 34.9 cm、軒部分は中央で 13.0 cm を測る。空風輪は風輪で 21.6 cm、空輪は 34.0 cm の合計 55.6 cm を測り、全体のバランスからはやや大きな感じを受ける。同氏によれば、寄手塚塔は本村に隣接する河南町寛弘寺神山共同墓地に所在する正和 4 年（1315）の在銘五輪塔をやや遡るか時期のものであると考えられる。すなわち、この塔は

鎌倉時代後半頃の所産であると考えられるのである。

身方塚塔は、墓地の南側の玉垣に囲まれた所に位置する。花崗岩を用いて造られている無銘の石造五輪塔である。昭和22年12月1日に大阪府の重要美術品に指定されている。総高は137.3 cmであるが、高さ19.1 cmを測る反花の基壇を加えれば156.4 cmとなる。基壇の反花は複弁四葉である。地輪は高さ36.0 cm、幅は50.0 cmを測る。水輪は高さ38.4 cmを測り、火輪は高さ28.9 cm、軒部分は中央で9.5 cmを測る。空風輪は風輪で13.7 cm、空輪は20.3 cmの合計34.0 cmを測る。前章でも記したとおり、この五輪塔は寄手塚塔に比して新しい時期の所産であると考えられる。

以上、本稿で取り上げる寄手塚塔、身方塚塔に関して、両塔の間に時間的なヒアタスが存在すると考えられる。

#### 4. 『河内鑑名所記』・『河内名所圖會』にみる

##### 寄手塚塔・身方塚塔

前章では石造物という物質的観点から、両塔の時代性について確認した。ここでは近世に刊行された『河内鑑名所記』<sup>(3)</sup>、『河内名所圖會』<sup>(4)</sup>の両資料から、両塔についてアプローチしたい。

『河内鑑名所記』は延宝7年（1679）に、河内国柏原の三田浄久によって著された地誌である。この書物は各地の名所、社寺などを狂歌や俳句とともに記すというスタイルをとる地誌である。河内国の地誌の初めとして位置づけられるこの書には、本稿で問題とする寄手塚塔、身方塚塔についての記述は見当たらない。しかし、一方で楠木正成が籠城戦を展開した千早城に位置する五輪塔については、「楠正成石塔」として絵図まで掲載し、以下の<sup>(5)</sup>ような歌を添える。

くちせしな其名も高き楠ハ石になりてもおも

き 心 根

千 早 ふ る き あ と も 朽 せ ぬ 楠 ハ 石 塔 と 成 爰 に ゐ  
ま す か

楠 か か た き こゝろ の 証 拠 に ハ 雨 も 嵐 も ま せ ぬ  
石 塔

ま さ し け に 見 ゆ る 石 碑 の 消 せ ぬ ハ 実 や 多 聞 の  
守 り 成 ら ん

世 に た か ふ 聞 え て 今 に 絶 せ ぬ ハ 金 剛 山 と く す  
の 木 か 名 と

また、この他にも楠木正成についての記述は多い。例えば、『太平記』でもよく知られている楠木正成が築城した赤坂城（下赤坂城）については「下の赤坂 楠の枝城也 前の谷川に数万ある石ハ寄手ニなげあてし石といひ伝へ侍る」<sup>(6)</sup>というようにかなり詳しくコメン

トが付されており、また、「甲取坂」、「藤林」、「屏風塚」、「出合」などの城付近の小字名を数多く取り上げ、狂歌や俳句を添えて記述している。これらの記載状況からは、狂歌や俳句などの題材としては、格好の素材であると考えられる寄手塚塔、身方塚塔に見られるヒューマンな伝承が取り上げられていないことには、いささか違和感を感じる。

『河内名所圖會』は、享和元年（1801）に秋里籬島により著された書物である。なお、竹居明男が「秋里籬島は『河内鑑名所記』を当然ながら念頭に置いており、南河内の金剛山・千早城から始まり、中河内を経て北河内の樟葉里に至るという同書の体裁等に影響を受けていた事も注意される。事実、寛政10年4月に籬島が三田家を訪問していることが知られている史料があり、『河内名所圖會』巻四の中にも三田浄久その人について言及している箇所がある<sup>(7)</sup>」と指摘するように、両書には約120年もの時間的隔たりが存在するが、

『河内名所圖會』は『河内鑑名所記』を意識した書物であると言えよう。ところが、この『河内名所圖會』は先の『河内鑑名所記』とは異なり、寄手塚塔、身方塚塔という名称が「正成敵味方戦死者憐<sup>(8)</sup>」という説明のもとに絵図とともに記載されているのである。すなわち、この書物においては、寄手塚塔・身方塚塔は、楠木正成が千早赤阪において行われた南北朝動乱期の戦いで命を落とした者の供養塔として造立されたと説明するのである。

以上、『河内鑑名所記』と『河内名所圖會』の両書における寄手塚塔、身方塚塔の記述について確認した。結果、その記載は『河内鑑名所記』には無く、『河内名所圖會』に見受けられることが認められた。この『河内鑑名所記』にその記載が無いという事実は、本書には詳細に多くの楠木正成関係の記述があることや、狂歌・俳句を記載するという性格から察すれば、寄手塚塔、身方塚塔伝承を意図的に削除したと考えるのは不自然であろう。む



しろ、この両書の持つ相違点こそが歴史的事実、すなわち、『河内鑑名所記』刊行の際に、寄手塚塔・身方塚塔の伝承は存在しなかったと理解したい<sup>(9)</sup>。

## 5. 楠木正成伝承の考察

先に記したように、寄手塚塔、身方塚塔の伝承は『河内鑑名所記』に見られず、『河内名所圖會』で見受けられることを記した。すなわち、延宝7年(1679)には未確認で、享和元年(1801)で確認できるということである。この事実について文化的側面からアプローチしてみたい。

このことを考察するうえで、やや唐突な観は否めないが『曾根崎心中』、『忠臣蔵』を引き合いに出して考えたい。『曾根崎心中』は近松門左衛門作の人形浄瑠璃の曲名である。大坂堂島新地の天満屋の遊女お初と醤油屋平野屋の手代である徳兵衛の2人が、勧められた結婚話を断ったが故の追放、友人の裏切り等

が重なり合った結果、天国で夫婦となることを誓い合い、露天神の森で心中するというストーリーである。「愛と名誉のために選択した死」をもって結びとするこのプラトニックな心中ストーリーは、「心中など現実の事件を積極的にとりあげて、それを人間のドラマとして表現したものであったから、都市民から大きな共感をもって迎えられたのであった」<sup>(10)</sup>との指摘のとおり「心中もの」として一大ブームを巻き起こし、元禄16年(1703)には大坂竹本座で初演がなされ、竹本座の借金を一気に返すほど大ヒットしたと言われている。

続いて『忠臣蔵』であるが、こちらは毎年年末になればTV放映がなされ、比較的よく知られているので、ここではストーリーについては記述しないが、藩主の無念を晴らすという「忠誠心」をキーワードとするものである。竹田出雲・三好松落・並木千柳の合作である赤穂義士の仇討ちを脚色した浄瑠璃の代表作である『仮名手本忠臣蔵』は、寛延元年

(1748)の8月には大坂竹本座で初演され、12月には歌舞伎化がなされた。

『曾根崎心中』と『忠臣蔵』の両者のストーリーには「愛と名誉」、「忠誠心」、「命を賭す」等の骨子が確認できる。これらは先に記したように元禄16年(1703)、寛延元年(1748)に大坂竹本座で初演され大ヒットしたが、この時期は「浮世」「義理」「人情」で現実を理解し、「正道の商」「根性」で民衆の主体性を主張し、「転合」で遊ぶとともに、「不仁」「侍畜生」と封建制を批判し、「まこと」に民衆的反省や人間的価値を求め、「正直」「才覚」などの独特な民衆倫理や、「すい」「はり」など独自の民衆的美意識を生み出した<sup>(11)</sup>という江戸時代前期の元禄文化の時期にあたる。

そして、本稿で問題とする寄手塚塔、身方塚塔の伝承－自軍(身方)の供養塔よりも敵軍(寄手)の供養塔を少しだけ大きく建てたという何とも奥ゆかしい、正成の人情味が感じられる伝承－は、『河内鑑名所記』に見られ

ず『河内名所圖會』で見受けられる。すなわち、延宝7年（1679）には未確認で、享和元年（1801）で確認できるのである。まさに、この民衆性豊かな元禄文化を挟んでその伝承の有無が生じているのである。

## 6. まとめ

これまで、石造五輪塔寄手塚塔・身方塚塔に付された楠木正成伝承について考察した。石造五輪塔という物質的観点からは、時間的ヒアタスが認められるために、楠木正成が供養塔として造立したと思考することには少し困難があるということを出発点とし、『河内鑑名所記』と『河内名所圖會』を比較資料として考察した。両書の記載内容から、楠木正成伝承は延宝7年（1679）から享和元年（1801）の間、すなわち、元禄文化の頃に付加された伝承である可能性を指摘した。このことはその伝承のヒューマンな内容が、『曾根崎心中』や『忠臣蔵』に認められるような元禄文化の

意識と合致することからも明らかであろう。  
すなわち、伝承そのものは近世になってから  
付与されたと考えられ内容は肯定しがたいが、  
伝承が付加されるという現象はこの地の五輪  
塔造立に楠木氏が関係したという痕跡があっ  
たからこそ生じた可能性を指摘しておきたい。

そして、10基以上の残欠資料が残存するとい  
うこの墓地の在り方、つまり、当該地域の  
石塔造立史を検討する上で、楠木氏について  
も考える必要があると考えられるのである。

#### 【 註 】

( 1 ) 福澤邦夫 「五輪塔」『千早赤阪の石造  
文化財』Ⅰ千早赤阪村文化財調査報告書第  
4集，千早赤阪村教育委員会，1994年，P  
16～25

( 2 ) 前掲註 ( 1 ) P 16～18

( 3 ) 三田章編『河内鑑名所記』上方藝文叢

刊行会，1980年

(4) 秋里籬島『河内名所圖會』臨川書店，  
1985年

(5) 前掲註(3) P 400

(6) 前掲註(3) P 394～395

(7) 竹居明男「解説」『河内名所圖會』臨  
川書店，1995年，P 513

(8) 前掲註(4) P 77

(9) この他にも享保20年(1735)に刊行された『日本輿地通志畿内部』という地誌があるが、これは江戸幕府による官撰の地誌であり、『河内鑑名所記』、『河内名所圖會』の2書に比して性格が異なるため、ここでは比較資料として扱わない。なお、この書物も『河内鑑名所記』と同様、寄手塚塔、身方塚塔についての記述は見当たらない。

(10) 倉地克直「歌舞伎と人形浄瑠璃」『日本歴史館』，小学館，1993年，P 728～729

(11) 高尾一彦「げんろくぶんか」『国史大辞典』第5巻，吉川弘文館，1985年

## 第 9 章 加古川下流域における石造五輪塔造立史

### 1. はじめに

先に記したように、河南台地南部における凝灰岩製層塔群や五輪塔造立には、律宗が深く関与していると考えた。言うまでもないが、石工集団を抱えていたと考えられる律宗は、他の地域においても石塔の造立を進めていた。

以下、加古川下流域の事例を検討したい<sup>(1)</sup>。

### 2. 加古川下流域における五輪塔

#### ① 益気神社五輪塔【貞和 5 年（1349）】（図 2・写真 1）

加古川市平荘町池尻に所在する。加古川と平荘湖の間に位置する丘陵上に益気神社は鎮座する。南側から階段を登ると社殿があるが、五輪塔はそこからさらに丘陵を奥へと進んだ所に、宝篋印塔、宝塔とともに南面して並ぶ。また、背後には一石五輪塔も確認できる。



総高 176.5 cm を測り、幅 93.5 cm、高さ 11.0 cm の基壇上に建つ。空輪、風輪、火輪、水輪の各部に四門の梵字を配する。地輪は中央で高さ 46.0 cm、側面高は 45.0 cm、幅は 64.8 cm を測り、地輪南面中央に種子アーを刻み、両端には銘文を 3 行計 13 字で、次のように刻む。

貞和五年己丑十一月日

アー

一 結 集

水輪は高さ 49.0 cm で上端径 24.0 cm、下端径 30.5 cm を測る。水輪最大径は下端から高さ 30.0 cm の箇所で 62.5 cm を測る。火輪は高さ 36.0 cm、軒厚は中央で 11.0 cm、隅で 12.0 cm を測る。火輪上端幅は 25.0 cm である。空風輪は一石で造られる。空輪高 28.5 cm、風輪高 17.0 cm を測る。風輪は上端径 30.7 cm、下端径 17.8 cm である。風輪上端は傾斜し、その上位に空輪が付く。空輪最大径は下端から高さ 10.5 cm の箇所で 30.0 cm を測る。この五輪塔

は、この後に記す他の五輪塔に比して、基壇を有する分だけ、大きさや格式を感じる印象を受ける。

② 泉福寺五輪塔【文和二年（1353）】（図3・写真2）

加古川市尾上町今福の泉福寺の墓地内に建っている。この五輪塔は、地輪が地中に埋没しているため、地輪の下端を確認することができない。よって、地輪の高さについては、加古川市史の調査計測値である40.6 cmを使用した。この数値での合算による現高は179.8 cmを測る。地中埋没部分を除く地輪の中央高は34.8 cm、側面高は34.0 cm、幅は63.0 cmを測った。地輪の西面に銘文を4行計15字で次のように刻む。

文和二年

二月廿五日

一結衆才

敬白

水輪は欠損が著しい。高さ 54.0 cm で上端径 31.2 cm、下端は欠損が特に激しく、現径 26.3 cm である。最大径は下端から高さ 32.0 cm の箇所で 67.0 cm を測る。火輪は縦に長く勾配は急である。高さ 45.0 cm、軒厚は中央で 11.5 cm、隅で 15.0 cm を測る。上端幅は 24.7 cm である。空風輪は一石で造られ、現状では中心からやや左側へずれた位置で落ち着く。空輪高 25.5 cm、風輪高 14.7 cm を測る。風輪は上端径 30.7 cm、下端径 22.4 cm である。上端は傾斜し、その上位に空輪が付く。空輪最大径は下端から高さ 16.0 cm の箇所で 30.6 cm を測る。この塔は、縦に長く急勾配のプロポーションを呈する火輪に特徴がある。先に見た益気神社五輪塔とさほど離れた距離に位置せず、且つ、造立年代も益気神社五輪塔で貞和 5 年（1349）、この塔で文和 2 年（1353）であり、4 年という短いスパンでの造立であるが、各々のプロポーションからは、ヒアタスが存在する感を受ける。

③ 神木五輪塔【延文5年（1360）】（図3・写真3）

加古川市平荘町神木に所在する。石仏、板碑とともに南面して並ぶ。空風輪を欠失する。現高は134.0 cmを測る。地輪は中央で高さ48.0 cm、側面高は47.5 cm、幅は62.8 cmを測る。南面左側に寄せて2行計15字で次のように銘文を刻む。

延文五年十一月中旬

千部経結衆○

水輪は高さ47.3 cmで上端径30.7 cm、下端径29.5 cmを測る。水輪最大径は下端から高さ27.0 cmの箇所で63.0 cmを測る。火輪は高さ38.7 cm、軒厚は中央で10.0 cm、隅で12.5 cmを測る。軒幅は上端で54.0 cm、下端で56.0 cmである。上端幅は22.5 cmである。

④ 福林寺五輪塔【貞治2年（1363）】（図4・写真4）

加古川市加古川町備後に所在する福林寺の

本堂左、現在の納骨堂の上に建っているおり、元位置ではないと考えられる。各部材はセメントで固定されている。現高は123.5 cmを測る。空風輪の一部を欠損する。地輪は中央で高さ36.0 cm、側面高は35.5 cm、幅は50.0 cmを測る。南面に5行計29字で次のような銘文を刻む。

右志者ゐ法界

衆生平等利益

貞治二年〇卯

三月十八日

一結衆才敬白

水輪は高さ36.5 cmで上端径25.0 cm、下端径23.5 cmを測る。水輪最大径は下端から高さ22.0 cmの箇所で49.0 cmを測る。金剛界四仏の種子を配するが南側にアクが位置している。火輪は横方向に広がるプロポーションを呈する。高さ27.5 cm、軒厚は中央で7.5 cm、隅で10.0 cmを測る。火輪の上端幅は19.0 cmである。空風輪は一石で造られる。空輪高14.5

cm、風輪高 9.0 cm を測る。空輪最大径は下端から高さ 8.0 cm の箇所では 16.7 cm を測る。これまでに記した五輪塔に比して、小型のものである。

⑤ 報恩寺五輪塔（貞治塔）【貞治 6 年（1367）】  
（図 4・写真 5）

加古川市平荘町山角に所在する報恩寺に建つ。報恩寺は西大寺末寺帳にもその名が見える律宗寺院である。本堂西側の墓地横、稻荷神社への参道を進むと左手に 4 基の五輪塔が東面して建っている。それら 4 基の五輪塔のうち、北端の五輪塔が本塔である。なお、南端が後に記す応永 10 年五輪塔であり、中央の 2 基は御影石製の五輪塔である。空輪先端を欠失、組み合わせ式の基壇上に建ち、現高 158.8 cm を測る。地輪は中央で高さ 40.9 cm、側面高は 39.0 cm、幅は 57.5 cm を測る。3 行計 14 字で次のように銘文を刻む。

貞治六丁未

覺 譽 大 徳

十 月 廿 一 日

水 輪 は 高 さ 45.0 cm で 上 端 径 23.3 cm 、 下 端 径 27.4 cm を 測 る 。 水 輪 最 大 径 は 下 端 か ら 高 さ 26.0 cm の 箇 所 で 59.3 cm を 測 る 。 火 輪 は 高 さ 35.5 cm 、 軒 厚 は 中 央 で 11.0 cm を 測 る 。 上 端 幅 は 24.0 cm で あ る 。 空 風 輪 は 一 石 で 造 ら れ る 。 空 輪 先 端 を 欠 失 す る 。 空 輪 高 20.8 cm 、 風 輪 高 16.6 cm を 測 る 。 風 輪 は 上 端 径 30.5 cm 、 下 端 径 19.5 cm で あ る 。 風 輪 上 端 は 傾 斜 し 、 そ の 上 位 に 空 輪 が 付 く 。 空 輪 の 最 大 径 は 下 端 か ら 高 さ 11.0 cm の 箇 所 で 30.0 cm を 測 る 。

⑥ 報 恩 寺 五 輪 塔 （ 応 永 ） 【 応 永 10 年 （ 1403 ） 】

（ 図 5 ・ 写 真 6 ）

先 の 報 恩 寺 五 輪 塔 （ 貞 治 6 年 塔 ） で 記 し た よ う に 、 こ の 五 輪 塔 は 一 番 南 側 に 位 置 す る 。 空 輪 先 端 を 若 干 欠 失 す る 。 現 高 183.2 cm を 測 る 。 基 壇 は 高 さ 23.0 cm を 測 り 、 複 弁 三 葉 の 反 花 を 伴 う 。 地 輪 は 中 央 で 高 さ 42.5 cm 、 側 面 高



は 40.0 cm、幅は 58.0 cm を測り、北面に 4 行計 19 字で次のような銘文を刻む。

応永十年末

八月二日

当寺第七長老

利海大徳

水輪は高さ 41.5 cm で上端径 35.0 cm、下端径 33.0 cm を測る。水輪最大径は下端から高さ 26.0 cm の箇所では 63.0 cm を測る。火輪は高さ 31.2 cm、軒厚は中央で 10.3 cm を測る。上端幅は 22.0 cm である。

空風輪は一石で造られる。空輪高 27.0 cm、風輪高 18.0 cm、上端径 34.5 cm を測る。風輪上端は傾斜し、その上位に空輪が付く。最大径は下端から高さ 13.5 cm の箇所では 31.4 cm を測る。

### 3. 五輪塔群のグループ化

加古川下流域における竜山石製在銘五輪塔について、本稿では年代の古い順に、益気神

社五輪塔から記したが、時期的にそれを遡る  
竜山石製在銘五輪塔が、2基存在する。高砂  
市に所在する阿弥陀墓地五輪塔と大日寺五輪  
塔の2基である<sup>(2)</sup>。前者で文保2年(1318)、後  
者で暦応5年(1342)の年号を有する。これ  
らの五輪塔は、総高200.0cmを超える比較的  
大型のもので、水輪最大径が下半にある所謂  
「無花果型」<sup>(3)</sup>と呼称される形態を呈するもの  
であり、他に比して異質である。①益気神社  
五輪塔から⑥報恩寺五輪塔(応永)について  
は、竜山石という同じ石材を用いて造立がな  
されたわけであるが、興味深いことにすべての  
五輪塔に銘文が刻まれている。更に、⑤報  
恩寺五輪塔(貞治塔)と⑥報恩寺五輪塔(応  
永)を除くすべての五輪塔の銘文には「結衆」  
が造立したことが示されている。このことは  
この地域に住する有力農民などの庶民層によ  
って形成された宗教的グループによる造立が  
行われたことを示唆するもので、地域色の顕  
著な宗教行為であると言えよう。このことは

すぐ近くにある地元石材の竜山石を用いて造立されたことから明らかであろう。また、数値等で示すことはできないが、これらは洗練された様を呈さず一定に定まらない感を受けるものである。概して竜山石で造られた①益気神社五輪塔、②泉福寺五輪塔、③神木五輪塔、④福林寺五輪塔については、地域色の顕著な五輪塔であると言えよう。

一方、⑤報恩寺五輪塔（貞治塔）と⑥報恩寺五輪塔（応永）については、「結衆」ではなく寺院に係する造立で比較的形態が類似、益気神社五輪塔のグループに比して洗練された様を呈した感を受ける。以上のように、加古川下流域の五輪塔群は2つのグループとして捉えることが可能である。

ここで報恩寺五輪塔（正和塔）に注目したい。報恩寺には先に記した竜山石製の⑤報恩寺五輪塔（貞治塔）と⑥報恩寺五輪塔（応永）の他にも数基の五輪塔があるが、この塔は4基並ぶ五輪塔のうち、南側から2番目に位置

する御影石製の五輪塔で正和5年（1316）の年号を刻むものである。総高は199.2 cmを測る。17.0 cm、幅104.7 cmの切石基壇が設けられている。地輪は高さ46.1 cm、幅72.1 cmを測り、北面に3行計14字で次のような銘文を刻む。

宇都宮

正和五季辰丙八月日

長老

水輪は高さ49.8 cmで、水輪最大径は62.5 cmを測る。火輪は高さ36.8 cm、軒厚は中央で12.0 cmである。空風輪は一石で造られる。空輪高30.5 cm、風輪高19.0 cm、上端径37.2 cmを測る。風輪上端は傾斜し、その上位に空輪が付く。この五輪塔の基壇の下から、納骨施設が確認されており<sup>(4)</sup>、一乗寺の僧で後にこの報恩寺へ移って長老となった宇都宮長老の墓塔であると考えられる。年代的にはこの正和塔が最も古く、かつ御影石製であることから搬入された石塔であると考えられる。他地

域の石材を使用していることから、その形態に地元石材の竜山石のものとは違いが生じることには首肯できよう。なお、御影石製の報恩寺五輪塔（正和）と①益気神社五輪塔は地輪・水輪・火輪の高さは前者で46.0 cm・49.0 cm・36.0 cm、後者で46.1 cm・49.8 cm・36.8 cmと極めて近い数値データを示し、地域で五輪塔を造立する際に、報恩寺のそれをモデルとした可能性もあろう。

#### 4. まとめ

以上、加古川下流域の五輪塔造立史について概観した。結果、竜山石と呼ばれる地元石材を用いて「結衆」により造立された五輪塔群と御影石を初源とし、竜山石を用いて造立された「報恩寺」五輪塔群の2者があることが認められた。このうち、前者の形態は一定に定まらないものであったが、後者は一定の規格が想定されるように形態が似通っていた。先にも記したが、この報恩寺は、西大寺律宗

寺院である。当時、播磨国には 14 を数える西大寺末寺が存在したようで、大和 42 寺、伊勢の 18 寺、山城 16 寺に次ぐ数となっており、この地域が西大寺勢力の顕著な地域であったことを伺うことができる<sup>(5)</sup>。

なお、西大寺律宗は報恩寺に正和 5 年の御影石製五輪塔が造立された頃、顕著に広域的な展開がなされた時期であったと考えられる。大阪の南東部、寛弘寺に所在する五輪塔にも正和 4 年の年号をもつ五輪塔が造立されたことは偶然ではない。ここに西大寺律宗の教線拡大が看取されよう。

#### 【 註 】

( 1 ) 五輪塔の位置については図 1 に示した。

( 2 ) 写真 8 ・ 9 参照。

( 3 ) このように、水輪が無花果型を呈するものについては、倒れた塔を再び復元する

際に天地を誤って積み直したと考えることも可能である。しかし、他に記した竜山石製五輪塔に比して大型であり異質である感  
は否めず、別の系譜を検討する必要性もある  
ろう。したがって、これらについては今後の課題とし本稿では扱わないこととする。

( 4 ) 森田竜雄「念仏信仰と律宗」『加古川市史』第 1 巻本編 1 考古・古代・中世，2008，  
年， P 431

( 5 ) 前掲註 ( 4 ) 433 頁



## 第 10 章 石塔と石材に関する一考察

### 1. はじめに

中世の石造物については、その多くは同石工グループが同石材で同様の形態の石塔をつくると考えられている。ところが、近世になると石材は商品として流通する傾向にあり、同石工グループが複数の石材をもって同様の形態の石塔をつくるという現象が見られるようになる。このことを論じる上で滋賀県守山市に所在する少林寺を中心とした石塔群に好例を見ることができる。

なお、本章は河南台地における石塔造立への直接的影響を考察するものではないが巨視的に中世の石塔と石材の関係を認識すべく、この事例について論じることとする。

### 2. 研究学史

ここでは一石五輪塔を事例として扱うが、ここでその研究学史について触れておく。

一石五輪塔とは、文字通り複数の石材を接ぐことなく、一つの石材で造形された五輪塔である。すなわち、「一石」とは一材で造られているという製作的観点における語であり、結果として「五輪塔」という造形物中における特定種を表すこととなる。ならばここで、五輪塔について触れる必要がある。

「五輪塔は密教において創始された塔形で、下方から方・円・三角・半月・団形から成る五輪とし、これを地・水・火・風・空の五大をあらわすものとする。(中略)元来、五輪塔は密教において胎藏界大日如来の三昧耶形とされ、五輪塔形そのものが胎藏界大日如来を象徴するものであるが、この塔形は早くから宗派を越えてわが国人に親しまれるようになった<sup>(1)</sup>」と石造美術研究の先駆者である川勝政太郎が解釈したことから、石造美術の世界では、この見解が五輪塔の基礎的解釈として一般に受け入れられている。しかし、その初源等への見解については、以下のように様々な

学説が存在する。

その川勝政太郎は、五輪塔は平安時代より存在する我が国にはじまる塔形であるとし「京都市岡崎の廃法勝寺趾より発見された軒丸瓦や、軒平瓦の瓦当に現はされたものが、現在知られるものゝ中では最も古いやうである。此等の瓦は保安3年（1122）に建立された法勝寺小塔院の屋蓋に使用されたものと考へられて居る」<sup>(2)</sup>と我が国最古の五輪塔の図像が瓦に描かれていることを指摘し、文献資料では『兵範記』の「先穿穴・・・次奉殯穴底・・・次埋土、其上立五輪石塔」という仁安2年（1167）の記事に注目する。そして、仁安4年（1169）の奥州中尊寺釈尊院墓地塔、豊後中尾の嘉応2年塔（1170）と承安2年塔（1172）、さらに治承5年（1181）の福島県五輪坊墓地塔と立て続けに実例を挙げ、先の法勝寺瓦当例から、これら奥州中尊寺釈尊院墓地塔等の四塔を経て、鎌倉様式に変化するのではないかとプロポーションの変化という実証的観点

をもって観察する。

黒田昇義は、醍醐寺において慶長年間に焼失した影堂の再興にあたり、整地中に発見された石櫃に収められていた銅製の五輪塔が『醍醐寺新要録』や『義演准后日記』等の記事に記されている応徳2年（1085）塔ではないかと指摘する<sup>(3)</sup>。

佐々木利三は、五輪塔は日本独自の造形物であるという前提に立ち、九字秘密を釈した覚鑿が五輪塔形の成立に関わった人物であるとした。また、「従来五輪塔が密家の独占的所伝と解されて来たものゝ、実はその教義的具象化の始めに於て、既に浄土教と浅からざる交渉を有つてゐたものなることを想ふ<sup>(4)</sup>」と浄土教との関連を論じている点、新しい視点である。

村田治郎は、もし中国で発見されたならば訂正すると断りながら、中国や朝鮮では五輪塔は今まで発見されていないので、五輪塔は日本にその起源をもつものであり、漢訳經典

の五輪図を手本としたのであろうと考察する。  
そして、「図は平面的な線描だから、それを立体化するに当って宝塔の形が強く影響して、火輪が宝形屋根の姿となった」<sup>(5)</sup>と解釈する。  
これら佐々木や村田等の議論を踏まえた上で、藪田嘉一郎は、「五輪塔のもとをなす五輪図形は原始宗教のファーリック・シムボルにその端を発し、仏教の中の密教に摂取せられて形を整え、中国日本に伝わり、日本では真言念仏の興起によって、これらが塔婆として利用され、五輪塔なるものが創成された。創成したのは小野流の真言師と推量せられるが、その五輪塔は高野山に上がって宝塔と合体して形を整え、高野の念仏聖によって全国に普及された」<sup>(6)</sup>とその成立について具体的に論じる。

田岡香逸は、先に記した黒田の紹介した醍醐寺における銅製応徳2年（1085）塔についての信憑性を認め、「五輪塔の形式の起源が、五大思想にもとづく限り、その初期の表現は、

図解としてであったこと疑いなく、これが立体化された年代が、いまや少なくとも11世紀の後半以前にさかのぼるとすると、石造五輪塔の造立も、ほぼ、これに準じて考えてよいのではなかろうか<sup>(7)</sup>と石造のそれも遡らせて考えている。そして、地下に埋蔵もしくは埋没したもので、よほど好条件に恵まれない限り、完全な形を整えたものを見ることは困難であり、一見する機会があったとしても、その年代を推定することが困難であろうと条件が悪く、残存していないためにその時期の石造五輪塔は管見できないと結論する。

千々和実は、教王護国寺文書の『東寺新造仏具等注進状』の中に康和5年(1103)に「仏舍利安置五輪塔 其内中石輪 水精五輪塔 金□塔各一基」という記載があることを紹介し、従来まで文献的初見とされていた『兵範記』の「先穿穴・・・次奉殯穴底・・・次埋土、其上立五輪石塔」という仁安2年(1167)を遡る記事があると主張する<sup>(8)</sup>。

また、近年の研究では、考古学的手法をもってその研究を展開する狭川真一が、出現の背景の一部に触れ得たにすぎないと断りながら、「五輪塔出現の背後には天台宗に関わる集団や人物を想定することができ、しかも時代的な背景を考えると舍利信仰と深く結びついた結果、その容器としての役割を担うべく立体化された可能性が高い」<sup>(9)</sup>と天台宗との関係性を論じる。

一方、斎藤彦松等、大陸にその起源を求める学説もある<sup>(10)</sup>。

これら諸説の存在からも明らかなように、その初源等への解釈は定まっておらず、今後も活発な議論が必要であろう。

ところで一石五輪塔という物質的分類であるが、先学により様々な定義がなされている。川勝政太郎は、「室町時代以後に多く作られた一五センチ角、高さ五〇センチ内外の細長い小五輪塔があるが、これらは庶民的な墓塔であった、一石五輪塔の名で区別する」<sup>(11)</sup>と定義



しているし、田岡香逸は、特定の個人が特定の個人のために造立することが多く見られる室町時代の「一石彫成の五輪塔で、基礎の背が高く柱状に造ったもの」<sup>(12)</sup>を一石五輪塔と定義する。また、高野山における一石五輪塔研究を詳細に進めている木下浩良は、「幅に対する高さの比率が1.0をこえる方柱状の一石でできた五輪塔」<sup>(13)</sup>と数値を用いて具体的に定義している。このように定義は様々であるが、本稿はその起源論などに言及する論考ではなく、平安時代後半頃に出現し、鎌倉時代に定形化する、いわゆる一般的な五輪塔と区別さえできれば良いので、やや曖昧な表現はあるが、「一五世紀以降に多く見られる一石で造られた小型の五輪塔」としておく。

このように定義される一石五輪塔であるが、本稿の基礎資料である少林寺の一石五輪塔に関連する論考を以下に確認しておく。田岡香逸は、「野洲川改修地区調査資料 近江守山市の石造美術（後）一服部・小村・笠原・矢島

一」と題して、少林寺の調査成果について記している<sup>(14)</sup>。この文章は、調査によって銘文が判読できた29点の一石五輪塔について記す資料紹介文章である。特筆すべきは、後に詳しく触れるがこれらの石材をすべて和泉砂岩と解釈している点である。同様に、瀬川欣一も『近江 石の文化財』において少林寺の一石五輪塔群の写真を掲載すると共に、そのキャプションにこれらがすべて和泉砂岩製であることを記す<sup>(15)</sup>。

また、田岡は少林寺に見られるような砂岩製の一石五輪塔について、この砂岩は大阪府泉南の葛城山の産石のもので、構造様式については、基礎下部を地中に埋めて安定を図った埋め込み式であると解し、この構造様式を近江における地域的特徴であると評価した。そして「近江における一石五輪塔の造立は西教寺にはじまると考えてよいようである」<sup>(16)</sup>と近江における一石五輪塔の造立を西教寺に求めた。

なお、筆者は少林寺の一石五輪塔から看取される問題として、先学はすべてを和泉砂岩製のそれとして解釈しているが、それ以外の石材も使用されている可能性があることを指摘し、また、砂岩製一石五輪塔のプロポーションについては、和泉地域のものには類似しないということが認められるのではないかと、上記した田岡や瀬川らの学説に一部再考が必要な旨を記したことがある<sup>(17)</sup>。

### 3. 少林寺一石五輪塔群の調査の概要

#### (1) 調査経過

滋賀県守山市に所在する少林寺は、「文明年中、一休宗純の嗣法である桐嶽紹鳳が開基し、そののち火災のために堂宇を焼失したが、永正年中に復興し、さらに兵戦にかかったが明暦年中に再建され、文化十三年と明治四十三年の改修を経て」<sup>(18)</sup>現在に至る臨済宗大徳寺派に属する寺院である。

調査の対象とした一石五輪塔群は、少林寺

境内墓地の東側、桐嶽和尚の墓所の前に集められている一群である。この一群には相輪や五輪塔空風輪等、一石五輪塔以外の石塔部材が含まれていたが、調査はあくまで一石五輪塔の調査であったため、これらを除く60点をその対象とした。一群は、東方向を正面として塔高の低い塔から順に最終列に塔高が高いものとなるよう数列に並べられていた。(写真1) 調査にあたっては、便宜上、北東隅のものを「NO.1」として後方へ順に数値を大きく付し、最終列に達するとすぐ左隣列の先頭へ数値が連続するよう記号化した。

現地調査では、計測、採拓、写真撮影、実測の4つの作業を行った。第1回目の調査は、2005年6月11日に行った。この日は、60点を数える一石五輪塔群について計測を行った。計測は地輪下端を基準点とし、そこから地輪上端、水輪上端、火輪上端、風輪上端及び空輪先端を計測点として現地で計測・記録してデータを持ち帰り、後日、計測値の引き算に

より各々の部材高を求めた。また、地輪については、その上端と下端の幅を計測、加えて正面に対する奥行きを厚さとして計測した。第2回目の調査は、2005年6月25日に行った。この日は、地輪に銘文を刻む塔について採拓作業を行い、加えて写真撮影も行った。そして、やや期間があくが、2006年4月29日に、第3回目の調査を行った。この日は、7基の一石五輪塔をピックアップして実測作業を行った。また、少林寺現地での調査に加えて2005年7月4日、7月8日、9月18日、2006年4月1日には、周辺の寺院墓地等に見られる一石五輪塔の状況調査を行った。なお、これら周辺の調査については、写真撮影とメモ記録をとるに留まるものである。

以下、調査の概要について計測値、石材、銘文の順に記す。

## (2) 計測値

先に記したように、対象とした一石五輪塔

は 60 点を数えた。これらは概して、比較的残存状況が良好であったが、もちろんこれら全点が完全な様を呈して残存していたわけではなく、完形のものは 49 点、地輪のみ残存が 1 点、水輪から上位残存が 3 点、地輪から水輪のみ残存が 2 点、地輪から火輪のみ残存が 2 点、地輪から風輪まで残存が 1 点、火輪から上位残存が 1 点、火輪のみ残存が 1 点という残存状況であった。

そして、これらについて地輪下端を基準点とし、そこから地輪上端、水輪上端、火輪上端、風輪上端及び空輪先端までを現地で計測・記録し、連続する計測値の引き算により各部材高を求めた。また、地輪については、高さのみでなくその上端と下端の幅を計測し、加えて正面に対する奥行きを厚さとして計測した。その結果が表 1 である。

### (3) 石材

少林寺一石五輪塔群は、肉眼の観察から以

下の 3 種の石材をもって構成されることが認められる。(写真 2) なお、観察には 10 倍のルーペを用いた。

A 類 概して黒色を呈し、触れるとザラザラした感があり、ルーペで観察すると方向性のない結晶が見られる石

B 類 概して茶色を呈し、触れると小粒にザラザラした感があり、ルーペで観察すると結晶が見られない石

C 類 概して白色を呈し、触れるとツルツルした感があり、肉眼でも石英が顕著に見られる石

これらは 60 点中、A 類が 47 点 (78%) B 類が 6 点 (10%) C 類が 7 点 (12%) を数え、A 類が大半を占めることが確認できる。



#### (4) 銘文

A 類と分類した石材においては、地輪の残存する 42 点中銘文の無いものは 1 点のみであり、かなりの高い率で銘文が刻まれている。B 類と分類した石材のものは、6 点中すべてに銘文が刻まれ、C 類と分類した石材については、判断に窮するものもあるが、7 点中 3 点にそれが確認できる。これらを一群として捉えた場合、55 点中 50 点に銘文が確認でき、91% とかなり高い割合で銘文が刻まれていることが認められる。

それらの銘文をその表記法により分類すれば、以下のように分類できる。

a 類 例 えば 「 慶 長 二 年      ア 宗 連 大 姉      十  
月 二 十 九 日 」 の よ う に 年 号 、 法 名 、  
月 日 の 順 に 右 か ら 3 行 に わ た っ て 刻  
む も の 。

b 類 例 えば 「 十 一 月      ア 宗 善 禅 定 門      十

四日」のように月、法名、日の順に  
右から3行にわたって刻むもの。

c 類    例えば「ア智運法印」のように法名  
のみを1行で中央に刻むもの。

これらの表記法を石材別に見ると、A類と分類した石材で銘文を刻む41点中、a類は31点、b類は4点、c類は4点、銘文が刻まれていることは確認できるが、内容まで判読できないものが2点であった。B類と分類した石材で銘文を刻む6点中、a類は5点、銘文が刻まれていることは確認できるが、内容までは判読できないものが1点であった。C類と分類した石材で銘文を刻む3点については、3点とも内容までは判読できないものであった。

以上、銘文表記法の大半はa類であり、b類、c類についてはA類と分類した石材にのみ認められる表記法であった。

### 3. 考察

#### (1) A～C類の石材種について

A～C類の石材を考えるにあたり、まず先学の所見について確認しておきたい。

1973年に田岡香逸は、少林寺の調査成果について記している<sup>(19)</sup>。調査によって判読できた銘文を記すことに重きを置いたこの文章には、調査した一石五輪塔の石材は、すべて和泉砂岩であると記されている。また、2001年に瀬川欣一は、少林寺の一石五輪塔群の写真を掲載すると共に、そのキャプションにこれらが和泉砂岩であることを記している<sup>(20)</sup>。すなわち、先学の調査においては、少林寺の一石五輪塔群は、和泉砂岩製であると認識されているのである。

ところが、先に記したように今回の調査から少林寺の一石五輪塔群は、A～C類の3種に分類できると考えられる。これら各々について、肉眼観察により色調を大きく分類するならば、A類は黒色、B類は茶色、C類は白

色と分類することができる。このうち、黒色を呈するA類は、1972年に土井卓治が西教寺墓地の一石五輪塔の中に「黒い砂岩」がある<sup>(21)</sup>と表現したものであると考えられる。

しかし、A類と分類したこの石材は「概して黒色を呈し、触れるとザラザラした感があり、ルーペで観察すると方向性のない結晶が見られる」というその特徴から、ハンレイ岩<sup>(22)</sup>もしくは閃緑岩であると判断される。そして、A類とプロポーションが類似する一石五輪塔が、京都府長岡京市所在の勝龍寺城から出土しており、その報告文にはハンレイ岩と記されていることから<sup>(23)</sup>、ハンレイ岩もしくは閃緑岩と判断される少林寺の一石五輪塔をハンレイ岩と解することとした<sup>(24)</sup>。

また、B類については諸特徴より砂岩、C類については花崗岩と判断する。

なお、その際、注意すべきことはB類の砂岩産出地の問題であろう。前記したように、先学は和泉地方産出であるいわゆる「和泉砂岩」

と呼ばれている石材と捉えている。しかし、  
厳密に言えば肉眼観察レベルで産地同定を行  
うことには無理があろうし、後に記すがプロ  
ポーションと絡めた場合には、そうとも言い  
切れないと考えられるため、産地については  
判断を下さず、本稿では「砂岩」とその石材  
種の記載をするに留めておく<sup>(25)</sup>。

以上、石材についてまとめると、A類はハ  
ンレイ岩で全体の78%を占めることから当  
寺で主体的な石材と判断し、B類については  
砂岩、C類については花崗岩であると判断す  
る。

## (2) ハンレイ岩製一石五輪塔のプロポーシ ョンの時間的变化

ハンレイ岩製としたA類の一石五輪塔は、  
地輪部分が比較的長く造られる。火輪屋根部  
は、綺麗な筒状を呈するように成形される点  
に特徴が見出せる。また、この部分は、時間  
を経るに従い大きな変化を見せる点も注目さ

れてよい。このような造形的特徴が観察できるハンレイ岩製一石五輪塔は、47点を数えるが、このうち銘文に年号が刻まれるもの、すなわちA a類は31点であった<sup>(26)</sup>。この類からハンレイ岩製一石五輪塔におけるプロポーシヨンの時間的変化を考察する。

31点を数えるA a類は、天文15年塔(1546)に最も古く、寛永17年塔(1640)に最も新しい元号を見出せる。このうち明瞭に判読できない1点を除く30点を元号毎に記せば、天文年間(1532～1555)が2点、永禄年間(1558～1570)が2点、元亀年間(1570～1573)が2点、天正年間(1573～1592)が8点、文禄年間(1592～1596)が1点、慶長年間(1596～1615)が12点、元和年間(1615～1624)が1点、寛永年間(1624～1644)が2点となる。これらから概した時間的推移を看取できるよう、天文15年塔(1546)、文禄2年塔(1593)、慶長20年塔(1615)、寛永17年塔(1640)を任意にピックアップして考察する。なお、こ

れらについては実測図（図 1）を作成した<sup>(27)</sup>。

（写真 3）

天文 15 年塔（1546）は、総高 36.0 cm を測る。地輪は高さ 17.4 cm、またその平均幅は 10.4 cm を測る。そこには銘文が 17 文字で 3 行にわたり「天文十五年 ア紹光禪定門 十一月廿五日」と刻まれる。最大径 10.4 cm を測る水輪は楕円な様を呈し、水輪上端付近と下端付近は、少し窪む程に顕著に成形される。火輪屋根部は緩やかな反りを見せ、四隅に延びる稜線は下降しながら先端へと繋がる。火輪における軒隅高は 2.7 cm を測る。最大径 7.4 cm を測る空輪は、比較的丸く成形される。

文禄 2 年塔（1593）は、総高 42.2 cm を測る。地輪は高さ 21.2 cm、またその平均幅は 11.9 cm を測る。そこには銘文が 17 文字で 3 行にわたり「文禄二巳 ア大智宗恵禪定門 正月廿八日」と刻まれる。最大径 11.8 cm を測る水輪は楕円な様を呈する。火輪屋根部は先の天文 15 年塔に比してその角度をやや直にして反



り、四隅に延びる稜線は下降しながら先端へと繋がる。火輪における軒隅高は3.1 cmを測る。空輪は先の天文15年塔に比してその頭部において平坦な感を呈し、最大径は9.0 cmを測る。

続いて慶長20年塔（1615）は、総高44.1 cmを測る。地輪には「慶長卅卯年 ア宗利庵主 正月十七日」と15文字で3行にわたって銘文を刻む。地輪の高さは22.3 cm、平均幅は11.4 cmを測る。水輪は最大径11.6 cmを測る。火輪屋根部の反りは先の文禄2年塔とほぼ同様な角度をもって垂下し、四隅に延びる稜線は下降しながら先端へと繋がる。火輪における軒隅高は3.2 cmを測る。空輪は最大径8.9 cmを測り、やや丸味をとり戻す。

最後に寛永17年塔（1640）であるが、総高45.9 cmを測る。地輪は、高さ23.3 cm、またその平均幅は9.9 cmを測る。そこには完全には判読できないが、銘文が18文字で3行にわたり「寛永十七年 ○慈仙大姉○○霍 四月

井三日」と刻まれる。最大径 10.1 cm を測る水輪は、先の 3 塔に比してより円形に成形される。また、水輪上端付近と下端付近は窪む程に顕著に成形される。火輪屋根部は内向する丸味をもって成形され、四隅に延びる稜線は、上方へ延伸し四隅へと繋がる。軒部は極端に分厚く成形され、火輪における軒隅高は 5.0 cm を測る。火輪と風輪の接点付近や空輪と風輪の接点付近等も、水輪の上端・下端付近と同様に顕著に成形される。空輪は最大径 8.2 cm を測り、顕著に丸く成形され球形に近くなる。

以上、ハンレイ岩製一石五輪塔の時間的なプロポーションの変化を検討すべく、任意にピックアップし、その特徴を記した<sup>(28)</sup>。すなわち、水輪については時間を経るに従い楕円形から球形に近く成形されるようになり、水輪の上端付近と下端付近については、最前者の天文 15 年塔と最後者の寛永 17 年塔においてより顕著に成形されている。火輪については、

屋根部は緩やかな反りを見せるが、徐々にその角度を直にしながら、最終的には顕著な丸味を帯びることとなる。軒隅高については、2.7 cm、3.1 cm、3.2 cm、5.0 cm と高さを増して成形される方向性が看取できる。空輪については、時間を経るに従い、より丸味を帯びるように成形される。

### (3) 砂岩製一石五輪塔が提起する問題

ハンレイ岩製一石五輪塔は、天文 15 年（1546）から寛永 17 年（1640）までの間の年号を刻むものが 30 基ある。一方、6 基を数える砂岩製一石五輪塔のうち、年号が判読できるものは、文禄 3 年（1594）、慶長 5 年（1600）、元和 3 年（1617）、元和？年（1615～1524）であり、後者は前者よりも後出することが認められる。これら砂岩製一石五輪塔は、6 点と占める割合という観点からは大きな数値ではないが、その存在については軽視できるものではない。その所以は、これらが、一石五輪

塔群の大半を占めるハンレイ岩製のものとそのプロポーションを類似させるためである<sup>(29)</sup>。

(図 2)

これら両者に見られる現象、すなわち、当寺で主体的な石材の一石五輪塔とプロポーションが類似する別石材のそれが存在するという物質的現象は、そのプロポーションの一石五輪塔を便宜上少林寺タイプとした場合、「少林寺タイプ一石五輪塔＝ハンレイ岩製一石五輪塔＋砂岩製一石五輪塔」と理解される。このようにプロポーションを第一義的観点としてアプローチするならば、ハンレイ岩と砂岩の各々は両者共にその構成材となっている。ならば、時間的に後出する砂岩製のそれについては、少林寺タイプを数量的に補うために用いられた石材という解釈が成立する余地がある。このことは、1つの形式に1つの石材という概念ではなく、1つの形式に複数の石材という概念で理解され、ここには同一圏内におけるニーズの高まりを推測することがで

きよう。

もちろん、調査をおこなった少林寺1箇所だけで、且つ6点という微々たる点数で、同一圏内におけるニーズの高まりを論ずるには早急であることは否めないであろう。

しかし、ここで京都府京都市所在の壬生寺の一石五輪塔群の例を参照されたい。(写真4) 壬生寺にはハンレイ岩製の一石五輪塔が、確認できるが、注目すべきは、ここでもハンレイ岩にそのプロポーションを類似させる砂岩製の一石五輪塔が確認できるのである。このことは、ハンレイ岩と砂岩のセット関係、すなわち両石材の分布域の重複を想起させる事例と評価することができよう<sup>(30)</sup>。

加えて、この砂岩が先学諸氏の指摘するよう  
に和泉産出の砂岩であるとするならば、ハン  
レイ岩製にそのプロポーションが類似する  
という物質的事実は「泉南の産石地で成形さ  
れた一石五輪塔は、最寄りの港へ搬出され、  
そこから舟便によって淀川の川口へ運ばれ、

さらに、川舟によって伏見あたりまで送られ、ここから大津や山科の馬借の手によって大津へ移入されたものであろう<sup>(31)</sup>という見解や「和泉の国で産出した石、今の大阪府南部の阪南市にあった、葛城山脈の石切場から切り出した砂岩製による一石五輪塔が、淀川と瀬田川を経た舟運によって琵琶湖畔へ大量に移入されるようになりました<sup>(32)</sup>」という見解に一部再考を迫る物質的根拠となるであろう。

具体的に述べれば、和泉産出の砂岩を用いて産出地付近で成形されたと解するならば、当然、産出地付近で見かける一石五輪塔のプロポーシオンを呈すると考えるのが妥当であろう。しかし、少林寺に見られる砂岩製一石五輪塔のプロポーシオンは、当寺で主体的な石材であるハンレイ岩にそのプロポーシオンが似るのである。この物質的現象は、成形品の移動ではなく、石材としての和泉砂岩の移動や石工の移動<sup>(33)</sup>、あるいは和泉とは異なる産出地の砂岩を用いた等の発想をもって理解す

べきであろう。

また、このような両者の在り方は、以下の  
ように理解できる<sup>(34)</sup>。(図 3)

第 1 期 少林寺タイプの一石五輪塔がハンレ  
イ岩で造られる時期

第 2 期 少林寺タイプの一石五輪塔がハンレ  
イ岩と砂岩で造られる時期

第 3 期 第 2 期の一石五輪塔に加えて同石材  
で墓標が造られる時期

この進展を解釈するうえで、泉拓良の「諸  
遺物の組合せを「文化」と呼ぶなら、文化は  
諸遺物の加法と減法によるものとなり、諸遺  
物がなぜ共存するかという構造的視点を欠く  
が故に、文化は諸遺物の機能分担を説明する  
ための概念にとどまることとなる」<sup>(35)</sup>という  
思考を意識することは重要であろう。

すなわち、本稿で示したこの段階的進展を



時間的な組み合わせの変化という側面のみで捉えるのではなくして、現段階から次段階への変化のプロセスの要因にこそ文化を読み取ることが重要なのである。本稿で述べるならば、第1期から第2期への変化には、物質的現象として、一石五輪塔というシンボルの数量的増加に対応すべく、新石材がプラスされたことになり、同一思考の社会的浸透・拡大による需用の増加という社会的現象を、第2期から第3期への変化には、墓標という新造形種の登場という物質的現象が認められ、ここには新たな体制的变化や状況変化を想定することができよう。そして、後者の変化には、寺請制との関係が想定されるのである<sup>(36)</sup>。

#### 4. まとめ

以上、少林寺一石五輪塔群の調査概要とそこからの考察について論じた。

結果、プロポーションを第一義的観点とした場合、ハンレイ岩と砂岩は各々その構成材

となっており、このことに年代的事実と数量的事実<sup>(37)</sup>を絡めた場合、前者の不足を補うための後者という理解が可能であることを述べた。また、この観点は従来、成形品の移動と考えられていた説を石材としての和泉砂岩の移動や石工の移動、あるいは和泉とは異なる産出地の砂岩を用いた可能性等の発想をもって再考する必要があることをも提示した<sup>(38)</sup>。そして仮にこの砂岩が和泉産出のものであるならば、少林寺タイプにおけるハンレイ岩と砂岩という両石材の在り方は、地元石材から流通石材へという時代性を表す物質的資料と評価するものに他ならないであろう<sup>(39)</sup>。

ここに中世との異なり、すなわち、石造物の画期を見出すことが可能となるのである。

【 註 】

- ( 1 ) 川 勝 政 太 郎 『 新 版 石 造 美 術 』 誠 文 堂 新  
光 社 ， 1981 年 ， P 192 ～ 222
- ( 2 ) 川 勝 政 太 郎 「 平 安 時 代 の 五 輪 石 塔 」 『 五  
輪 塔 の 起 原 』 綜 芸 舎 ， 1970 年 ， P 2 ～ 3
- ( 3 ) 黒 田 昇 義 「 五 輪 塔 の 成 形 期 に 関 す る 一  
知 見 」 『 五 輪 塔 の 起 原 』 綜 芸 舎 ， 1970 年
- ( 4 ) 佐 々 木 利 三 「 五 輪 塔 の 成 立 」 『 五 輪 塔 の  
起 原 』 綜 芸 舎 ， 1970 年 ， P 23
- ( 5 ) 村 田 治 郎 「 五 輪 塔 の 形 の 起 原 」 『 五 輪 塔  
の 起 原 』 綜 芸 舎 ， 1970 年 ， P 45
- ( 6 ) 藪 田 嘉 一 郎 「 五 輪 塔 の 起 原 」 『 五 輪 塔 の  
起 原 』 綜 芸 舎 ， 1970 年 ， P 137 ～ 138
- ( 7 ) 田 岡 香 逸 「 石 造 五 輪 塔 初 現 の 年 代 に つ  
い て 」 『 宝 篋 印 塔 の 起 源 続 五 輪 塔 の 起 原 』  
綜 芸 舎 ， 1969 年 ， P 79
- ( 8 ) 千 々 和 実 「 初 期 五 輪 石 塔 の 資 料 三 題 」  
『 宝 篋 印 塔 の 起 源 続 五 輪 塔 の 起 原 』 綜 芸  
舎 ， 1969 年
- ( 9 ) 狹 川 真 一 「 五 輪 塔 の 成 立 と そ の 背 景 ー

- 出現期資料の分類を中心とした予察－』『元興寺文化財研究所研究報告二〇〇一』（財）元興寺文化財研究所・元興寺文化財研究所民俗文化財保存会，2002年，P 161～162
- （10）斎藤彦松『五輪塔資料の研究・日本仏典平安期編』第三三回日本印度学仏教学会発表資料 1982年
- （11）前掲註（1） P 122
- （12）田岡香逸『近江の石造美術』六 民俗文化研究会，1973年，P 26
- （13）木下浩良「高野山における一石五輪塔の展開」『高野山中世石造物の実態を探る』石造物研究，会 2004年，P 28
- （14）田岡香逸「野洲川改修地区調査資料 近江守山市の石造美術（後）－服部・小村・笠原・矢島－」『民俗文化』101号滋賀民俗学会，1972年
- （15）瀬川欣一『近江 石の文化財』サンライズ出版，2001年
- （16）前掲註（12） P 28

- (17) 拙稿「一石五輪塔再考～近江における  
砂岩製一石五輪塔について～」『摂河泉』  
第三五号，摂河泉地域史研究会，2006年
- (18) 守山市史編纂委員会『守山市史』守山  
市史編纂委員会，1974年，P 294
- (19) 前掲註（14）
- (20) 前掲註（15） P 187
- (21) 土井卓治『石塔の民俗』岩崎美術社，  
1972年，P 111
- (22) 石材については、ちはや星と自然の  
ミュージアム学芸員の大瀧洋子氏に肉眼鑑  
定をお願いした。なお、肉眼観察では、ハ  
ンレイ岩と閃緑岩の判別は困難であるとい  
う。
- (23) 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター  
『長岡京市埋蔵文化財報告書第六集 勝龍  
寺城発掘調査報告』長岡京市埋蔵文化財セ  
ンター，1991年
- (24) これら両石材は、有色鉱物を30%以上  
含む岩石をハンレイ岩（優黒岩）、10～30

% 含む鉱物を閃緑岩（中色岩）とその占める割合により判別される。したがって、現実的には前掲註（22）に記したように、両者の判別は肉眼では成し得ないが、プロポーションの似る一石五輪塔をハンレイ岩製としている例があることに加え、色調が黒色を呈することが、優黒岩を連想させることから、ここではハンレイ岩と推測しておく。

（25）筆者は以前に「五輪塔研究の基礎的操作～加古川下流域の竜山石製中世五輪塔を対象に～」という拙劣な文章を書いた。その際、一般何気に使用されている「竜山石」という名称を用いた。しかし、竜山石は「印南石」や「宝殿石」という名称があったり、「高砂市竜山付近で切り出された石」と限定的に用いている場合、あるいは「長石」や「高室石」等の高砂周辺のものも含んで広義で用いている場合等、様々に使用されている。筆者が用いた「竜山石」

は、「長石」や「高室石」等を意識したつもりであったが、顧みれば充分とは言えないように思う。そのような自身の反省からも産地同定には慎重を期したい。「各石材が岩石学的にどのような岩石であるのかを明らかにし、客観的に岩石名を判断できるようにすることが大切である。そして曖昧なまま俗称である「〇〇石」という表現を継続するのではなく、「△△産の××岩」という表現で、その産地と岩相によつて的確に示されることが望ましく、将来的にはそれによつて再定義した上で「〇〇石」という俗称を使うべきである」(先山徹「第3章 岩石と定義」『竜山石切場－竜山採石遺跡詳細分布調査報告書』高砂市教育委員会，2005年，P10)という指摘には傾聴すべきである。

(26) 石材 (A ~ C) と銘文 (a ~ c) の分類記号を合わせて類別した。

(27) 塔の欠損部分については推定して図化



した。なお、水輪・火輪・空風輪部分に刻まれた種子については図化できておらず、その点、図面としては完全でない。

(28) このことはあくまでも傾向を窺い知るためのものであり、例外事例も存在するであろう。例えば、火輪における四隅に延びる稜線は、本稿では天文15年塔・文禄2年塔・慶長20年塔で、下降しながら先端へと繋がる塔として、寛永17年塔では上方へ延伸して繋がる塔として図化し、スムーズに推移させているが、例えば、慶長年間等には上方へ延伸するタイプも存在する。したがって、このことは傾向としての指摘に留まるものである。

(29) 田岡香逸は地輪を埋めて安定をはかるタイプの砂岩製一石五輪塔を「一種の地方色」と表現し、同時に砂岩製の塔高の低い塔については「畿内地方で通有の構造形式」と表現していることから、近江の砂岩製一石五輪塔には2種存在することを認識し、

これらが和泉砂岩製と捉えている。

(田岡香逸「一石五輪塔」『近江の石造美術』6 民俗文化研究会, 1973年, P 62・64

(30) 例えば西教寺(滋賀県大津市)、新善光寺(滋賀県栗東市)等、壬生寺の他にもこれら両石材のセット関係は確認できる。

(31) 前掲註(12) P 65

(32) 前掲註(15) P 182

(33) 朽木量は近世墓標についての考察をめぐらせる中で、和泉石の普及の要因の1つに従来の仮説を援用しながら、出稼ぎ先での和泉石工の活動や和泉出身以外の石工の関与等に注目している。本稿と朽木のそれとは問題とする時期が異なるが、参考とすべき考察であろう。

なお、本稿では「石材としての和泉砂岩の移動や石工の移動、あるいは和泉とは異なる産出地の砂岩を用いた」と可能性の列挙に留めているが、時間的には朽木の問題

とする時期より早い段階であり、この視点からは墓標の増加を促した下地は、ある程度この頃には出来上がりつつあったと考察することも可能であろう。

(34) このことについては、少林寺と同じく滋賀県守山市に所在する浄土宗寺院である称名院に見られる墓標（ハンレイ岩製）を加えて検討した。

また、第1期から第3期の区分には明確な年代は与えていないが、このことは、例えば、少林寺では文禄年間を遡る砂岩製一石五輪塔は見当たらないが、他所では確認できる可能性があることを勘案したためである。しかし、明確な年代こそ確定し得ないものの、少林寺タイプ一石五輪塔については、砂岩に先行してハンレイ岩が用いられたという解釈に変化は無いと考えている。

(35) 泉拓良「西日本縄文土器再考」『考古学論考』平凡社，1982年

(36) 例えば、竹田聴洲は「全般として近世

の寺請檀家制が石碑の造立を普及させたことは争えない」(「近世社会と仏教」『岩波講座日本歴史 9 近世 I』岩波書店 1975 年 P 274) と、朽木量は「寺請制が浸透することは仏教つまり寺や仏式葬儀と結びついて墓標の造立を促進させたことになる」(朽木量『墓標の民族学・考古学』慶應義塾大学出版会, 2004 年, P 87) と考察する。

(37) ここでいう年代的事実とはハンレイ岩製一石五輪塔に刻まれる年代が砂岩製のそれに比して古いということ、数量的事実とは、前者が 78%、後者が 10% を占めるという事実、すなわち、ハンレイ岩が主体として先行する石材であるということを指す。

(38) このことは少林寺タイプの砂岩製一石五輪塔に対する解釈であり、筆者は実見していないが、前掲書(註 12)で触れたように、いわゆる和泉産石地付近で見られる一石五輪塔にプロポーションの似る砂岩製のそれがこの地域に分布しているとすれば当

然、この事実も勘案されなければならない。

すなわち、成形品の移動も射程に入れて  
少林寺タイプを論じる必要がある。仮に  
具体例を挙げれば、和泉産出地付近に見ら  
れるタイプの成形品の流通をベースとして  
石工の出稼ぎ先での活動や石材の移動を、  
あるいは石工の出稼ぎをベースとした成形  
品の流通と石材の流通等を想像する必要が  
あろう。

(39) 藤澤典彦は「中世は基本的に地元石材  
を利用する時代」、「近世は流通石材の時代  
と位置づけられる」としている。(藤澤典  
彦「中世石工の近世的展開－南都を中心に  
－」『中世諸職』シンポジウム「中世諸職」  
実行委員会，2003年，P146)

## 第 11 章 卒塔婆造立における覚鑊思想の意義 — 『卒都婆十種秘釈』をめぐって —

### 1. はじめに

これまで、河南台地における石塔造立史について論じてきたが、ここでは五輪塔等が全国的な展開をみせる要因の 1 つについて論じたい。

小稿は、院政期に活躍した覚鑊の著とされる『卒都婆十種秘釈<sup>(1)</sup>』の意義をそのタイトルが示すままに、卒塔婆造立の歴史において位置付けようとするものである。

覚鑊（1095～1143）は、中ノ川実範（1089？～1144）と同様、真言僧の立場にあって時代の趨勢を見通し、浄土教的要素を取り入れ、融合させようとした人物で、『阿弥陀秘釈』、『五輪九字明秘密釈』、『一期大要秘密釈』など多くの著作を残した。とりわけ、晩年に高野を下山し、根来で著したとされる『五輪九字明秘密釈』を取り上げて、我が国における

五輪塔の展開に影響を与えた人物としても評価されている。

小稿で問題とする『卒都婆十種秘釈』は、『五輪九字明秘密釈』などに比して、あまり著名な作ではないが、我が国の卒塔婆造立の歴史においては、同様に大きな意義があったのではないかと指摘できるのである。

以下、このことについて考察することとする。

## 2. 卒塔婆の初期的役割

一般に、「卒塔婆」という仏教的タームは、サンスクリット語のストゥーパに相当する音写で、所謂、釈迦の遺骨を納めた仏塔を連想させようが、五来重が指摘するように、我が国で卒塔婆というのと、系譜上、仏教とは無関係な日本起源のものと仏教との融合により生じたものの両系譜が考えられるのである<sup>(2)</sup>。

ところで、後者のそれを考える上では、卒塔婆が葬送関連具として機能したことを念頭



に置けば、まずは浄土教との関連を考えない訳にはゆくまい。「古来の習俗を素地とする神祇信仰・神道において、自己の死をどう解決するかの問題意識は基本的でない。そして自己の死に目覚めさせ、その解決を与えたのが仏教、なかんずく浄土教であった」<sup>(3)</sup>という指摘のとおり、浄土教は人々に自己の死を考える契機を与えた。とりわけ、源信の『往生要集』は、貴族社会へ、また我が国の文化へ大きな影響を与え、ひいては庶民層へも阿弥陀仏信仰を展開させることとなった。ならば、ここで源信の卒塔婆に関する記述を検討する必要がある。

至于如夫骸臥露地鳥觜鑿眼。骨横煙村獸脣  
啄嚙。莫不行人流之心中一寸之凍忽碎。遊  
客之目下。兩行之泉乍流。魂縱雖籠花藏之  
月。身猶徒蒿里之塵。仍兼占勝地建一變都  
婆。名稱安養廟 『横川首楞嚴院二十五三  
昧起請』<sup>(4)</sup>

この一節からは、極樂の蓮華藏世界の月に宿る「魂」に比して、「身体」は墓地の塵になってしまうとの解釈が認められる。であるならば、厳密に言えば、極樂往生の思想、浄土の思想は「魂」をその対象として発想せられているものであると考えられよう。ところが、源信は「魂」だけでなく塵になるであろう「身体」をも救うべく勝地に卒塔婆を建て、墓所としようと思考するのである。すなわち、分離する運命にある両者を「魂」は思想的に、「身体」は卒塔婆を建てて墓所を営んで救おうというのである。ここでは卒塔婆は安養廟と名付ける墓所の目印ということであろうか。

また、同時代の知識人、慶滋保胤の『起請八箇條』にも同様に卒塔婆を建てることを記述している。

我儻須占墳墓於西山之脚。不煩葬歛此郊之邊。先就陰陽之家令致鎮謝之法。其處建一基壇都婆。其內置多種陀羅尼。結衆下者不

擇日時之吉凶。不避方隅之忌。三日之内。  
必葬於此矣。縱告浮生於他鄉。遂送遺骸於  
此地。願一衆埋骨之契轉爲一國受生之之緣  
『起請八箇條』<sup>(5)</sup>

ここでもやはり、卒塔婆は地中に埋められ  
る様々な陀羅尼や遺骨の目印としての役割が  
大きいようである。

さらに、ここで、源信の師にあたる良源の  
遺告に注目したい。

石卒塔婆生前欲作運、若未運之前 命終者、  
且立假卒塔婆 其下掘穴深三四尺許、置骨  
於穴底、上可滿土卅九日内、作石卒塔婆可  
立替之、是爲遺弟等時、來禮之標示也

『天台座主良源遺告』<sup>(6)</sup>

ここでは、生前から石卒塔婆を造っておき  
たいが、間に合わなければ仮卒塔婆を造り、  
49日のうちに石卒塔婆に建て替えるよう記

している。そして注目すべきは「是爲遺弟等時、來禮之標示也」とその役割を示しているのである。すなわち、目印としての石造卒塔婆を想定しているのである。

以上、院政期において庶民層へ阿弥陀仏信仰が浸透、展開する前夜、卒塔婆は目印として捉えられ、目印という観点からは当然その恒久性が求められるが故に、石造が最善であると考えられていたことが認められるのである。

### 3. 従来の信仰の中の卒塔婆

では、このような目印としての卒塔婆は特に問題はなく、円滑、広範に浸透し、展開したのであろうか。どうやら、そこには古来からの習俗を素地とする従来の信仰である神祇信仰との兼ね合いが問題の1つとして存在したようである。

『高野春秋編年輯』における天仁元年二月十五日条の「被奉埋堀河院御髮於祖廟前。今

現御所芝埋御髪之墓所。其御石塔有之」<sup>(7)</sup>という堀河院の高野山御遺髪埋納譚に着目しよう。ここでは、天仁元年（1108）に堀河院の御遺髪を御廟前に埋納したが、その際、上位に石塔を建てたことが記されているが、注目すべきは、『中右記』の天仁元年正月十三日条に「但不可及披露、世人自難者出来歟」<sup>(8)</sup>とあるように、この出来事が清浄地を穢す行為として、世間に非難されることを危惧しているのである。すなわち、この時点においては、高野山という霊山に納髪（おそらく納骨も同様であろう）するという行為は、清浄な地を穢す行為として取り扱われたのである。

ここで、『熊野草創由来雑集抄』における「忌詞之事」の項に着目したい。ここでは「コノバヲモカヘ精進潔斎ヲモアラタムル」<sup>(9)</sup>として、聖地熊野における約20の忌詞を4グループに分かって記しているが、「死」を「為金（カコニナル）」、「葬」を「於久流（オクル）」、「卒塔婆」を「角木（ツノキ）」、「墓」を「古計牟

志（コケムシ）」と称したとの記述がある。このグループは「死」に関する語句を忌詞としたことが瞭然であり、ここに記される卒塔婆も死を連想させるが故にその対象と考えられたことが読み取れる。先にみた、堀河院の御遺髪埋納譚は、石塔である点で卒塔婆とはかけ離れるが、この『熊野草創由来雑集抄』の用例と合わせて検討すれば、行為としての納髪もさることながら、納髪地点を示す石塔も同様に忌の対象としてネガティブに思考されたと考えられよう。

また、『梁塵秘抄』には「根本中堂へ参る道  
加茂川は川広し 観音院の下り松 熟らぬ柿  
の木人宿 禅師坂 滑石水飲四郎坂 雲母谷  
大獄蛇の池 阿古也の聖が立てたりし千本の  
卒塔婆」<sup>(10)</sup>という比叡山への道案内の歌謡が  
記されている。叡山への参詣は往時の人々にと  
って親しまれたのであろうか、参詣順路にお  
ける、所謂、見どころをスポットで紹介して  
いる。ここに見出される柿の木や蛇の池に

は伝説が秘められているという。そのことを勘案すれば最後に記される千本の卒塔婆は、おどろおどろしいが少し見てみたい光景として記されているように思えるが、ここにもやはり、忌の対象としての一側面が看取されるのではなかろうか。

鎌倉時代の高野山奥の院の風景を描いたとされる金剛三昧院旧蔵山水屏風には、奥の院一帯の道端に長足卒塔婆がぎっしりと立ち並んでいる様子が描かれている。この情景を日野西真定が「奥の院全域が、死の不浄を受け入れている」<sup>(11)</sup>と解釈するとおり、卒塔婆が一般に連想させるものは、死や不浄であったのだろう。「天慶以往。道場聚落修念仏三昧希有也。何況小人愚女多忌之」<sup>(12)</sup>という『日本往生極樂記』の沙門空也条の記述に認められる「念仏を忌む」という感覚と同様、死を連想させる卒塔婆は忌の対象として扱われたのではなかろうか。

以上、目印としての卒塔婆は忌の対象とし



ての一側面を持していたことを指摘しておきたい。

#### 4. 覚鑠の卒塔婆思想

上記したように、卒塔婆は浸透の初期段階においては、遺体・遺骨などの埋葬地点の目印となるが故に忌の対象としての一側面を持っていたと考えられる。とりわけ、高野・熊野などの聖地においては、その思考は顕著であったのだろう。このような思考に変化を与える思想を提供したのは覚鑠であったと考えられる。

覚鑠は永久2年(1114)に初めて高野山へ上がり、保延6年(1140)に高野山を下りるまで、約30年にわたり、実際に高野の様子を見ていた訳であるが、当然、石塔や卒塔婆がその数を徐々に増加させていく状況も目の当たりにしてきたと考えられる。

また、覚鑠は阿波上人青蓮や隠岐上人明寂らの念仏聖との交流があり、背後には多く別

所聖の存在があったと指摘されている。

このような自身の境遇から察すれば、すなわち、社会の要請として卒塔婆が次第に増えつつある様や葬送儀礼への関与が想像できる聖達が身近にいたという境遇からは、卒塔婆に対する意識が顕著であったと考えるも不自然ではなからうし、このような境遇が、『卒都婆十種秘积』や『日卒都婆式』などの著作へ繋がったと考えられる。

ここで『卒都婆十種秘积』の内容を少し見ていこ<sup>(13)</sup>う。

𑖀

内縛

𑖀𑖀

本有佛性本覺月輪中、十界依正無盡莊嚴、恆沙萬德攝在解。

外縛

𑖀𑖀

頓開發心内萬德、顯得本覺口佛性。

外五古

𑖀𑖀

流出五億俱胝微細法身、遍滿五趣四生中、濟

度有情無暫息時。

卒都婆



觀由結誦此印言五、入法界塔婆中、十佛刹微塵數諸佛菩薩雜住。

德



者、一切諸法不二之道、語言斷義。



又入普遍生、安住般若波羅蜜門、悟一切法無罣礙義。

又如來世尊爲諸衆生、雨最上乘大法雨義利也。所謂一切契經、及世間咒術經書是也。初二自利、後一利他也。如來說法、必爲此二行難教、過八萬行越刹塵。原始要終不過二行。四種法寶、四種法身、亦在此一字中。

經云、上勤是精進不間、不勤是常修不間。

五輪形

胎五智

金五智

空 風 火 水 地

團 半 月 三 角 圓 方  
頂 上 白 毫 本 心 臍 上 下 體  
等 空 不 因 業 不 清 淨 無 自 性 離 諸 法 本  
可 得 可 得 垢 染 言 說 不 生  
體 性 智 成 所 作 智 平 等 性 智 妙 觀 察 智  
大 圓 鏡 智  
解 脫 知 見 解 脫 慧 定 戒  
成 辦 一 切 事 攝 召 降 伏 增 益 息 災 不  
礙 萬 法  
增 長 萬 行 成 就 萬 行 潤 萬 德 生 長 萬 行  
無 所 不 至 印 風 輪 印 火 輪 印 八 葉 印 五  
鉤 印  
大 日 不 空 成 就 寶 生 彌 陀 阿 閼  
虛 空 部 羯 磨 部 寶 部 蓮 華 部 金 剛 部  
空 世 界 成 時 空 中 起 風 風 上 起 火 火 上 起  
水 水 上 起 地  
空 風 輪 壞 火 輪 壞 水 輪 壞 地 輪 壞 世  
界 壞 時  
脾 臟 腎 臟 心 臟 肺 臟 肝 臟  
隨 緣 示 現 無 相 功 德 攝 無 量 無 礙 自 在 法 門 攝

通達法界大智法門攝 周遍法界大悲法門攝

寂滅無爲金剛功德攝

欠字門 含字門 覽字門 鑠字門 阿字門

法身如來 無邊功德 於此五輪 無不攝盡

云々

五字即是五大也。五臟神是則五部五智如來也。此塔形顯衆生身中、本有理性、大日如來也。云々

大日經三卷疏十二・十三卷。云々

降伏四魔、解脫六趣、滿足一切智智、眞言。

**𑖀** 金色光明身摧無、智城不動堅固名金剛。句在腰下。

**𑖁** 臍中成九重月輪、流注乳水、除一切熱惱、即八大熱地獄滅。云々

**𑖂** 住臆中所有罪業消滅、八寒地獄苦而息滅、以成就衆事。

**𑖃** 住額上、自他苦滅、因業果諸種子增長。不捨於此身逮得神境通。

**𑖄** 住頂上、遊步大空位、而成身秘密。

如是修行 諸佛常當 現其人前 如影隨

身 而 滿 其 願 同 於 影 像 於 一 切 處 隨 順  
一 切 衆 生 示 現 隨 類 色 身

我 即 𑖀 𑖄 𑖆 𑖇 𑖈 如 次 腰 腹 心 額 頂 腰  
下 𑖀 字 本 不 生 金 色 方 形 佛 心 地 臍 輪 𑖄 字 離  
言 說 白 色 圓 形 大 悲 水 心 上 𑖆 字 無 染 著 赤  
色 三 角 大 智 火 額 上 𑖇 字 離 因 業 黑 色 半 月 大  
力 風 頂 上 𑖈 字 等 虛 空 雜 色 圓 形 大 空 輪  
重 々 相 累 無 隔 別 如 々 一 體 不 雜 亂 高 下 大 小  
本 不 二 彼 此 橫 豎 輪 圓 足 我 即 𑖀 字 本 不 生  
金 色 方 形 佛 心 地 我 即 𑖄 字 離 言 說 白 色 圓 形  
大 悲 水 我 即 𑖆 字 無 染 赤 色 三 角 大 智 火 我  
即 𑖇 字 離 因 業 黑 色 半 月 大 力 風 我 即 𑖈 字 等  
虛 空 雜 色 圓 形 大 空 輪

今 此 卒 都 婆 者 云 一 大 法 身 三 昧 耶 形、法 爾 本  
有 曼 荼 羅 之 身 也。爰 以 諸 佛 諸 聖 攝 在 其 中、人  
界 器 界 出 生 於 此。故 云、法 性 制 底、亦 號 大 功  
德 聚。因 茲 破 壞 結 無 間 業、造 立 福 報、成 菩 提  
因。如 此 功 力、不 可 稱 計。今 出 十 義、略 讚 萬  
德。

一 五部義者

萬法能生故 地輪即寶部 自性清淨故 水  
輪蓮華部 一切摧破故 火輪金剛部 周遍  
力用故 風輪羯磨部 最上第一故 空輪即  
佛部

二 五智義者

地輪法界智 諸佛總體故 水輪圓鏡智 萬  
像影現故 火輪觀察智 照曜癡闇故 風輪  
成所智 動作業力故 空輪平等智 法界一  
味故

三 四曼義者

𑖀𑖩𑖫𑖬𑖭

是法曼荼羅 方・圓・三角  
形三昧耶曼荼 青・黃・赤・白・黑 即大  
曼荼羅 滅罪生善用 羯磨曼荼羅

四 四德義者

五輪常住德 不生不滅故 是常波羅蜜 造  
立供養德 拔苦與樂故 是樂波羅蜜 法界



塔婆德 衆聖中尊故 即我波羅蜜 禮拜讚


歎德 遠塵離苦故 即淨波羅蜜

#### 五 字相義者

一切諸法 本初不生  字 本不生故 言語

道斷  字 言語斷故 染淨一如  字 染淨

如故 無有因緣  字 因緣無故 如虛空相

 字 由此字義 成立五輪

如是五字、若誦一遍、如轉讀一切經一百萬遍、所獲功德不可思議、成就法身秘密悉地、五智髻珠、五佛肝心、衆生父母、法界庫藏。

#### 六 金蓮義者

空輪金剛界 虛空曼荼羅 水輪  字 是一印會大日 地輪胎藏界 地輪曼荼羅 火輪三角是 遍知院尊形 風輪通兩界 教令忿怒王 半月降三世  字 不動尊

#### 七 佛界義者

微塵數佛國 地大增長力 恆河沙海會 水

大流演力 已・今・當佛日 火大照曜力 不  
思議佛德 風大住持力 曼荼羅周遍 空大  
高顯力






#### 八 人界義者

腰臑膝脚結跏坐 方形黃色地大種 臍腹圓  
形如滿月 淨潔白色水大種 兩肩肢腕絞心  
上三角赤色火大種 頤左右耳及髮際 半  
月黑色風大種 頂上烏瑟圓滿形 一切雜色  
空大種 此五大中有識大 其識大意五大種  
地大亡故色相變 水大散故淚血乾 火大滅  
故全身冷 風大捨故動搖絕 空大捨故形體  
虛 如是等特名爲死

#### 九 器界義者

野道山岳爲地大 流泉江河爲水大 日月光  
耀爲火大 諸有吹動爲風大 圓蓋大虛爲空  
大

#### 十 總通義者

森羅萬法、不離五大。極樂金繩、界道娑婆、  
曠野山谷  字地大。何處間隔。八功德池、大  
江蓮水、器界大海江河、衆正淚唾膿血。  字  
水大、流演皆同。佛天光明、人魔燈火、龍畜  
□□、燒熱地獄猛炎  字火大熾燃唯一。寶樹  
吹動、苦器猛風、說法梵音、誹謗言語、乃至  
出入氣息、皆是  字風大。善趣惡趣之虛空、  
淨穢難別。  字周遍之空大、彼此無差。實以  
一切形體、何物出五輪之外。無量色相皆悉收  
塔婆之中。是故身心所緣者、是毘盧遮那之實  
德。三業四像之觸境、直成三密四印之業行。  
輪迴生處、又無盡莊嚴之宮殿、六趣四生之苦  
器。併歸六大四曼之理趣者哉。

今雖其要略略有十種。

一、成造立供養大日、及十方諸尊。謂五輪者、  
即五部諸尊形故。

二、成建立供養密嚴華藏、並十方諸尊。如是

等淨土皆悉攝在此遍法界卒塔婆中故。

三、成建立供養十方諸仏法身舍利塔。謂此卒都婆法界塔婆故。

四、成建立供養諸佛菩薩精舍堂殿、十方伽藍堂舍。皆在此法界宮殿內故。

五、成普遍流布十方三世、顯密大小、一切佛法、無量佛法、過恆沙聖教。盡攝在五輪中故。謂五輪者、**唵 阿 彌 陀 佛**。若誦此明一遍、則成轉讀一切經一百萬遍故。

六、成普遍利益一切衆生廣大修習六度萬行、二利業因。三密修行悉皆攝入此一法故。

七、四魔退散、衆惡消滅、五大明王、二十天等、各率眷屬、常恆衛護故。

八、無量功德、自然圓滿。謂塔婆者、翻功德

衆故。言功德者、謂福德知恵、三昧総持等、  
無辺萬行故。

九、十方淨土、隨願往生。此卒都婆即是彼諸  
仏土故。並亦能引導故。

十、頓斷三妄、速證五佛。五輪即五智。五智  
能斷無明故。若造立供養此卒都婆者、速疾成  
就如是十種功德。勝利決定無疑。是知小因大  
果之要門、功縮益廣之秘術、只有此一行者歟。

作

バン

縛 マバ

本有佛性本覺月輪中、十界依正無盡莊嚴、恆  
沙萬德攝在す。

外縛 マバ

頓開發心内萬德、顯得本覺□佛性。

外五古 マバ

五億俱胝微細法身を流出して、五趣四生の中に遍満し、有情を濟度して、しばらくも息む時なし。

卒都婆

觀、此の印言五□を結誦するにより、入法界塔婆中、十佛刹微塵數諸佛菩薩雜住す。

バン徳

アバンとは、一切諸法不二の道は、語言斷の義。

又普遍生に入り、般若波羅蜜門に安住して、一切法無罣礙義を悟る。

又如來世尊諸衆生の爲に最上乘大法雨の義利を雨らすなり。いわゆる一切契經及び世間の咒術經書これなり。初めの二は自利、後の一は利他なり。如來の説法は必ずこの二行の難教の爲に、八萬行を過ぎ刹塵を越ゆ。始めをたずね終りをもとむるに二行に過ぎず。四種の法寶、四種の法身、またこの一字中に在り。

經にいわく、上勤是精進不間、不勤是常修

不 間 。

五 輪 形

胎 五 智

金 五 智

空 風 火 水 地

團 半 月 三 角 圓 方

頂 上 白 毫 本 心 臍 上 下 體

等 空 不 因 業 不 清 淨 無 自 性 離 諸 法 本

可 得 可 得 垢 染 言 說 不 生

體 性 智 成 所 作 智 平 等 性 智 妙 觀 察 智

大 圓 鏡 智

解 脫 知 見 解 脫 慧 定 戒

成 辨 一 切 事 攝 召 降 伏 增 益 息 災 不

礙 萬 法

增 長 萬 行 成 就 萬 行 潤 萬 德 生 長 萬 行

無 所 不 至 印 風 輪 印 火 輪 印 八 葉 印 五

鉤 印

大 日 不 空 成 就 寶 生 彌 陀 阿 閼

虛 空 部 羯 磨 部 寶 部 蓮 華 部 金 剛 部

空 世 界 成 る 時 空 中 に 風 を 起 こ し 風 の 上 に 火



を 起 こ し      火 の 上 に 水 を 起 こ す      水 の 上 に  
地 を 起 こ す

空      風 輪 壊      火 輪 壊      水 輪 壊      地 輪 壊      世  
界 壊 時

脾 臓      腎 臓      心 臓      肺 臓      肝 臓

随 縁 示 現 無 相 功 徳 攝      無 量 無 礙 自 在 法 門 攝  
通 達 法 界 大 智 法 門 攝      周 遍 法 界 大 悲 法 門 攝  
寂 滅 無 爲 金 剛 功 徳 攝

欠 字 門      含 字 門      覧 字 門      鑊 字 門      阿 字 門  
法 身 如 來      無 邊 功 徳      此 の 五 輪 に 於 い て 攝  
盡 せ ざ る こ と 無 し 。 云 々

五 字 す な わ ち こ れ 五 大 な り 。 五 臓 神 こ れ す  
な わ ち 五 部 五 智 如 來 な り 。 こ の 塔 形 衆 生 身 中 、  
本 有 理 性 、 大 日 如 來 を 顯 す な り 。 云 々 。

大 日 經 三 卷 、 疏 十 二 ・ 十 三 卷 。 云 々 。

四 魔 を 降 伏 し て 、 六 趣 を 解 脱 し 、 一 切 智 々  
を 満 足 す 、 眞 言 。

ア      金 色 の 光 明 身 く だ け て な し 、 智 城 動  
か ず 堅 固 な る を 金 剛 と な づ く 。 句 腰  
下 に 在 り 。

ビ 臍の中に九重の月輪を成じ、乳水を  
流注して、一切の熱惱を除けば、す  
なわち八大熱の地獄滅す。云々。

ラ 臆中に住せば所有の罪業消滅し、八  
寒地獄の苦而も息滅し、以つて衆事  
を成就す。

ウン 額上に住せば、自他の苦滅して、  
因業果の諸の種子増長す。この身  
を捨てずして神境通を逮得す。

ケン 頂上に住せば、大空位に遊歩して  
身秘密を成ず。

是のごとく修行せば 諸佛常にまさに 其  
の人の前に現じ 影のごとくに身に随い 其  
の願を満ずべし 影像に同じく 一切處に於  
いて 一切衆生に随順し 随類の色身を示現  
す。

我はすなわちアビラウンケンなり 次いで  
のごとく腰と腹と心と額と頂となり 腰下の  
ア字は本不生なり 金色の方形は佛心の地  
臍輪のビ字は言説を離れ 白色の圓形は大悲

の水 心上のラ字は染著無し 赤色の三角は  
大智の火 額上のウン字は因業を離れ 黒色  
の半月は大力の風 頂上のケン字は虚空に等  
し 雑色の圓形は大空の輪 重々の相累は隔  
別無し 如々の一體は雜亂せず 高下大小は  
本と二ならず 彼此横豎は輪圓の足 我はす  
なわちア字本不生なり 金色の方形は佛心の  
地 我はすなわちビ字言説を離る 白色の圓  
形は大悲の水 我はすなわちラ字染著無し  
赤色の三角は大智の火 我はすなわちウン字  
因業を離る 黒色の半月は大力の風 我はす  
なわちケン字虚空に等し 雑色の圓形は大空  
の輪なり

今此の卒都婆はいわく、一大法身三昧耶形、  
法爾本有曼荼羅の身なり。爰を以て諸佛諸聖  
其の中に攝在し、人界器界こゝに出生す。ゆ  
えにいう、法性制底、また大功德聚と號す。  
茲に因つて結無間業を破壊し、福報を造立し、  
菩提の因を成ず。此のごとくの功力は、稱計

す可らず。今十義を出して、略して萬徳を讃せん。

#### 一 五部の義

萬法能く生ずるがゆえに 地輪すなわち寶部なり 自性清淨のゆえに 水輪は蓮華部なり 一切を摧破するがゆえに 火輪は金剛部なり 周遍力用のゆえに 風輪は羯磨部なり 最上第一のゆえに 空輪はすなわち佛部なり

#### 二 五智の義

地輪は法界智なり 諸佛の總體なるがゆえに 水輪は圓鏡智なり 萬像の影現なるがゆえに 火輪は觀察智なり 癡闇を照曜するがゆえに 風輪は成所智なり 業力を動作するがゆえに 空輪は平等智なり 法界一味なるがゆえに

#### 三 四曼の義

アバラカキヤは これ法曼荼羅なり 方・

圓・三角形は 三昧耶曼荼羅なり 青・黄・  
赤・白・黒は すなわち大曼荼羅なり 滅  
罪生善の用は 羯磨曼荼羅なり

#### 四 四徳の義

五輪の常住徳は 不生不滅なるがゆえに  
これ常波羅蜜なり 造立供養の徳は 拔苦  
與樂のゆえに これ樂波羅蜜なり 法界塔  
婆の徳は 衆聖の中尊なるがゆえに すな  
わち我波羅蜜なり 禮拜讃歎の徳は 遠塵  
離苦のゆえに すなわち淨波羅蜜なり

#### 五 字相の義

一切諸法は 本初不生なり ア字 本不生の  
ゆえに 言語道斷すバ字 言語斷ずるがゆ  
えに 染淨一如なり ラ字 染淨ゆえとのご  
とく 因縁有ることなしカ字 因縁無きが  
ゆえに 虚空相のごとしキャ字 此の字義  
に由つて五輪を成立す  
かくのごとく五字、若し一遍を誦せば、

一切經一百萬遍を轉讀するがごとく、獲る所の功德は不可思議にして、法身秘密悉地、五智の髻珠、五佛の肝心、衆生の父母、法界の庫藏を成就す。

#### 六 金蓮の義

空輪は金剛界 虚空曼荼羅なり 水輪のバン字これ 一印會の大日なり 地輪は胎藏界 地輪曼荼羅なり 火輪の三角これ 遍知院の尊形なり 風輪は兩界に通ず 教令は忿怒の王 半月は降三世 カン字は不動尊なり

#### 七 佛界の義

微塵數の佛國は 地大増長の力なり 恆河沙の海會は 水大流演の力なり 已・今・當の佛日は 火大照曜の力なり 不思議の佛徳は 風大住持の力なり 曼荼羅の周遍は 空大高顯の力なり

## 八 人界の義

腰臑膝脚結跏の坐 方形の黄色は地大の種  
臍腹圓形は滿月のごとし 淨潔の白色は水  
大の種 兩肩の肢腕心上に絞り 三角の赤  
色は火大の種 頤左右の耳及び髪の際 半  
月の黑色は風大の種 頂上の烏瑟は圓滿の  
形 一切の雜色は空大の種 此の五大中に  
識大有り 其の識大は意の五大種 地大亡  
きがゆえに色相變ず 水大散ずるがゆえに  
涙血乾く 火大滅するがゆえに全身冷かな  
り 風大捨するがゆえに動揺絶つ 空大捨  
するがゆえに形體虚し かくのごとき等特  
に名づけて死と爲す。

## 九 器界の義

野道山岳を地大と爲す 流泉江河を水大と  
爲す 日月の光耀を火大と爲す 諸有の吹  
動を風大と爲す 圓蓋の大虚を空大と爲す

## 十 總通の義



森羅の萬法は、五大を離れず。極樂の金繩、  
界道の娑婆、曠野山谷はア字の地大なり。何  
れの處にか間隔せん。八功德の池、大江の蓮  
水、器界の大海江河、衆正の涙唾膿血。バン  
字の水大なり、流演して皆同じ。佛天の光明  
に、人魔の燈火、龍畜□□、燒熱地獄の猛炎  
はラ字の火大にして熾燃唯一なり。寶樹の吹  
動、苦器の猛風、説法の梵音、誹謗の言語、  
乃至出入の氣息、皆これカン字の風大なり。  
善趣惡趣の虚空、淨穢別ち難し。ケン字周遍  
の空大は、彼此差うこと無し。實に以て一切  
の形體、何に物か五輪の外に出ん。無量の色  
相は皆ことごとく塔婆の中に収まる。このゆ  
えに身心の所縁は、これ毘盧遮那の實徳なり。  
三業四像の觸境は、直に三密四印の業行を成  
ず。輪廻の生處は、又無盡莊嚴の宮殿にして、  
六趣四生の苦器なり。併せて六大四曼の理趣  
に歸せんかな。

今其の要略すといえども略して十種有り。

一、大日、及び十方の諸尊を造立供養を成ず。  
謂く五輪は、すなわち五部の諸尊形なるがゆえに。

二、密嚴華藏、並びに十方の諸尊を建立供養を成ず。かくのごとき浄土は皆ことごとく此の遍法界卒塔婆の中に攝在するがゆえに。

三、十方の諸仏法身舍利塔を建立供養を成す。  
謂く此の卒塔婆は法界塔婆のゆえに。

四、諸佛菩薩の精舎堂殿、十方の伽藍堂舎を建立供養を成ず。皆此の法界宮殿内に在るがゆえに。

五、十方三世、顯密大小、一切佛法、無量佛法、過恆沙の聖教、普遍流布を成ず。盡く五輪の中に攝在するがゆえに。謂く五輪とはアバラカキャなり。若し此の明一遍を誦せば、すなわち一切經一百万遍を転読することを成

ずるがゆえに。

六、普遍に一切衆生を利益し、廣大に六度萬行、二利の業因を修習するを成ず。三密の修行はことごとく皆、此の一法に攝入するがゆえに。

七、四魔退散、衆惡消滅、五大明王、二十天等、各眷属を率い、常恆衛護するがゆえに。

八、無量の功德、自然に圓滿す。謂く塔婆とは、功德衆と翻ずるがゆえに。功德と云うは、謂く福德知恵、三昧総持等、無辺の萬行なるがゆえに。

九、十方の淨土に、随願往生す。此の卒塔婆はすなわちこれ彼の諸仏の土なるがゆえに。並びに亦能引導なるがゆえに。

十、頓に三妄を斷じ、速に五佛を證す。五輪

すなわち五智なり。五智能く無明を斷ずるがゆえに。もし此の卒塔婆を造立供養せば、速疾にかくのごとく十種の功德を成就す。勝利決定して疑い無し。これに知る小因大果の要門と、功縮盆廣の秘術とは、只だ此の一行に有るか。

まず、冒頭で卒塔婆を造立した際の開眼作法について記述、中盤では「五部の義」や「五智の義」をはじめとして、五輪への配当を示していく。そして、終盤で十種の功德について列記する。

以上を大きく纏めるならば、五輪卒塔婆を造立供養すれば、ありとあらゆる功德を修めることができるというのである。例えば、「諸佛菩薩の精舎堂殿、十方の伽藍堂舎を建立供養を成ず」などは、仏菩薩が説法を行う建物までも供養したことになると説き、また、「四魔退散、衆惡消滅」などの功德も修めるという。まさに「無量の功德、自然に圓

満す」という説明のとおりである。

ここで注目したいのは、卒塔婆を供養するのは自分自身が功德を修めるためであるという点である。卒塔婆と言えは感覺的に死者供養に意味のあるものという感じを受けるが、ここでは決して他者の死を供養するという感覚が顕著に読み取れる訳ではない。自身が功德を修めるために行うものなのである。このことは、『卒都婆十種秘釈』を「もし此の卒塔婆を造立供養せば、速疾にかくのごとく十種の功德を成就す。勝利決定して疑い無し。これに知る小因大果の要門と、功縮盆廣の秘術とは、只だ此の一行に有るか」と締め括ることからも明らかであろう。そして、ここには埋葬地点の目印という思想も忌むという感覚も顕著に看取されないことには注目すべきである。

しかしながら、『沙石集』の「三密修行ノ靈地トシテ、世コゾリテ帰スル故ニ、有縁ノ亡魂ノ遺骨ヲ、彼山ニ納ル事、貴賤ヲイハズ、

花夷ヲ論セズ、年ニ随テ盛ナリ」<sup>(14)</sup>という記述からも明らかなように、平安時代末以来、中世にかけ勢いを強めていく納骨信仰とともに、高野山には卒塔婆や石塔が増加していった訳であり、その開始期に生きた覚鑊は、それらを頻繁に見かける環境にあったと考えられ、卒塔婆が一般に埋葬地点の目印などに使用されている状況も理解していたであろう。また、文治3年（1187）以後まもなく成立したとされる『高野山往生伝』の沙門蓮待譚には、承徳2年（1098）、死期を悟った沙門は、死の穢れを意識して「已離霊地」と高野山を下りて「風息已絶」と記されている<sup>(15)</sup>が、覚鑊はこのような聖地における死の穢れの問題も認識していたと考えられる<sup>(16)</sup>。

このような卒塔婆に対する認識を持して、五輪という特定の思想を付加した卒塔婆観を打ち立てたということになるのであるが、ここには現状の卒塔婆への在り方に対して密教ではこのように考えることができるという宗

教者としての覚鑊の姿勢を看取できるのではな  
なからうか。また、覚鑊は『卒都婆十種秘積』  
と同様の十種の功德が説かれている『日卒都  
婆式』という講式を作成しているが、この講  
式には「刻毎日一基之制底（卒塔婆）<sup>(17)</sup>」と記  
している。毎日1基の卒塔婆を造立し、供養  
することを促すこの記述からは、題目や念仏  
同様、日常の作法としての卒塔婆の造立供養  
を促していることが認められる。ここには先  
に例を挙げた『日本往生極樂記』の沙門空也  
条にみた念仏に類する様が見受けられるので  
ある。つまり、当初、念仏は忌まれたが多く  
の宗教者の活動・活躍により、浸透・展開が  
なされたように、そのような対象であった卒  
塔婆を浸透・展開させたきっかけの1つを覚  
鑊は提供したのではなからうか。ここに卒塔  
婆造立の歴史における1つの変革点があると  
評価できよう。



## 5 . ま と め

以上、卒塔婆が浸透の初期段階においては、遺体・遺骨などの埋葬地点の目印となるが故に忌の対象としての一側面を持していたと考えられるとし、そのような状況を踏まえたうえで、自身が遍く功德を修めるために造立、供養するという五輪卒塔婆の思想を覺鑊が打ち立てたのではないかと考えた。

そして、その思想誕生の背景には、次第に増加していく卒塔婆、卒塔婆から連想されるネガティブな一面に困る社会状況などが想像できるのではなかろうか。つまり、覺鑊は、臨終来迎信仰の隆盛という社会状況を踏まえて、浄土教を真言教学の中に位置付けたものと評価できる『五輪九字明秘密釈』と同様に、『卒都婆十種秘釈』は社会状況を踏まえて、卒塔婆を真言教学の中に位置付けるべくそれを著したと評価できるのではなかろうか。

『卒都婆十種秘釈』は主著である『五輪九字明秘密釈』の影に隠れ、五輪塔の浸透、展

開に 関係のある資料としてあまり評価されてこなかったが、その持する内容からは、『五輪九字明秘密釈』と同様、もしくはそれ以上に、我が国の五輪塔の浸透、展開に影響を与えた著作として評価することが可能なのではなからうか。

覚鑠没後、文永2年（1265）に、高野山の町石造立は始まったが、87町のそれには「一見卒塔婆、永離三悪道、何況造立者、必生安楽国」と「大日経」の一節が刻まれている。覚鑠の思想こそ刻まれてはいないものの<sup>(18)</sup>、ここには『卒塔婆十種秘密釈』に通ずる思想が看取されよう。すなわち、卒塔婆そのものを信仰対象と積極的に捉える密教的立場が看取されるのである。

覚鑠以降、卒塔婆を信仰対象とする思想は、高野において顕著に現われてきたと評価することができよう。そして、中世、多少の思想的変化はあろうが、これを礎として、高野聖は五輪塔や一石五輪塔を勧進活動の中で、浸

透・展開を促進させたのではなかろうか<sup>(19)</sup>。どのような謳い文句で勧進活動を行ったのかは明確ではないが、単に目印という役割のみではなく、思想が付加されていたが故に、多数広範に展開したであろうと考えることに別段異論はなかろう。

【 註 】

( 1 ) 本稿では『卒都婆十種秘釈』が『興教大師全集』に収められていることから、覚鑠の著作として考えて考察しているが、本来は覚鑠の著作であるかどうかの史料批判を行うべきところであろう。この点で本稿の不十分さは否めず、課題としたい。

また、『卒都婆十種秘釈』では「卒都婆」と表記されているが、本文中では「卒塔婆」と表記した。

( 2 ) 五来重『葬と供養』東方出版，1982年，

P 537 ~ 540

( 3 ) 池見澄隆 「日本人の死生観と浄土教」  
『増補改定版 中世の精神世界』人文書院  
1997年, P 201

( 4 ) 『大日本佛教全書』49巻「横川首楞嚴  
院二十五三昧起請」 P 28

( 5 ) 前掲註 ( 4 ) 「起請八箇條」 P 29

( 6 ) 『平安遺文』第2巻「天台座主良源遺  
告」 P 447

( 7 ) 『大日本佛教全書』131巻 高野春秋編  
年輯 P 86

( 8 ) 『増補 史料大成』第11巻 中右記 3  
P 313

( 9 ) 『熊野草創由来雑集抄』は近世の資料で  
あるが、山本ひろ子は禁忌習俗の性格等か  
ら概ね中世の熊野詣で用いられた語句と断  
定して良いと解釈する。本稿でも山本の解  
釈に依拠し、中世には既に使用されていた  
と考える。

( 10 ) 『梁塵秘抄』『日本古典文学全集』25,

小学館，1976年，P280

- (11) 日野西真定「高野山の納骨信仰—高野山信仰史における一課題—」『高野山発掘調査報告書』奥之院 宝性院 東塔 大門 財団法人元興寺文化財研究所，1982年
- (12) 『日本往生極楽記』『日本思想大系』7，岩波書店，1974年，P29
- (13) 正確な成立年代は明らかではない。
- (14) 『沙石集』日本古典文学大系85，岩波書店，1966年，P121
- (15) 『高野山往生伝』『日本思想大系』7，岩波書店，1974年，P697～698
- (16) 成立したとされる文治年間以前に覚鑿は没しているが、高野山における承德年間の出来事等を覚鑿が知っていたと考えたい。なお、覚鑿が高野山を下山した理由をここに求めている訳ではない。
- (17) 『日卒都婆式』『興教大師全集』，1909年
- (18) もちろん、真言密教の立場にある覚

鑊は、卒塔婆を思考する際、「大日経」の  
「一見卒塔婆、永離三惡道、何況造立者、  
必生安樂国」という一節が根本にあったと  
考えられる。

(19) 我が国における五輪塔や一石五輪塔  
の浸透・展開が高野聖だけの力で成された  
ものではないであろうが、大きな役割を担  
ったことは想像に難くない。しかし、この  
ことは現状ではさほど明確に言えないので  
はないかと筆者は考える。今後、そのこと  
を証するような調査・研究の促進が期待さ  
れるところであり、また、自身でも取り組  
んでみたい課題である。

## 第 12 章 おわりに

以上のように、大阪府南東部に位置する河南台地上における石塔造立史について論じた。本論では残存状況が良好ではないが故に研究の俎上に上がることのなかった凝灰岩製層塔にスポットを照射した。これらは層塔の持つ数値データなどが十分ではなく、考古学的考察に欠け、推論的思考の強い論調となっていることは否めず、多くの課題を残すこととなったが、少しでも当該地域におけるこれらの石塔の議論が活発になることを期待したい。

また、このように地域ごとに石塔造立史を構築し、それらを比較研究することにより、石塔という範囲にとどまらず、地域史の解明など、幅の広い議論につながることも合わせて期待したい。

石塔は全国的に散見できる造形物である。すなわち、石塔造立史の構築は全国的に広く実現できる可能性を秘めている。この視点が



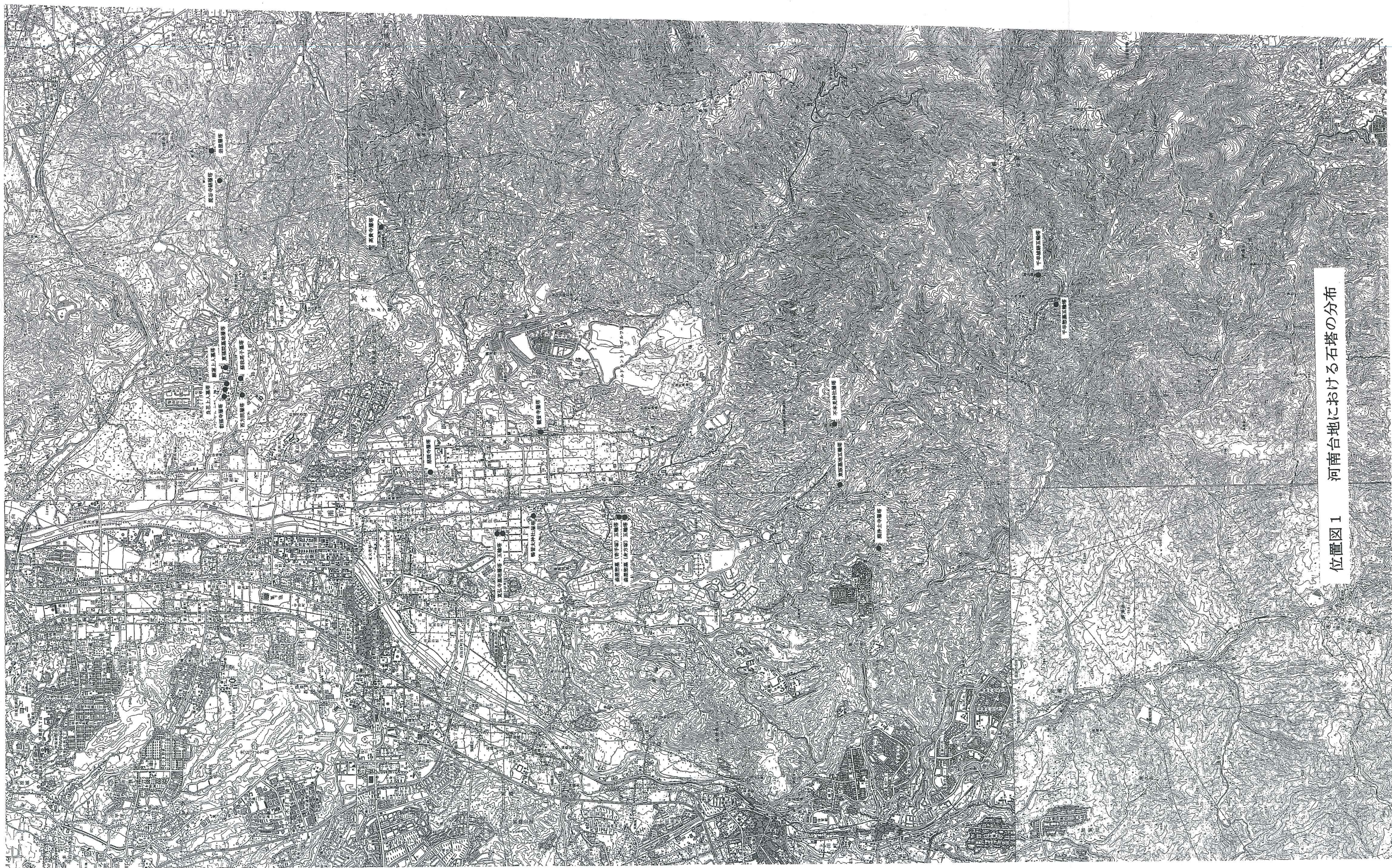
我が国の石塔研究や地域史研究に与える影響  
は極めて大きく、有益であろうことに間違い  
はなからう。

## 図版の実測図について

- ・第7章の図1～5については、福澤邦夫『千早赤阪の石造文化財』Ⅰ 千早赤阪村文化財調査報告書第4集，千早赤阪村教育委員会，1994年より、図6については、西山昌孝「寛弘寺墓地の中世石造物」『寛弘寺遺跡発掘調査概要』13，大阪府教育委員会，1994年より引用した。
- ・第9章・第10章については筆者が実測図を作成した。

## 第2章 図版





位置図 1 河南台地における石塔の分布







## 第3章 図版

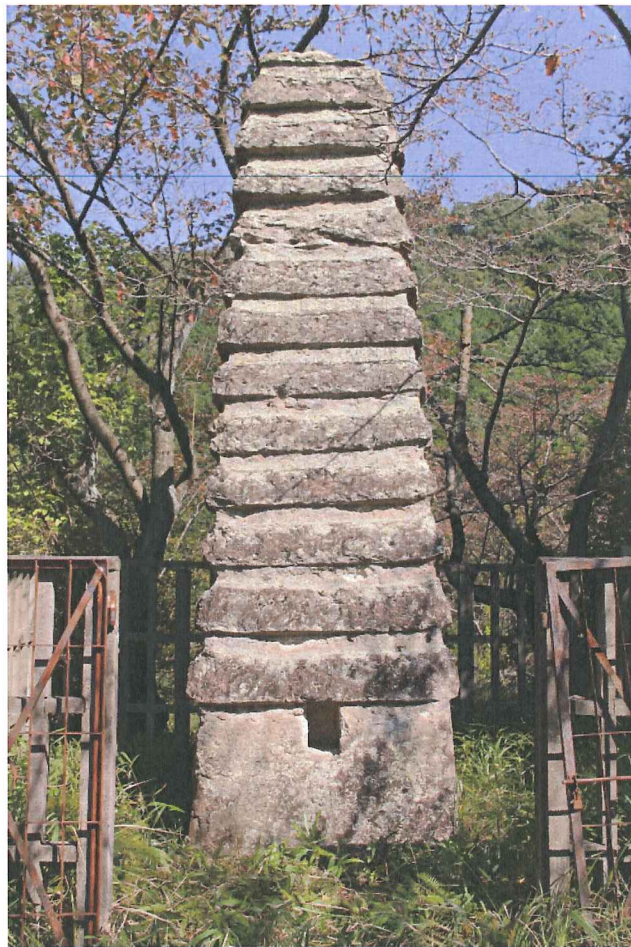


写真1 鹿谷寺跡層塔



写真2 岩屋層塔



写真3 叡福寺層塔



写真4 西方院層塔





写真5 東福院墓地層塔



写真6 良忍上人墓塔



写真7 願蓮上人墓塔



写真8 蘇我馬子墓塔





写真 9 龍福寺層塔



写真 1 0 於美阿志神社層塔





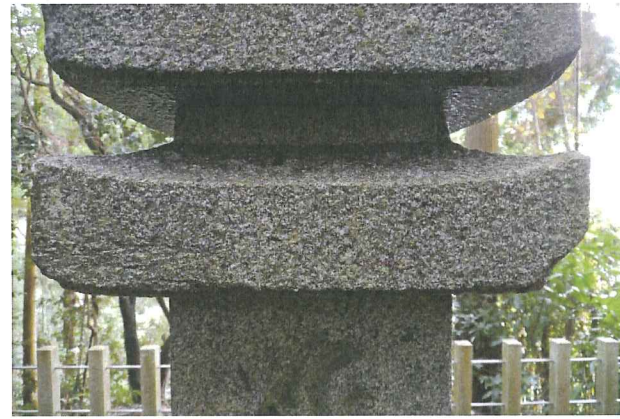


写真 1 1 般若寺層塔

写真 1 2 談山神社層塔





写真13 塔の森層塔

## 第4章 図版



写真1 寛弘寺墓地層塔

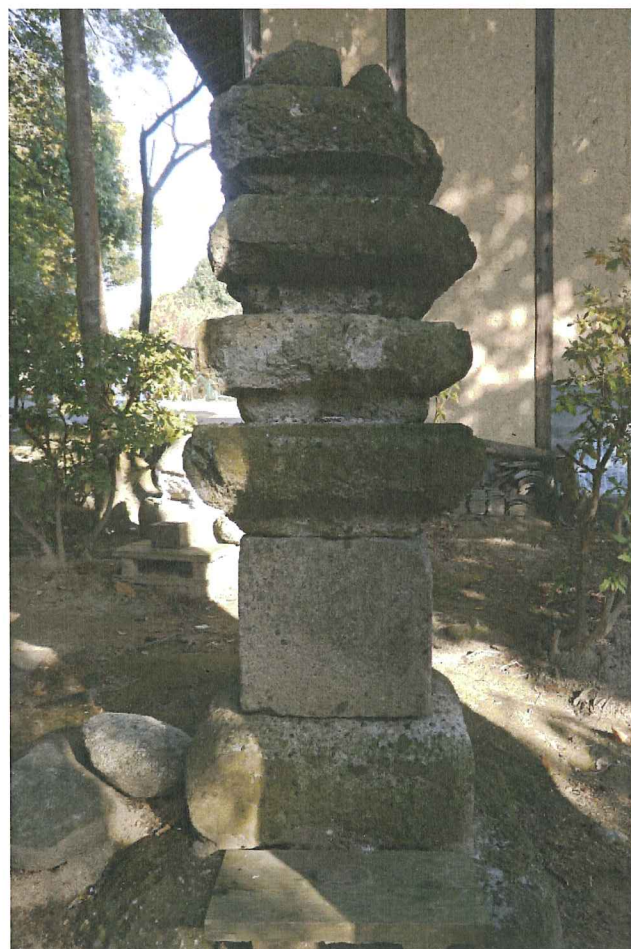


写真2 鴨習太神社層塔





写真3 観音寺層塔



写真4 慈眼寺層塔



於美阿志神社層塔



大蔵寺（延応2年（1240）



慈眼寺層塔

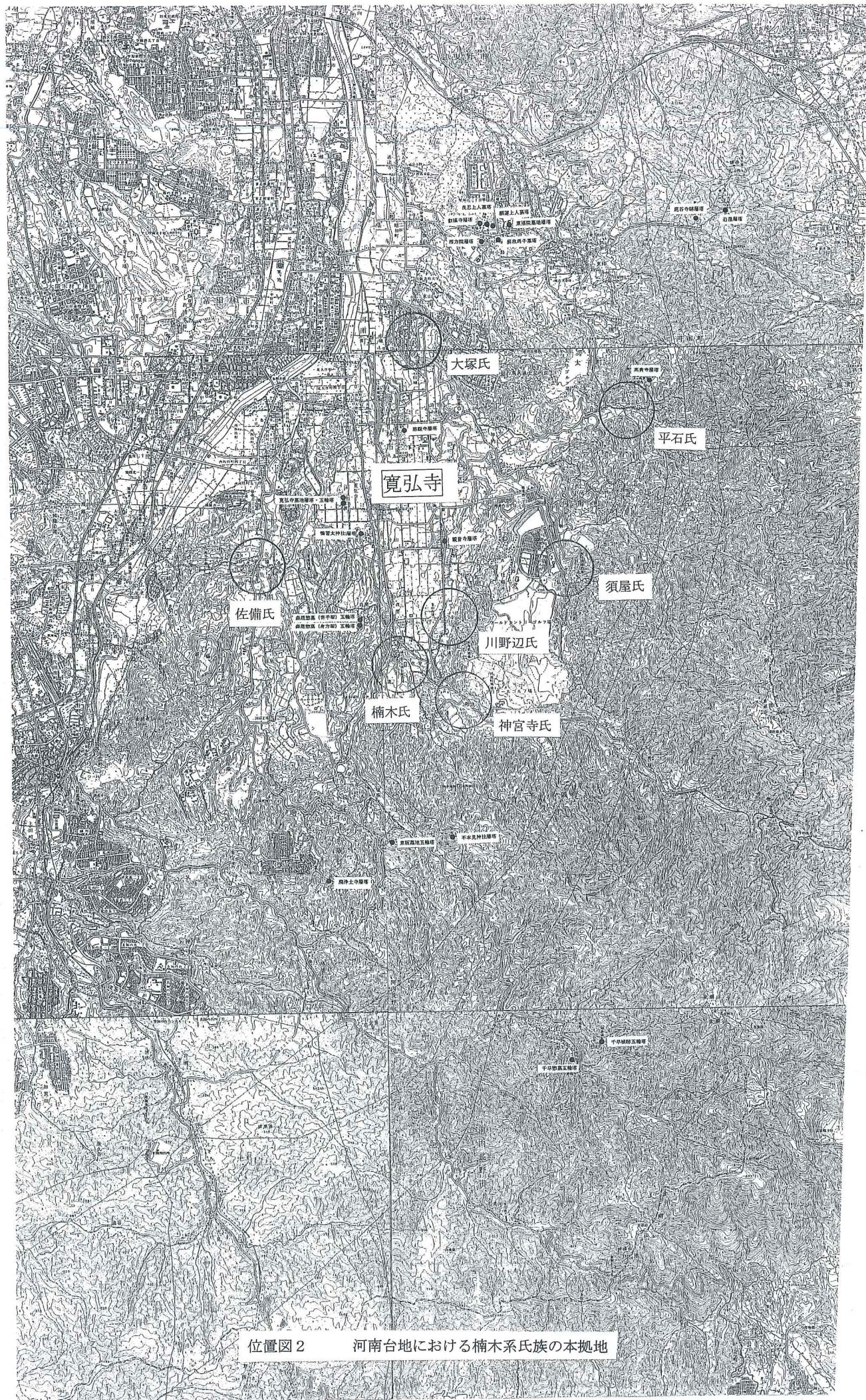
写真5 梵字の比較





位置図2 河南台地における桶木系氏族の本拠地





位置図2 河南台地における楠木系氏族の本拠地



## 第5章 図版



写真1 不本見神社遠景



写真2 不本見神社層塔

## 第6章 図版





写真1 高貴寺層塔



写真2 旧浄土寺層塔

写真2

福澤邦夫 『千早赤阪村の石造物』Ⅰ 千早赤阪村文化財調査報告書第4集, 千早赤阪村教育委員会, 1994年 より

## 第7章 図版



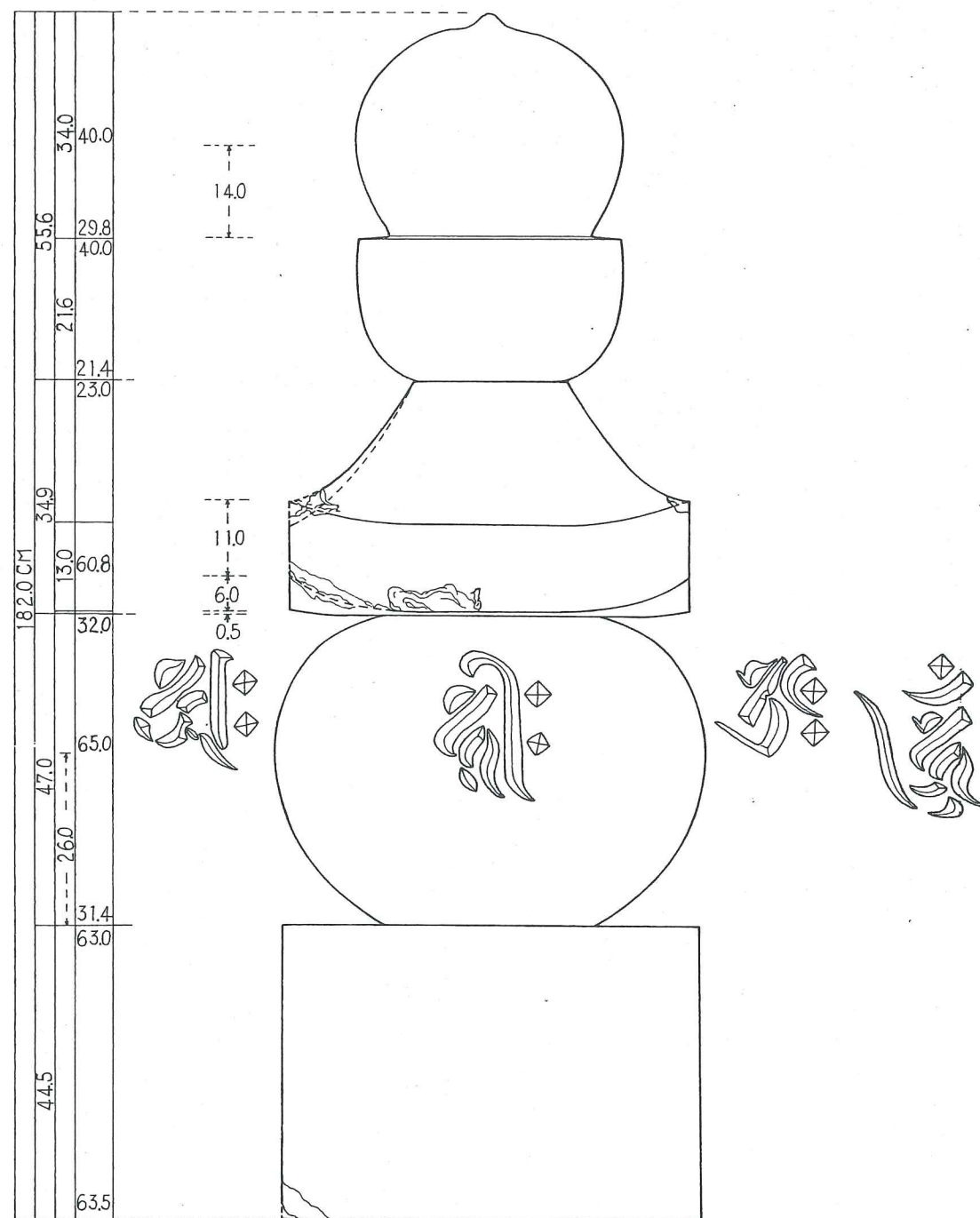


図1 森屋惣墓の無銘五輪塔（寄手塚）



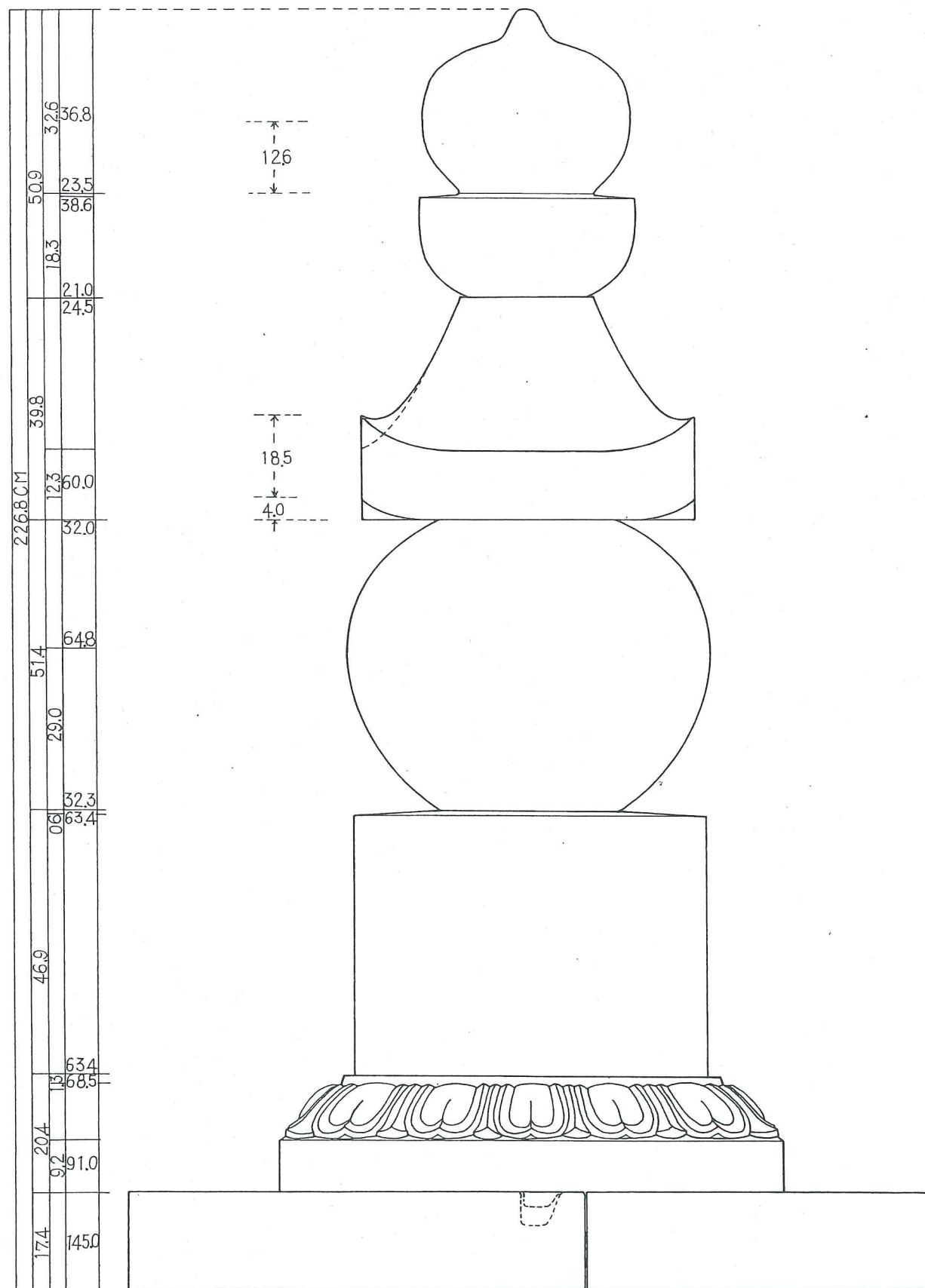


図3 千早惣墓の無銘五輪塔（毛大名）

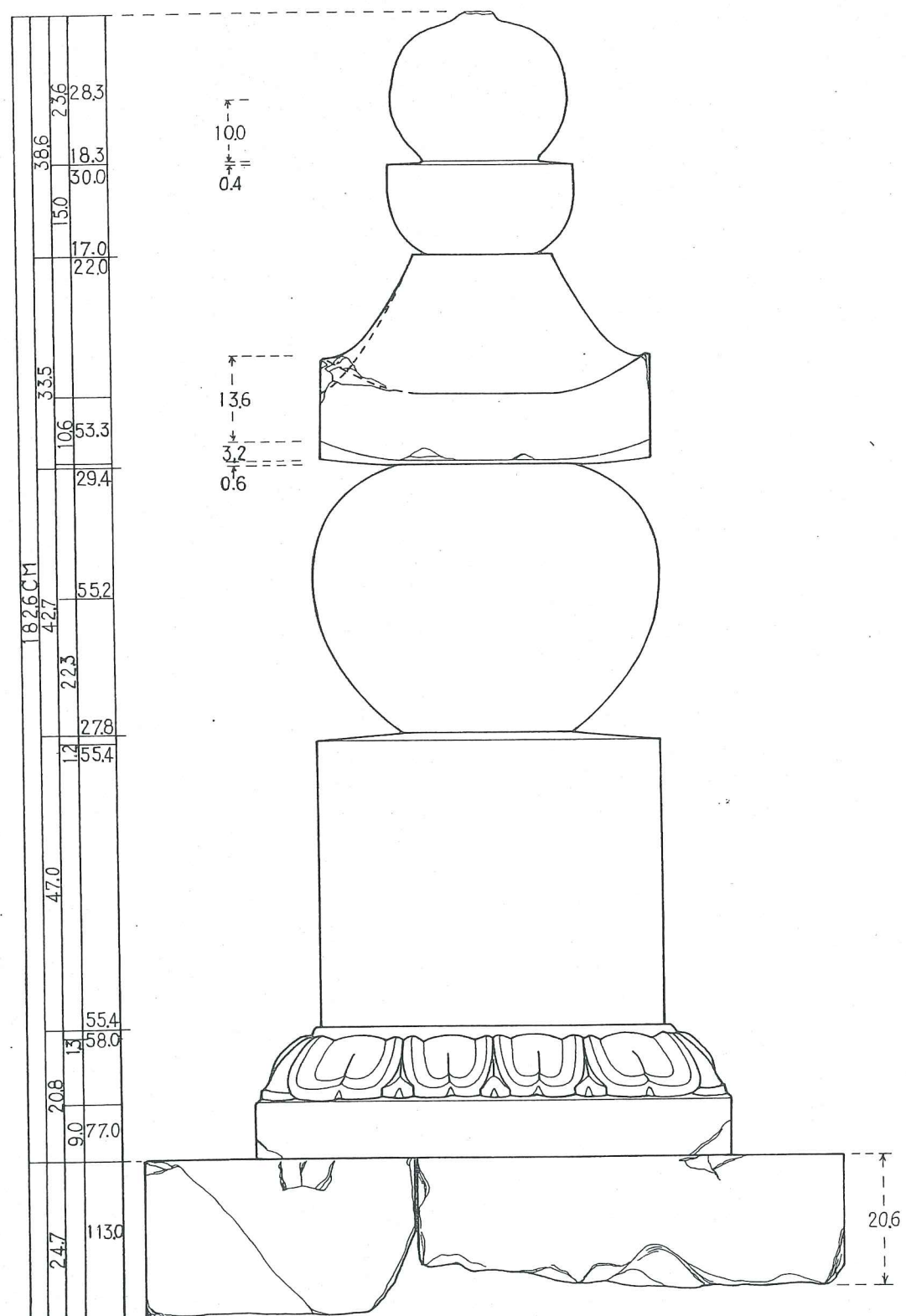


図 4 東阪墓地の無銘五輪塔

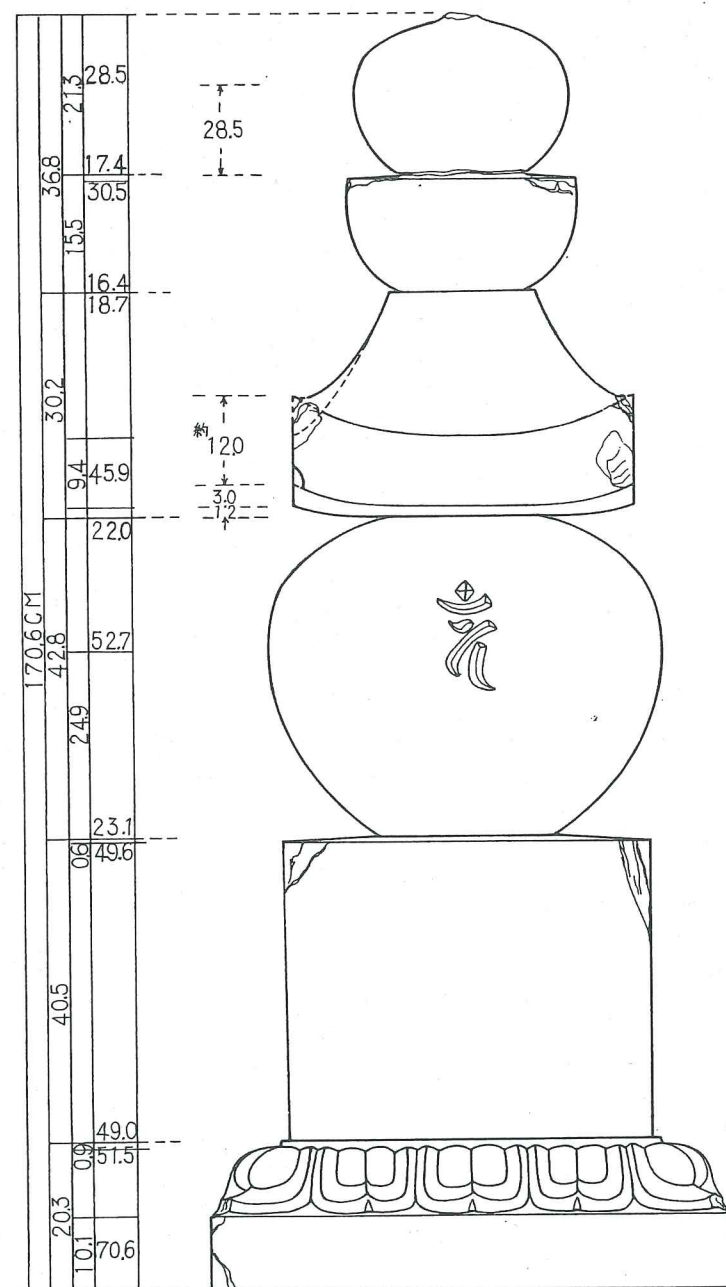


図 5 千早字ホウケント所在の無銘五輪塔（楠木正儀）

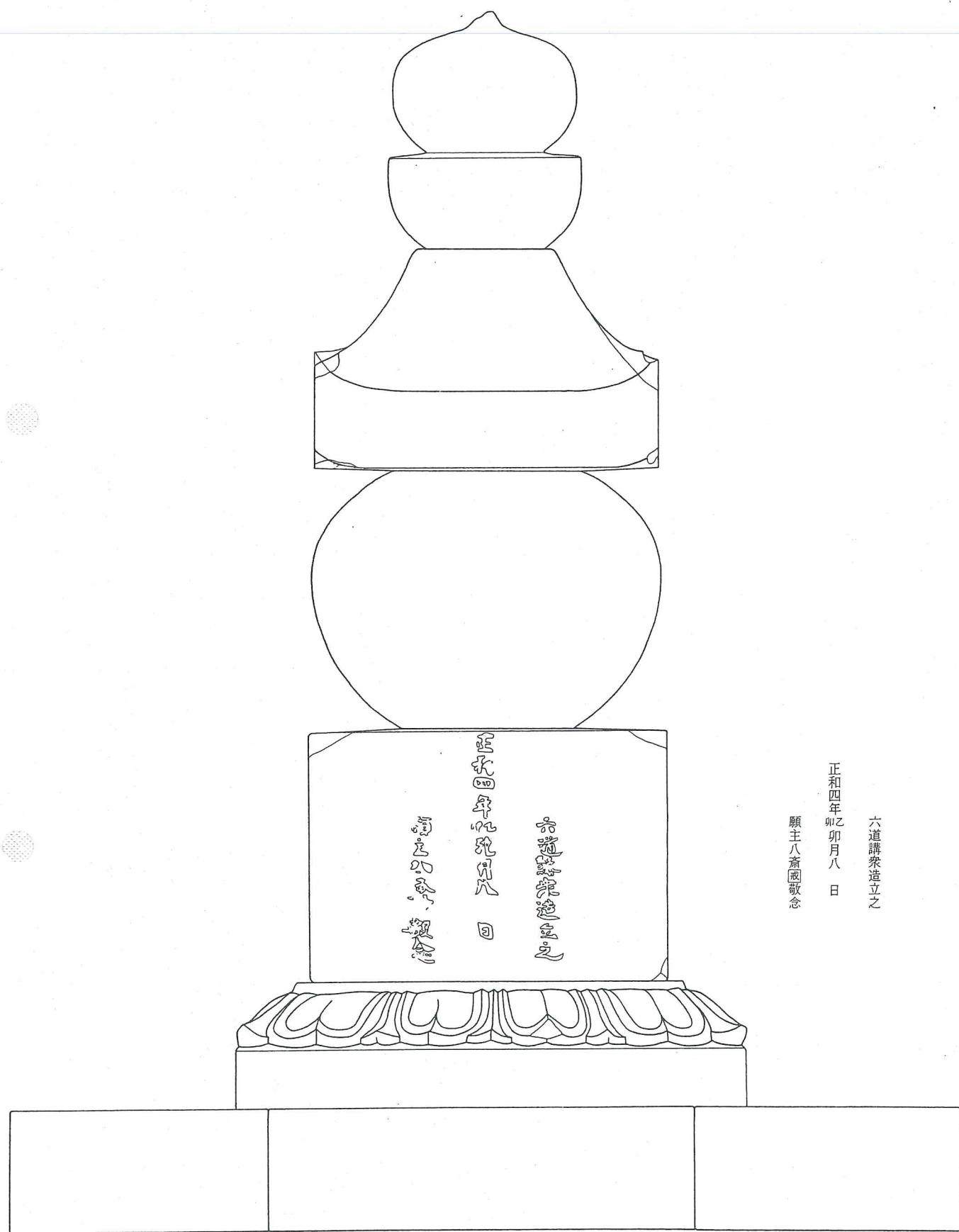


図6 寛弘寺墓地五輪塔







写真1 森屋惣墓（寄手塚）五輪塔



写真2 森屋惣墓（身方塚）五輪塔



写真3 千早惣墓五輪塔



写真4 東阪墓地五輪塔

写真4

福澤邦夫 『千早赤阪村の石造物』Ⅰ 千早赤阪村文化財調査報告書第4集, 千早赤阪村教育委員会, 1994年 より





写真5 千早城跡五輪塔

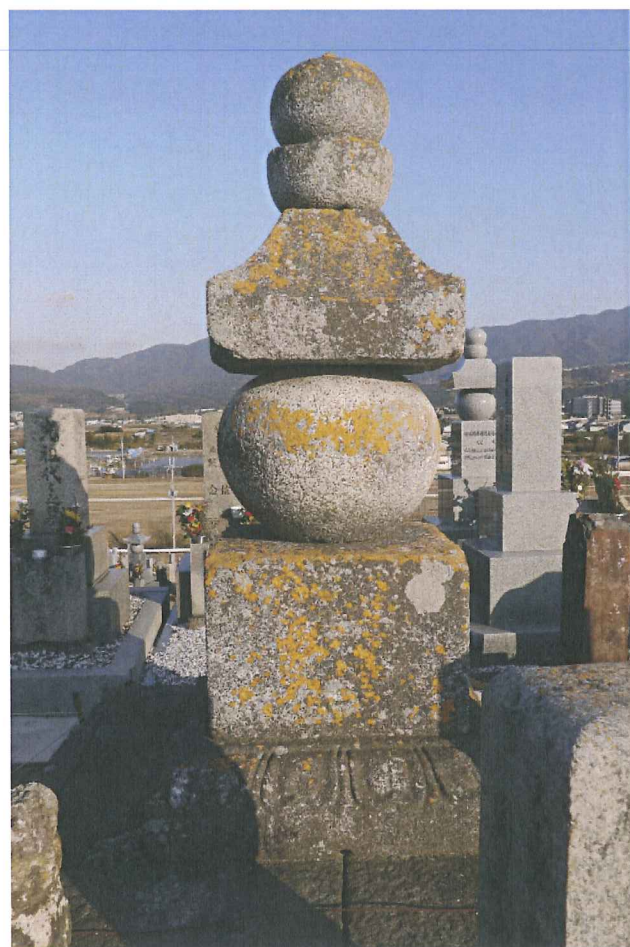


写真6 寛弘寺墓地五輪塔

## 第9章 図版



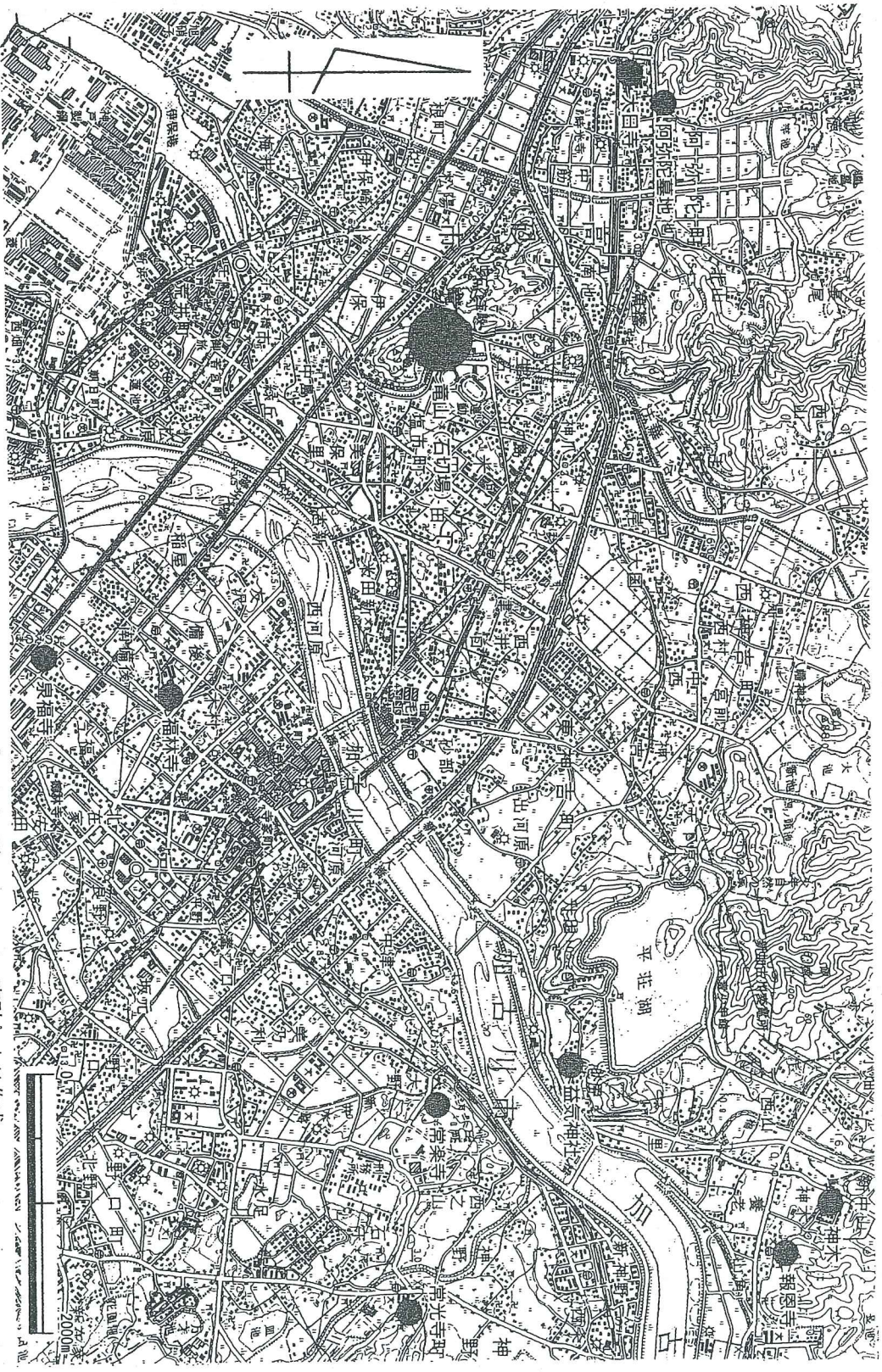


図 1 加古川下流域竜山石製中世五輪塔位置図 【国土地理院 1:50,000 高砂】より作成



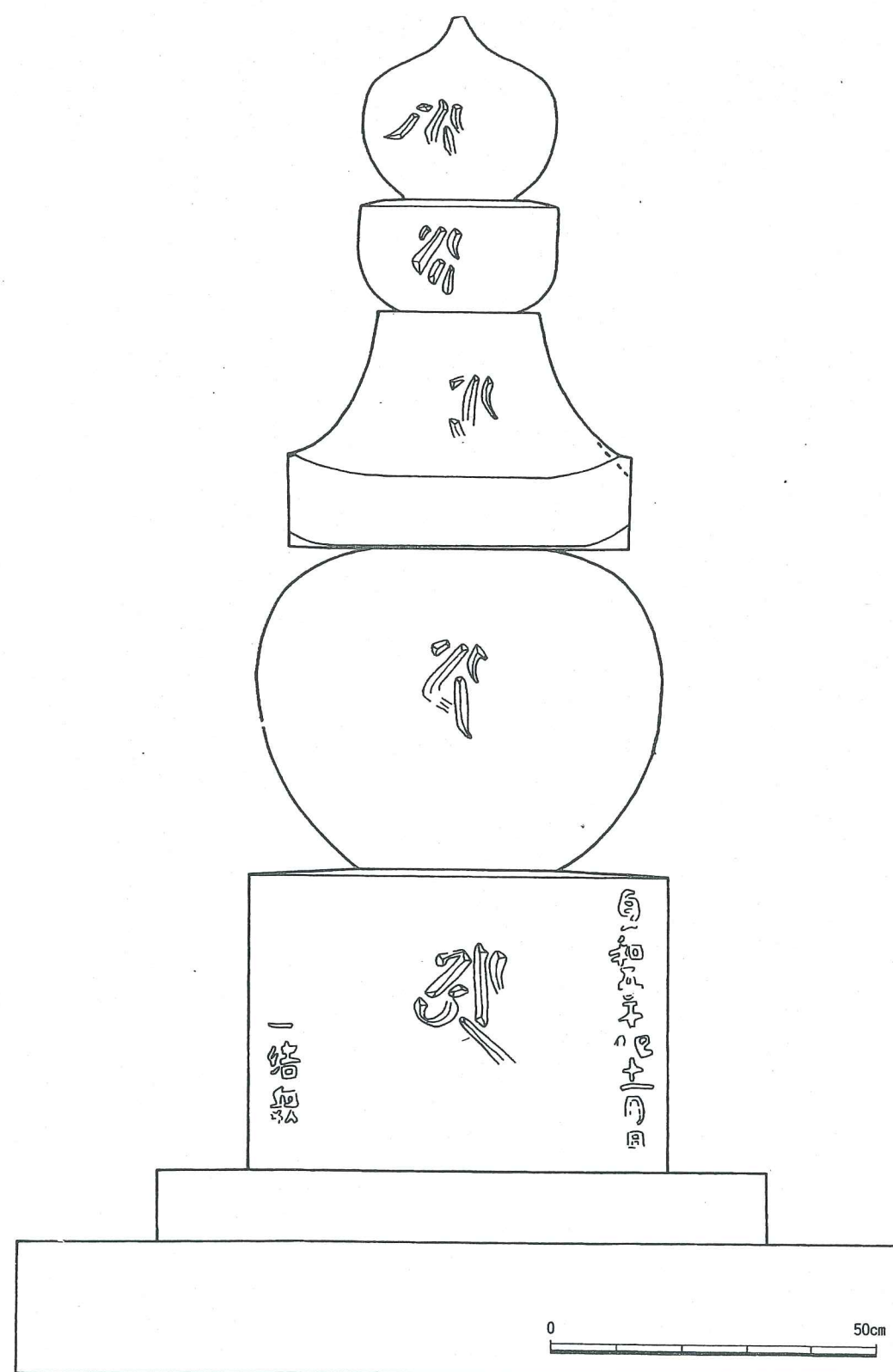


図 2 益気神社五輪塔



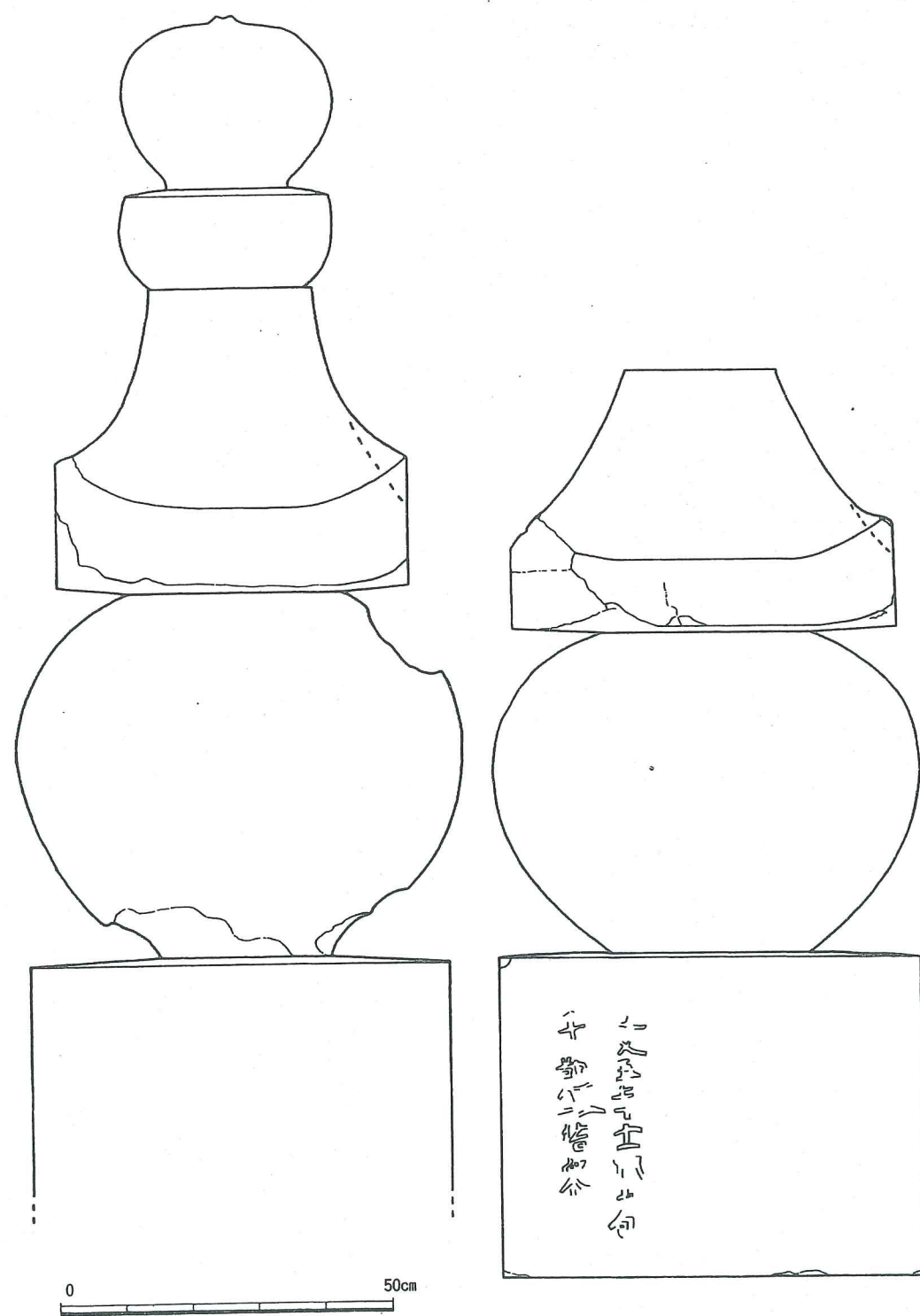


図3 泉福寺五輪塔・神木五輪塔

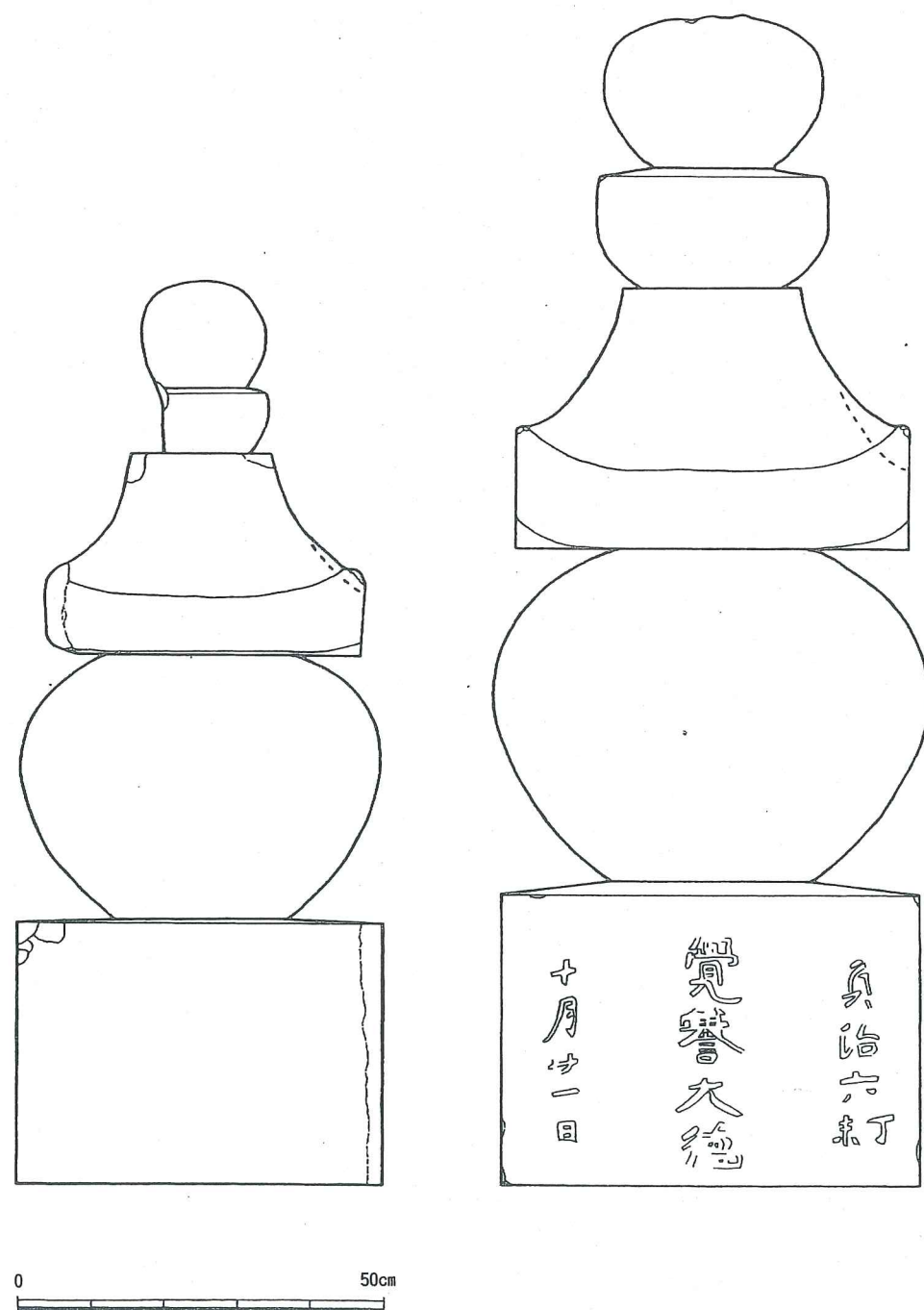


图 4 福林寺五輪塔・報恩寺五輪塔（貞治）

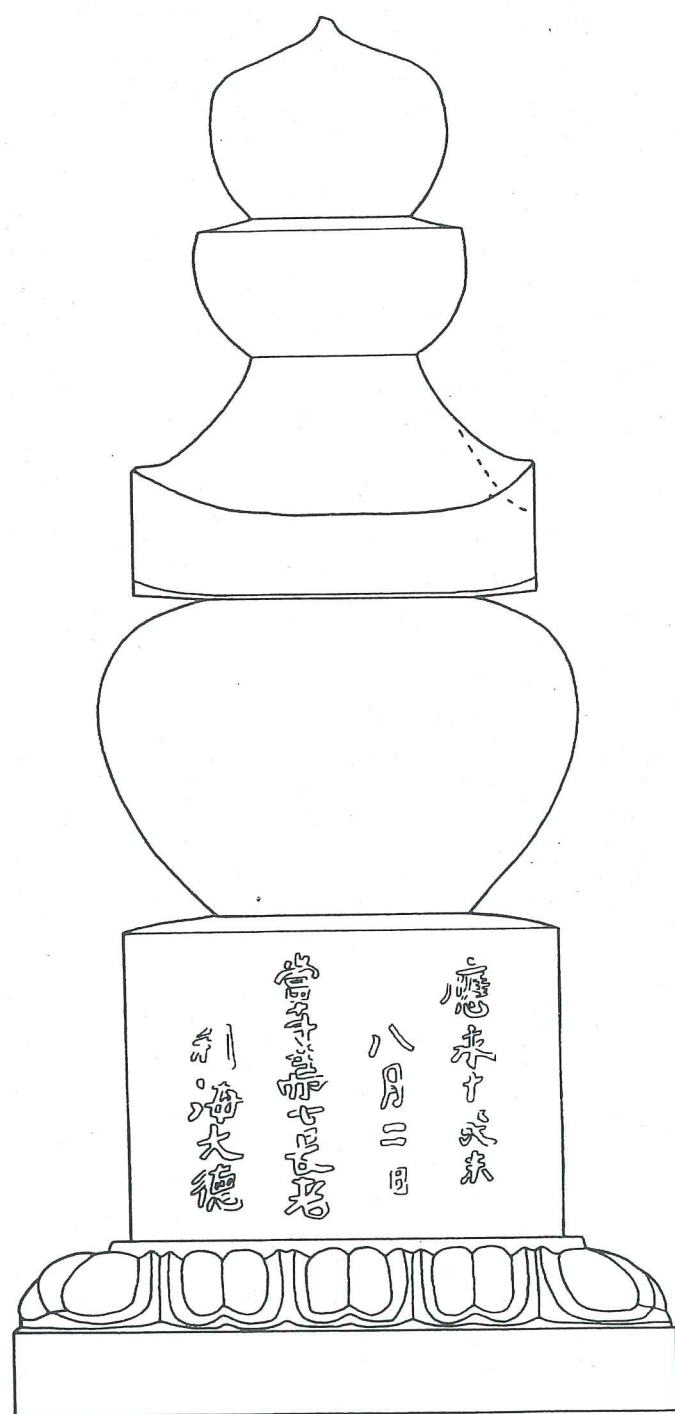


図5 木梨五輪塔・報恩寺五輪塔（応永）





写真1 益気神社五輪塔 (1349年)



写真2 泉福寺五輪塔 (1353年)



写真3 神木五輪塔 (1360年)



写真4 福林寺五輪塔 (1363年)



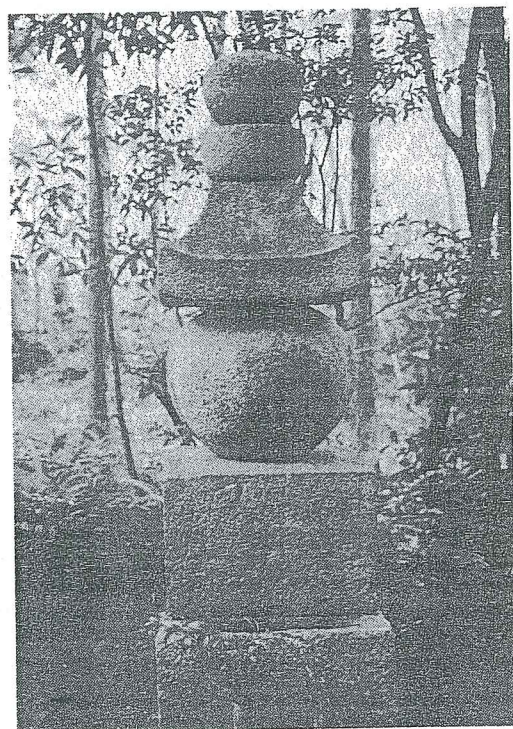


写真 5 報恩寺五輪塔 (1367年)



写真 6 報恩寺五輪塔 (1403年)



写真 7 報恩寺五輪塔 (1316年) 御影石



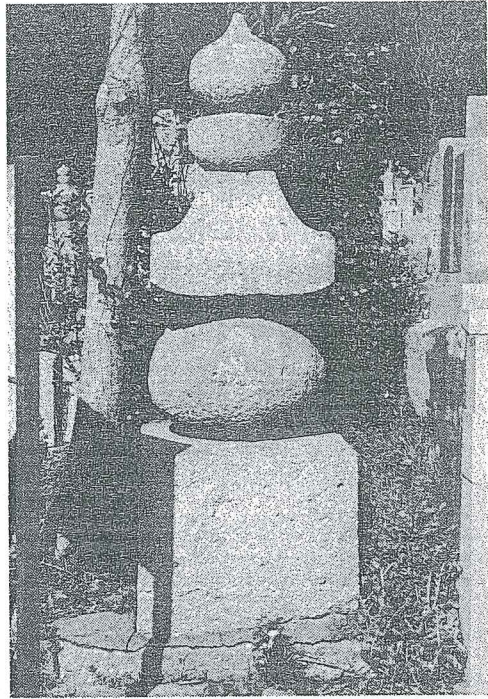


写真8 阿弥陀墓地五輪塔（1318年）



写真9 大日寺五輪塔（1342年）

# 第 1 0 章 図版



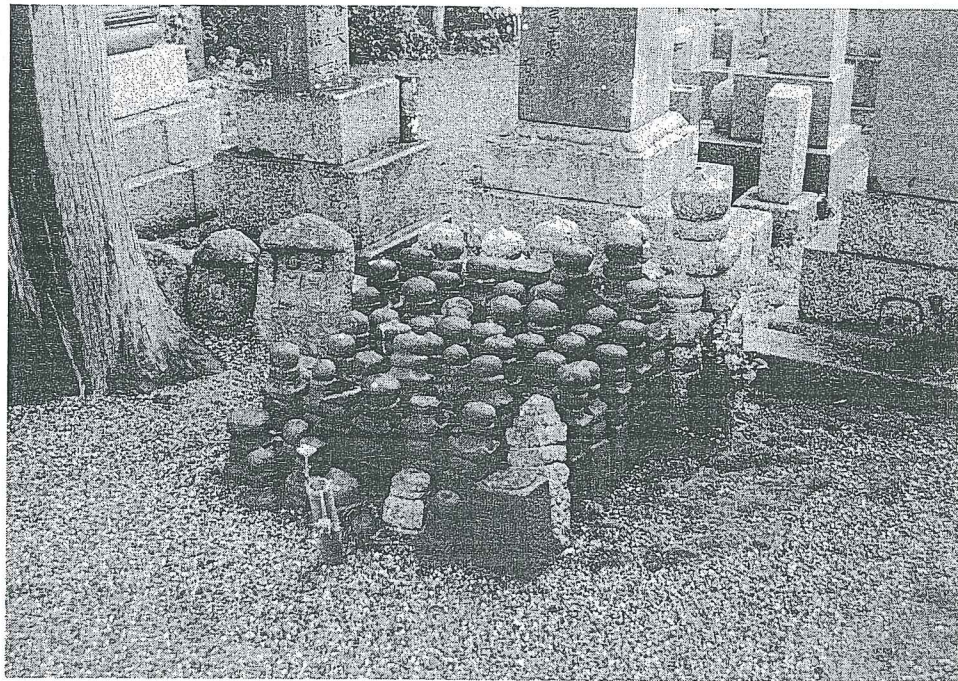


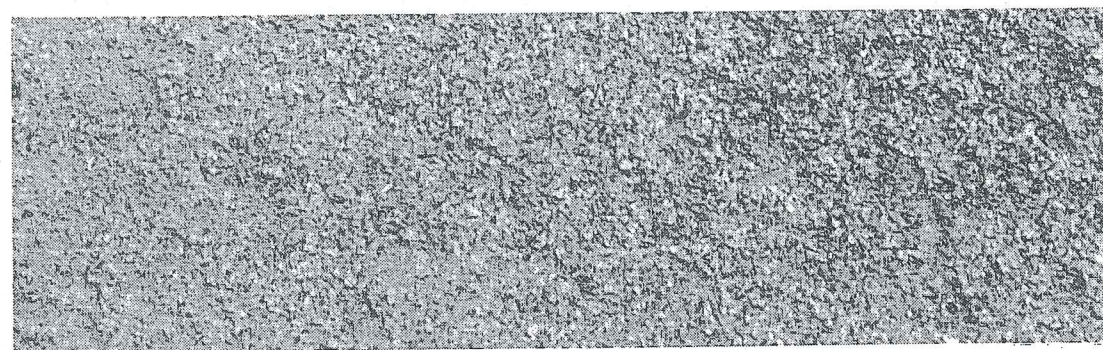
写真1 少林寺一石五輪塔群







A類



B類



C類

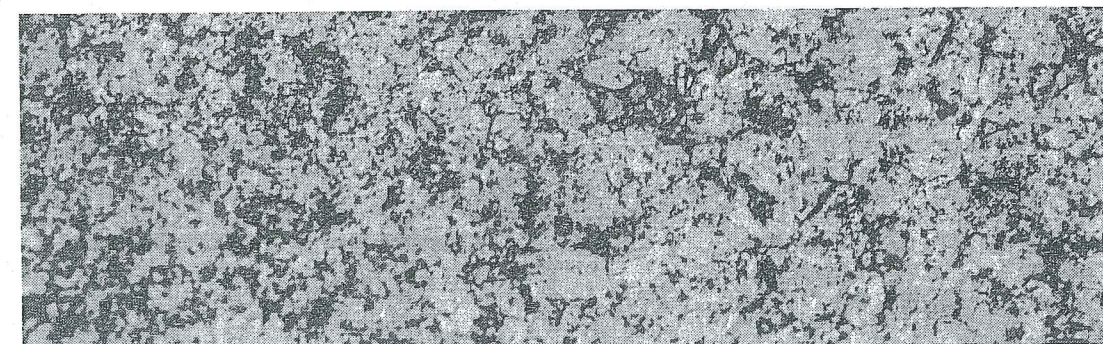


写真2 少林寺一石五輪塔群の石材





写真3 ハンレイ岩製一石五輪塔（実測図に対応）

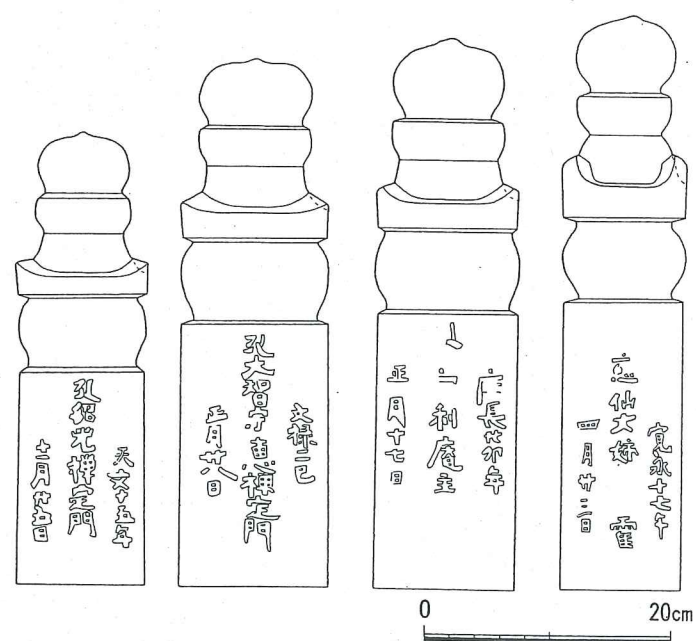


図1 ハンレイ岩製一石五輪塔実測図

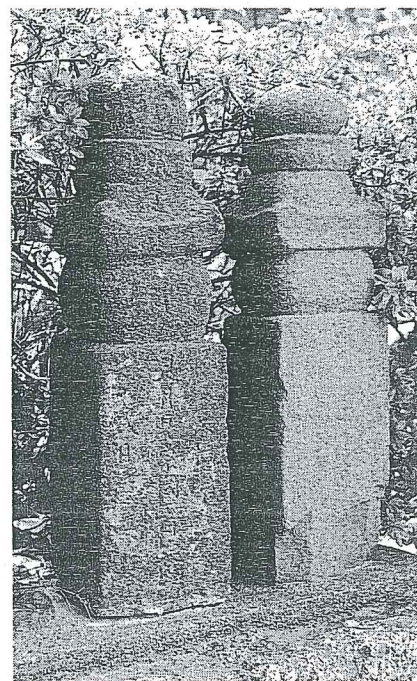


写真4 壬生寺例 (㊦ハンレイ岩、  
㊦砂岩)

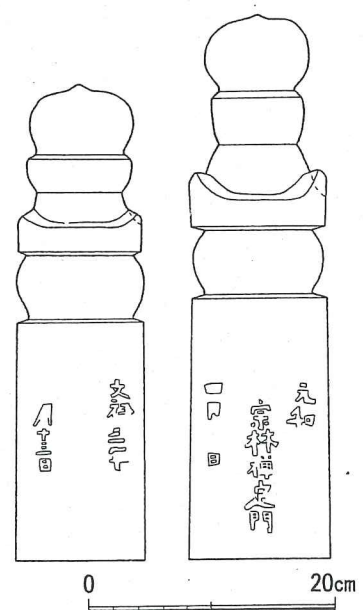


図2 砂岩製一石五輪塔実測図



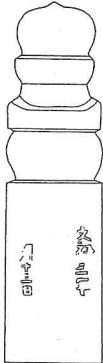

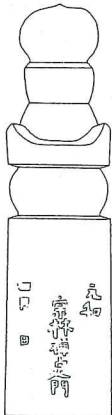
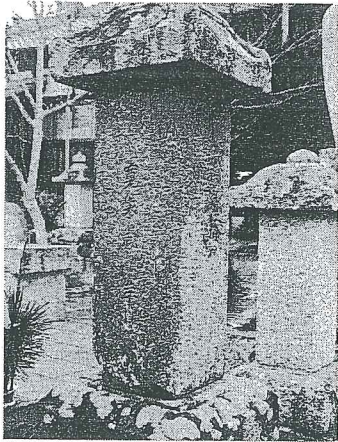
第 1 期	<p>ハンレイ岩製</p> 	
第 2 期		<p>砂岩製</p> 
第 3 期		 

図3 段階的展開